# プロレタリアートの政治的任務

レーニン著
廣島定吉譯

一九二九年刊行

會社
1071
調査濟
338017
内務省
4.10.-9
正本

存考

Lenin, Vladimir Ilich

レーニン著

廣島定吉譯

# プロレタリアートの政治的任務

東京 白揚社刊

# 目次

# プロレタリアートの政治的任務

レーニン著
廣島定吉譯

# 社會民主主義（註一）の諸任務

註一、社會民主主義——以前には、勞働者運動に關するマルクス主義理論の主張者をかく名づけてゐた。しかし、今日では、この名稱にもはや以前の意味とは一致しない。今日、社會民主主義者といへば勞働者運動における日和見主義的分子のことで、彼れ等は階級鬪爭の立場よりもむしろ階級協調の立場に立ち、從つてマルクス主義者ではなくて、エセ・マルクス主義者である。革命的マルクス主義者は、今日、自分たちをこれらの日和見主義者から區別するために共產主義者と稱してゐる。元來、マルクスおよびエンゲルスも自分たちを共產主義者と名乘つてゐた。

# 吾々は如何なる遺産分を拒絶するか？

（一八九七年末より一八九八年の初頭までに執筆され。一八九九年に發表さる）。

## 『遺産分』(註一)はナロードニキとの結合から得られたか？。

諸君は『ナロードニキ』をどう解するかと、おそらく多くの讀者は問ふだらう。『ナロードニキ』の概念には定義がないのだ。

（註一）『遺産』とは、九十年代のロシヤの流行著書において、六十年代および七十年代におけるロシヤ第一流の評論家たちの種々の意見をさう呼んでゐた。彼れ等の意見は第十八世紀における西歐の經濟學者たちの見解と甚だしく類似してゐた（もちろん、ロシヤの事情に適當に當て篏めて）。レーニンは『遺産』の特徴を次の如くあげてゐる。

一、經濟的および社會的領域における農奴制のあらゆる結果に對するはげしい憎惡。

二、啓蒙・自治・自由・ヨーロッパ流の生活形式・全般に亘るロシヤの歐化等に對する熱烈な辯護。

三、人民、殊に農民（當時まだ農民は完全に解放されて居らず、彼れ等は『啓蒙家』の時代に至つてはじめて解放されたのである）の利害の代表、農奴制とその遺物との徹廢は全汎的福利の増進をもたらすであらうといふことに對する卒直な信念、およびこれらのことをすべて促進させんとする卒直な希望。

吾々は『ナロードニキ・傾向』を次の三つの特徴を帶びた諸見解の體系だと解してゐる。（一）ロシヤにおける資本主義を、沒落現象として、退步として觀察すること。このことから、幾世紀間の舊き社會形態の『毀損』を資本主義によつて『支え』、『阻止し』、『取繕はんとする』努力と希望、およびそれに似た反動的悲鳴が生じてゐる。（二）一般的にはロシヤの經濟體制の、特殊的には村落共同態“Gemeinde”・アルテル[註三]等々を有する農民の、特質の承認。近代科學に由來する種々なる社會階級およびその衝突の概念を、ロシヤの經濟事情に適用することは必要でないと思はれてゐる。農民の村落共同態は、資本主義と比較すれば、より高級なもの、より善きものと見做され、かくして『傳統』の理想化が生じてゐる。農民の間では、あらゆる商品經濟並びにあらゆる資本家的經濟に固有なる、かの諸對立は否認され紛飾されてゐる。この諸對立と資本家的工業および資本家的農業における一層進步せる對立形態との相互聯結は否定されてゐる。（三）一定の社會階級の物質的利害への『インテリゲンチャ』および一國の法制的・政治的諸制度の依存關係の無視。この關係を否認し、これらの社會的要因の唯物論的解釋を缺くことは、『歷史をして別な方向をたどらしめ』、『その道からそらしめ』得る力となつて現はれてゐる。

（註三）アルテル。——一種の生產協同組合。ナロードニキ（人民派）は、アルテルを、ロシヤの經濟特有の一特徵、あまつさえ社會の社會主義的變革のための一の支柱點とさへ思つてゐた。

以上の如くに吾々は『ナロードニキー傾向』を解してゐる。讀者諸君は、吾々がこの名稱を廣い意味に、『ロシヤの學徒』のすべてが使用してゐる通りに用ひてゐることを見られやう。そしてロシヤの學徒が反對するのは諸見解の全體系であつて、その一人々々の代表者ではない。これらの一人々々の代表者の間には、もちろん時折り非常に著しい相違がある。何人もこの相違を見落しはすまい。だが、以上にあげた世界觀の特徴は、ナロードニキの種々樣々な代表者、さあ、言はば……ユソフ氏から始まつてミハイロフスキー氏に至るまで、その總體に特有なものである。ユソフ、スサソノフ、ヴェー・ヴェーの諸氏……その他は、(註四) 以上にあげた彼れ等の見解の消極的特徵に加ふるに、たとへばミハイロフスキー氏、もしくは今日の『ルシコエ・ボガットヴォ』(註五)(ロシヤの富)の他の寄稿家たちには缺けてゐる、もう一つの消極的特徴を以てする。狹い意味のナロードニキとナロードニキ一般との間のかういふ相違を否認せんとするならば、それはもちろん誤まりであらうが、しかし、すべてのナロードニキの基本的な社會經濟的意見が、一般に、以上にあげた主要點においては一致してゐることを認めまいとするのは、それ以上に誤まりであらう。けれども、『ロシヤの學徒』は、それら〔ナロードニキの根本見解〕からさらに拙惡な方面への『悲しむべき錯行』のみならず、なかんづくこれらの根本見解を拒否するのだから、彼れ等は、明かに、『ナロードニキー傾向』なる概念を廣い意味に使用すべき充分の權利を有してゐる。彼れ等は啻にさうすべき權

利を有するのみならず、全くさうせざるを得ないのである。

（註四）ユソフ。――カブリッツの匿名、はじめはバクーニン信者で、後に反動家となり、ユダヤ人排斥主義に乘り上げた。

スサソノフ。――同じく反動に乘り上げたナロードニキの一人。

ヴェー・ヴェー。――ヴェー・ペェー・ヴォロンゾフの匿名。八十年代および九十年代におけるナロードニキの指導理論家の一人。彼れはナロードニキのすべての主要なる機關紙に寄稿してゐた。彼れはマルクス主義者に敢然と反對したので、ロシヤにおける初期の殆どすべてのマルクス主義者の批評論文の對象となつた。レーニンは彼れの意見に對する批判に多大の注意を拂つてゐた。ヴェー・ヴェーの見解に對する一の系統的な批評を與へた人はプレハーノフであつた。

（註五）『ルシコエ・ボガットヴォ』（ロシヤの富）。――九十年代以來ナロードニキが所有してゐた月刊雜誌。マルクス主義に對する闘爭の主要なる機關紙。はじめにクリウェンコの編輯の下に出版され、後にはエヌ・ミハイロフスキーとヴェー・コロレンコの編輯の下にあつた。九十年代以來、この機關紙には急進的なナロードニキの知識階級分子が集まり、これらの人々は後に『ナロードニキ－社會主義者』（ＮＳ）（人民社會主義者）の政黨へ組織され。

以上に記したナロードニキの根本見解を吟味する場合、吾々は、先づ第一に、謂ゆる『遺產分』なるものはこれらの見解とは何らの關係もないことを確めておく必要がある。ナロードニキとは何

らの共通點もなく、資本主義に關する問題を一般に提出せず、ロシヤ特有の運命、農民の村落共同態等々を少しも信ぜず、インテリゲンチャや法制的－政治的諸制度のなかに、何人にも『その道を改めさせ』得る要因を認めない、『遺産分』の牢固たる代表者や番人の大多數がゐる。『ウェストニク・ヨーロプ』（ヨーロッパの使徒）(註六)の主筆は、遺産分の傳統の踏み外し以外には何ら非難さるべきところなき一人の人間の實例としてあげられる。これに反して、その意見に從ひ『ナロードニキ・傾向』の前述の根本原則に投合して、きつぱり『遺産との緣を絶つてゐる』人々もゐる。ミハイロフスキー氏が指摘してゐるゼー・アバラモフ氏とか、ユソフ氏とかがさうである。かの『ロシヤの學派』が防戰するナロードニキ・傾向なるものは、（法律語を用ひれば）遺産遺言狀が執行された時代、すなはち六十年代にはまだ一般に存在しなかつた。ナロードニキ・傾向の萠芽と端初とはもちろん六十年代に存在したばかりでなく、すでに四十年代にも、あるひはそれ以前にさへ早くも存在してゐたのである。* しかし、ナロードニキ・傾向の歷史は今日の吾々には少しも用はない。吾々にとつては、既に述べた如く、以上に記述した如き六十年代の『遺産』なるものは、ナロードニキ・傾向とは何らの共通點もないこと、言ひ換へれば、この兩者の見解は元來何ら共通したものを有せず、それらは別々に違つた問題を取扱つてゐることを確めてをくことだけが重要である。非ナロードニキの間に『遺産』の番人が居り、また遺産と『緣を切つた』ナロードニキもゐる。たしかに、

* ツガン・バラノーフスキーの著書『ロシヤの工場』（ペテルスブルグ，1898年刊行）を參照せよ。

また、『遺産』を守つてゐる、またはそれを守らうとする要求の聲をあげてゐるナロードニキもゐる。吾々がナロードニキ・傾向と遺産分との關係について語るのもそのためである。さて吾々はこの關係をふり返らう。

（註六）『ウエストニク・ヨーロプ』（ヨーロッパの使徒）。――一八六六年に創設された一月刊雜誌で、ロシャの社會におけるブルジョア自由主義の意見を代表してゐた。この雜誌は自由主義の意味における政治的改革をロシャのための主要任務と見做してゐた。同誌には『資本論』第一卷に關する深刻な批評が載つた。

第一、ナロードニキ・傾向は、社會的思惟をして、遺産の番人たちが一部はまだ（彼れ等の時代に）提出し得なかつた種々の問題、しかし一部はまた彼れ等に特有なる眼界の狹隘のため提出しなかつたし、現にまた提出してゐない種々の問題に當面せしめたことにより、遺産分に比して優れた一歩前進をとげたのである。これらの問題の提出はナロードニキ・傾向の偉大な歴史的一功績であり、且つこれらの問題を解決した（例の如くにしろ）ナロードニキ・傾向が、それによつて、ロシャの社會的思惟の進歩的傾向の間に一の主位を占めたことは、全く當然にして明白なことである。

だが、ナロードニキ・傾向によるこれらの問題の解決は、西ヨーロッパにおいては夙くの昔に見捨てられた時代おくれの理論に立脚し、資本主義に對するロマンチックな小ブルジョア的批判を論據とし、ロシャの歴史および現實の最も大切な事實の無視を論據としたもので、絶對に價値なきも

のたることを證明した。ロシヤにおける資本主義とそれに特有なる諸對立との發展がまだ貧弱であつたかぎり、資本主義に對するかういふ素朴な批判もどうにか持ちこたえることができた。ロシヤにおける資本主義の近代的發達、ロシヤの經濟史および現實に關する我らの知識の近代的立場、すなはち社會學的理論に對する近代的諸要求は、ナロードニキ・傾向によつては絶對に滿されぬ。嘗ては資本主義に關する最初の問題提起として一の進歩的運動であつたナロードニキ・傾向は、今日では、社會に關する思惟を混亂させ、停滯とアジア流のあらゆるたわ語とを助成する、一の反動的な有害な理論である。資本主義に對するナロードニキ・批判の反動的性質は、現在のナロードニキ・傾向に對し、遺産分の忠實な保管に終始した世界觀にも劣る如き特徴をすら與へた。* さうなつてゐることを、吾々は、以上にあげたナロードニキ・世界觀の三つの根本特徴の各々を分析して直ちに示すことゝしよう。

第一の特徴は、ロシヤにおける資本主義を、沒落現象として、退歩として觀察することである。ロシヤにおける資本主義の問題が提出されるや否や、我が國の經濟發達が一の資本主義的發達であることは直ちに明かとなつたのである。ナロードニキはこの發達を退歩および誤謬として、國民の全歴史的生活によつて定められたと稱せられる道からの錯行として、幾世紀間の舊き傳統を經て清められた道からの錯行等々として極印づけた。與へられた社會的發達に對する『國民開化論者』の

* 私は既に經濟的ロマンチークを論じた一論文のなかで，反動的とか小ブルジョア的とかいふ用語が全く一定せる歴史的および哲學的意味を有してゐるにも拘らず，我らの論敵はこれらの名稱を論戰上の言ひ廻しだと解するとき．彼れ等は著しい短見を曝露してゐることを折りにふれて述べておいた。

輝かしき信仰の代りに、その發達に對する疑惑が發生した。歷史的樂觀說と暢氣との代りに、事物がそのたどつてきた進行をつゞければつゞけるほど、新たな發達の提起せる諸々の問題を解決することは、ますます面倒に、ますます困難となるといふことに立脚する悲觀說と憂鬱とが發生した。かくてこの發達を『抑え』且つ『阻止せん』とする要求が起り、ロシヤのおくれた狀態は一の幸福であるといふ理論が起つてゐる等々。ナロードニキ・世界觀のこれらすべての特徵は『遺產』と何らの關係もないばかりか、それと一直線に矛盾してさえゐる。ロシヤの資本主義を『正道からの錯行』として、沒落現象等々として解釋することは、ロシヤの全經濟的進化の曲解に導びき、我らの眼前に演ぜられつゝある全『分解作用』の曲解に導びくものである。ナロードニキは、資本主義による古來の傳統の毀損を抑え且つ防止せんとする希望にとりつかれて、奇怪な歷史的無策に陷ひり、この資本主義の背後には、勸勞者の狀態を苦しめる壓制と人身的從屬との無數の形態と結びついた同一の搾取以外には何物もないこと、社會的生產、從つてまた社會生活のあらゆる領域における退屈と停滯以外には何物もないことを忘れてゐる。自己のロマンチックな小ブルジョア的立場から資本主義に反對してゐるナロードニキは、すべての歷史的現實を放擲して、いつも資本主義の現實を資本主義前期の狀態に關する虛構と比較してゐる。與へられた社會的發達の進步性に對し輝かしき信仰を有し、拭ふべからざる憎惡を徹頭徹尾古來の因習の遺物に向け、能ふかぎりよくするためには

これらの遺物を掃蕩すれば足るといふ信念を抱いてゐた六十年代の『遺産』――この『遺産』は以上にあげたナロードニキの諸見解とは一般に何らの關係もない、否、それと直接對立してさへゐる。

ナロードニキ・傾向の第二の特徴はロシヤ獨特の運命に對する信仰であり、農民および村落共同態等々の理想化である。ロシヤ獨自の道に關する説はナロードニキをして古びた西歐の理論にしがみつくことを餘儀なくせしめた、つまり彼れ等をして、西歐文化の幾多の成果を著しい輕卒さを以て取扱ふことを餘儀なくせしめたのである。すなはちナロードニキは、吾々が文明人のこれかあれかの特徴を持ち合せてゐないにしても、その代り世界に經濟の新方法を指し示すことが、吾々に『授けられ』てゐるといふことを以てあまんじた。西歐の思惟が提供したところの、資本主義およびその一切の現象に關するかの分析は、神聖なるロシヤに關しては受け容れられなかつた、否、むしろ反對に、あらゆる努力は、ロシヤの資本主義について西歐の資本主義とは違つた結論が引き出されることを可能ならしめた口實を工夫することに向けられた。ナロードニキはかういふ分析の著者たちの前に兜を脱ぎ……そして舊態依然として、これらの著者たちがその終生を闘ひつゞけてきたところの浪漫主義者たるにとゞまつた。すべてのナロードニキに共通なるロシヤ獨自の道に關するかくの如き説は、重ねて言ふが、『遺産』とは何ら共通したところもなく、否むしろそれと一直線に矛盾してさへゐる。『六十年代』は反對にロシヤの歐化に努めたのであつた。それはヨーロッパ

の文化へのロシャの進入を信じ、その文化を何一つ獨創的ならざる我が國の地盤の上に移すことに腐心した。ロシャの特殊性に關するすべての說は、六十年代およびその傳統の精神と完全に對立してゐる。ナロードニキによる村落の理想化と辯護とは尙ほさらこの傳統とは一致してゐない。先資本主義的諸關係の時代におけるその他のあらゆる村落、その他のあらゆる農村から區別される何か特殊なものを、すべてを犧牲にして、ロシャの村落に見出さうとするこの噓つぱちな理想化は、地味な實在主義的な遺産の傳統とは露骨に矛盾してゐる。資本主義がます〳〵廣くます〳〵深く發達すればするほど、すべての商品資本主義社會に固有なる種々の矛盾がます〳〵多く農村に現はるれば現はれるほど、一方では農民の『村落共同態精神』および『アルテル精神』等々に關するナロードニキの甘つたるいお伽噺と、他方では村落ブルジョアジーと農村プロレタリアートとへの農民層の事實上の分裂との間の對立は、ます〳〵露骨に、ます〳〵尖銳に現はれて、農民の眼を以て事物を觀察したナロードニキは、感傷的な浪漫主義者から小ブルジョアジーの空論家へとます〳〵急速に轉化して行つた。といふのは、小生產者は今日の社會では商品生產者へ轉化するからである。村落の噓つぱちな理想化と『村落共同態精神』に關するロマンチックな夢想とは、ナロードニキが所定の經濟的發達から生ずる農民層の現實の窮迫を輕く見たといふ結果に導びいた。理論においては、出來るかぎり傳統の權力を唱へることができたが、實際においては、どのナロードニキも、今に至

るまでなほ我が國の農民を緊縛してゐる封建主義の舊遺物の掃蕩は、資本主義的發達に對してのみ自由なる道を拓くにすぎないといふことをよく感じてゐた。資本家的進步よりもむしろ停滯を！——これこそ要するに農民問題における各ナロードニキの立場である。もつともナロードニキのすべてが、ヴェー・ヴェー氏の如く一直線にそれを公然と且つ卒直に言明するだけの勇氣を持ち合せてゐるわけではないが。『その分割地と村落共同態とに縛されてゐる農民、もつと生産的で彼れ等のためにもつと有利な場所で自分の勞働を費すべき可能を持たぬ農民は、或る程度に、嘗て彼れ等を封建的權利の支配から脫せしめた、かの狹隘な、群居的な、非生產的な生活形式を今尙ほ固執してゐる』。これは『遺產』の一人の代表者の立場であり、一人の『啓蒙家』の特徵であつた。——『農民は農村における資本主義のために道を切り拓くよりも、傳統的な家長的生活形式のなかに停滯してゐる方がはるかによい』——これはもとより各ナロードニキの見解である。實際、農民共同態の身分的隔離、並びにその團體擔保、土地賣却の禁止、割り當て地の放棄の禁止等が、近代經濟の現實、近代商品資本主義的諸關係およびその發達と極めて露骨に矛盾してゐることを否認せんとしたナロードニキは、おそらくただの一人もゐるまい。この矛盾を否認することは不可能であるが、しかし事實は、ナロードニキこそ正しくこの問題の提出を、農民の法制的地位と經濟的現實並びに所定の經濟的發達とのかういふ對比を死ぬほど怖れてゐたのである。ナロードニキは、現實には存在しな

い、彼れ等の手で空想的に作り上げられた資本主義抜きの發達を根氣よく信じようとしてゐる。從つて……從つてまた彼れ等は資本主義的方向に實現される發達を阻止しようとする。農民共同態の身分的隔離、團體擔保、土地の賣却および放棄權等の問題に對し、ナロードニキは『傳統』の運命のための極度の用心と憂慮とを以て對してゐるのみならず、いやそれどころか、ナロードニキは、官憲が土地を農民に賣りつけることを禁止してゐるのを歡迎すべきことであると稱するまでに墮落してゐる。『農民は愚鈍である』と、―吾々はエンゲルハルト(註七)の言葉を以てかゝるナロードニキに語ることができる、『農民はひとり立ちではやつてゆけぬ。誰れかが農民のために氣をつけてやらなければ、彼れ等はすべての森林を燒き拂ひ、すべての鳥類を殺し、すべての魚類を捕え、土地を荒らし、みづから野たれ死にするであらう』。かく主張することによつて、ナロードニキは直接その遺産を『放棄し』、さうして反動家となつてゐる。だが、注意せよ！　農民共同態の身分的隔離へのかくの如き侵害は、經濟的發達の進展と共に、農村プロレタリアートのせつぱ詰まつた必要事となるうし、他方また、それから生ずる不快事は村落ブルジョアジーにとつて決してそれほど大きなものでもなからう。身を立てることを心得てゐる農民は、ひそかに土地を借り受け、他の村で取引を開き、いつ何ん時でも商用に旅立つことができる。だが、帳簿面通りに、主として自己の勞働力の上がり高で生活してゐる『農民』にとつては、一片の土地と村落共同態とへの繫縛は、彼れの經濟

的活動の非常なる制限を意味し、有利な雇主を見出すことの不可能を意味し、いつでも少なく支拂つて、ありとあらゆる壓制の方法を案出する買ひ手のために、自身の勞働力をどこかで賣物に出すことの必要を意味する。――ナロードニキがひとたびロマンチックな夢想に耽り、傳統の支持と保存（經濟的發達に抗して）とを自己の任務とするや否や、彼れ等は知らず〱のうちに斜傾面を滑り落ち、つひに『農民と土地との結合』の維持と確立とを心底から切望する主農論者の傍らへたどりついてしまつた。農民共同態のかういふ隔離が、勞働者雇傭の特殊な方法を作り出したことを思ひ起せば充分である。すなはち、經營および經濟の所有主たちは、出來るだけ廉く勞働者を傭ひ入れるために、租税支拂がことに滯納となつてゐる農村へその使用人を派してゐる。幸ひなことに、プロレタリアートの『鄕土定住』を破壞する（それは謂ゆる季節勞働の結果である）農業資本主義の發達のために、この壓制は次第々々に自由賃銀勞働に取り代へられてゐる。

（註七）エンゲルハルト。――前世紀の七十年代における評論家（ナロードニキ）。彼れ獨特の農業を合理的に社會主義的に樹立することをその任務としてゐた。しかるにエンゲルハルトは、彼れの經濟を合理化するに當つては、その理論に反して賃勞働に訴へざるを得なかつた。エンゲルハルトは、『祖國新聞』紙上に、『農村より』といふ一般的標題の下に幾つかの書翰を發表して、そのなかで自分の意見を唱導した。これらの書翰は後に一册の本として發行された。

今日のナロードニキ・理論が害惡を流すといふ吾人の主張に對するもう一つの、おそらくこれに劣らず適切な證明は、ナロードニキの間で過勞の理想化が全く當り前の現象とされてゐるといふ事實がこれを吾人に提供してゐる。エンゲルハルトが彼れのナロードニキ式罪惡を犯したとき、彼れは農村に過勞を撰めるのは『善いことだ』と書いたほども極端に走つたのだ！　吾々はまた農業中等學校に關するユシャコフ氏の有名な計畫(『ルシコエ・ボガットヴォ』一八九五年、第五號)のなかにもこれと同じことを見出す。エンゲルハルトの協働者ヴェー・ヴェー氏も、その眞面目腐つた經濟論文のなかでこの理想化に耽り、農民は資本主義を輸入せんと欲した地主に對し勝利を得ただらうと主張した。しかし、かかる場合に困つたことには、農民が地主の土地を耕作して、その代りに地主から土地を『賃借し』たこと、すなはち農奴制の下に成立したものと全く同一の耕作方法を復活させたことがあつた。以上は、農業問題におけるナロードニキの反動的態度の最も露骨な實例である。吾々は、かういふ思想を、それほど露骨ではないが、どのナロードニキの場合にも見出すことができる。すべてのナロードニキは、資本主義が獨立農民に代ふるに農村勞働者を以てするからといふので、我が國の農業における資本主義の有害と危險とを云爲する。資本主義の現實性(『農村勞働者』)は『獨立』農民といふ虛構と對比されてゐる。そしてこの虛構は、資本主義前期の農民が生產手段を所有してゐたといふことを論據としてゐる。しかし、この場合、農民はこの生產手段

のためにその値ひよりも二倍のものを支拂はなければならぬこと、この生産手段は過勞のために役立つこと、この獨立農民の生活水準は、彼れ等がすべての資本主義國において賤民のなかに數えられるほど零落してゐること、この『獨立農民』の望みなき窮迫と精神的鈍重とに加ふるに、先資本主義的經濟形態の不可避的な附屬現象として、人身的從屬關係が存在してゐること、これらの事實はこつそり祕密にされてゐる。

ナロードニキ・傾向の第三の特徴――『インテリゲンチャ』および一國の法制的‐政治的諸制度が一定の社會階級の物質的利害に依然してゐるといふことの無視――は、以上に述べたことと不可分の關係にある。しかしながら、社會學的諸問題における實在主義のかくの如き缺除は、ロシヤ資本主義の『誤謬』と『正道から遠ざける』可能性とに關する說を生み出すことができた。重ねて言ふが、かくの如きナロードニキの見解は、六十年代の『遺産』および傳統と少しも關係がないばかりか、むしろ反對に、その傳統と直接矛盾してさえゐる。この見解から、當然のこととして、農奴解放前のロシヤの生活における御役所制度の幾多の遺物に對するナロードニキの態度が生じてゐるが、かかる態度は『遺産分』の代表者たちが決してあづかり得なかつたところである。吾々はかかる態度の特徵を示すために、ヴェー・イワノフがその論文『拙い思付』[註八]『(ノヴォエ・スローヴォ』(新しき言葉)、一八九七年九月)のなかに書いた優れた批評を利用しよう。イワノフ氏は論じて曰く、

『ナロードニキは、彼れ等の論敵の『夢想』としての御役所制度 ,,Reglementierung" の堪えがたき専制主義について語らなかつたばかりか、彼れ等が飽くまでナロードニキたらんと欲するなれば、彼れ等はそれを語るを得ず、また語らないであらう。この領域における「經濟的唯物論者たち」と彼れ等との論爭の本質は、なかんづく、我國に殘存せる舊時の御役所制度の遺物が、ナロードニキの意見に從へば、御役所制度の今後の發達の基礎となり得るだらうといふことにある。この舊時の御役所制度の堪えがたき狀態は、一つには『農民の魂』そのものが(現在の如く統一的に且つ不可分に)御役所制度の意味に發達してゐるといふ觀念によつて、二つには「インテリゲンチャ」の「社會」の、あるひは一般に「指導階級」の、現在または將來における道德美に對する信仰によつて、彼れ等の眼からかくされてゐる。彼れ等が經濟的唯物論者たちを非難するものは御役所制度に對する偏愛ではなく、むしろ反對に御役所制度の缺除に立脚する西歐の風俗および習慣に對する偏愛である。經濟的唯物論者たちは、自然經濟に基づいて發生した舊時の御役所制度の遺物が、貨幣經濟に移推した國において日毎に『堪えがたきもの』となつてゐると事實主張する。貨幣經濟は、人民の種々樣々な層の現實の狀態においても、その精神的および道德的構造においても、まことに無數の變化をひき起してゐるからだといふのである。從つて彼れ等は、一國の經濟生活の新たな喜ぶべき『御役所制度』の發生のために必要なる諸條件は、自然經濟および封建的特權に適合した御役

所制度の遺物から發達し得るものでなく、むしろ西ヨーロッパおよびアメリカの進歩せる諸國における如く、この舊時の御役所制度が廣汎に亘つて絶對的になくなつた處にのみ發達し得るにすぎないと確信してゐる。ナロードニキとその論敵との間の御役所制度に關する問題は以上の如くである』（前提の論文、一一一―一二頁を見よ）。

（註八）『ノヴォエ・スローヴォ』（新しき言葉）――一八九七年の春まで、まる八ケ月の間、警察檢閲の恐ろしい壓迫に堪えてゐた合法的マルクス主義雜誌。この雜誌の寄稿者には、プレハーノフ、マルトフ、エヌ・ゴールキー、ストルーヴェ等がゐた。レーニンはこの雜誌の紙上に『經濟學における浪漫派の特徴について』なる一論文を發表した。

舊時の『御役所制度』の遺物に對するナロードニキの以上の關係は、おそらく『遺産分』の傳統からのナロードニキの最も明白な錯行をなすものである。この遺産分の代表者たちは、既に吾々の見た如く、舊時の御役所制度のありとあらゆる遺物に對する斷乎たる狂暴なる宣告を以て有名であつた。この意味において、『學徒』はナロードニキよりもはるかに『六十年代の傳統』と『遺産』とに近接してゐる。

社會學的實在主義の缺除は、既にあげた極めて意味深きナロードニキの誤謬は別として、狹隘なる理智的己惚または純然たる官僚式思惟と稱せられ得るところの、かの社會的諸問題に關する思惟

および考察の特殊な流儀に導びいてゐる。ナロードニキは、『吾人』は祖國のために如何なる道を擇ばなければならぬか、吾人が『祖國』を一定の方面へ導かうとすれば、如何なる不運が起るであらうか、老ひたるヨーロッパが進んできた危險極まる道を避けやうとすれば、ヨーロッパと並びに我國の舊き共同態形態とから『善き事を取り出さう』とすれば、『吾人』は如何なる出口を安全とするか等々と、事細かにせんさくしてゐる。その結果は、歴史を自己の利害に應じて造るところの、個々の社會階級の獨自の傾向に對するナロードニキの絕對的疑惑および侮蔑となつてゐる。その結果は、ナロードニキが（自分の周圍を忘れて）『農業勞働の組織』から『生產の共有化』に至るまでの、ありとあらゆる社會的畫策に携はる際立つた輕卒さとなつてゐる。――『歴史的行動の深遠さと共に大衆の範圍も增大するであらう、そして大衆の行動こそかかる歴史的行動なのである』、――マルクスのこの言葉のなかには、我がナロードニキが絕對に理解しようともせず、また理解することもできない、かの歴史的・哲學的理論の最も深い且つ最も重大な眞理の一つがひそんでゐる。人間の歴史的創造の擴大と深化と共に、意識的に歴史へ働きかける人民大衆の範圍もまた增大しなければならぬ。しかるにナロードニキは初めから一般的には人民を、特殊的には勞働する人民を、これかあれかの多かれ少なかれ合理的な方策の客體として、これかあれかの方向へ導かるべき材料として取扱ふけれども、人民の種々なる階級を、この方面における獨自の歴史的創造者としては決して取扱

はず、この歴史の創造者の獨自の意識的活動を發展さす（あるひは逆に妨げるところの）當面の方向の諸條件に關する問題を少くも取扱はない。

故に、ナロードニキ・傾向はロシャにおける資本主義の問題を提出したことによつて、啓蒙家の『遺産分』に比し有意義な一歩前進をどけたとはいへ、この問題について彼れ等の提供せる解決は、その小ブルジョア的立場と資本主義に對する感傷的な批判との結果、甚だしく不充分なものたることが證明され、從つてナロードニキ・傾向は多くの重要な問題において『啓蒙家』よりもおくれてゐることが判明した。我が啓蒙家の『遺産』および傳統へのナロードニキ・傾向の加擔は結局茶番たることが證明されたのである。農奴解放以後のロシャの經濟的發達がロシャの社會的思惟に當面せしめた、かの新らしき諸問題をナロードニキ・傾向は解決しなかつたし、これらの問題については感傷的な且つ反動的な悲嘆にのみ耽つてきた。啓蒙家たちによつて早くも提出されてゐた舊き問題を、ナロードニキ・傾向はそのロマン主義のために複雑ならしめ、かくしてその解決を阻害したにすぎなかつた。

『啓蒙家』、ナロードニキ、および『學徒』。

吾々はいまやこの三つの對比を要約することができる。吾々は社會的思惟に關する前述の各傾向相互間の關係を極めて簡短に特徵づけて見やう。

『啓蒙家』が所定の社會的發達を信ずるのは、彼れ等がその發達に内在する諸矛盾を認めないから

である。ナロードニキが所定の社會的發達を危惧するのは、彼れ等がすでにこれらの諸矛盾を知覺したからである。『學徒』が所定の社會的發達を信ずるのは、彼れ等がよりなき未來の保證をこれらの諸矛盾の完全なる發達のなかにのみ認めるからである。從つて第一および第三の傾向は所定の道を辿る發達を支持し促進し、且つ容易ならしめて、その發達を攪亂し阻害する一切の障害を取り拂はふと努力する。これに反して、ナロードニキはその發達を制止し停頓せしめんと努力して、資本主義の發達のために一定の障害を取り拂ふことを恐れる。第一および第三の傾向は、歴史的樂觀説と稱せられるものをその特徴とする。すなはち、事物が現在のままに先きへ〱とます〱急進に經過すればするほど、いよ〱よろしいといふのである。これに反して、ナロードニキ・傾向は歴史的悲觀説に導びいてゐる。すなはち、事物が現在のまゝに進めば進むほど、いよ〱惡いといふのである。『啓蒙家』は改革以外には一般に發達の性質に關する問題を提出せず、專ら封建主義の遺物に對する宣戰布告にのみ始終して、ロシヤの歐化のための道路掃除の消極的任務を以て滿足した。ナロードニキ・傾向はロシヤにおける資本主義の問題の皮切りをしたが、與へられた回答はといへば、資本主義は反動的であるといふ意味のものであつた。從つてナロードニキ・傾向は啓蒙家の遺産を全然繼承し得なかつたのである。すなはち、ナロードニキは、當初から、ロシヤの歐化一般を『文明の統一』の立場から希望した人々に對し戰端を開いてゐた。彼れ等が戰端を開いたのは、これらの

人士の理想に終始したくなかつたためばかりでなく（かゝる戰端は是認されたであらう）、自分たちが問題の、卽ち資本主義文明の發達のなかへ投するほど進みたくなかつたためでもあつた。『學徒』はロシヤにおける資本主義の問題をその進歩性の意味において解決し、從つてまた彼れ等は啓蒙家の遺產をも絕對的に受けつぐことができるし、然りさうしなければならぬし、さうして資本主義の諸矛盾を生產者の立場から分析することによつて、この遺產に缺けたところを補ふことができる。啓蒙家たちは、人民中の特殊な階級を、彼れ等の特殊な觀察の客體として擇び出すことをしなかつた。彼れ等は人民一般について語り、國民一般について語つた。ナロードニキは勞働の利害を代表せんと欲したが、今日の經濟體制內における一定の集團を指摘しなかつた。實際、彼れ等はいつも資本主義が商品生產者たらしめるところの小生產者の立場を取つた。『學徒』はその基準として勞働の利害を取つてゐる。しかもその際彼れ等は、資本主義經濟における全く一定せる經濟的集團、卽ち無產の生產者を指摘してゐる。第一および第三の傾向は、その運動の內容上、資本主義が作り出し且つ發達させるかの階段の利害に應じてゐる。ナロードニキ傾向は、その內容上、近代社會のその他の階級の間にあつて一の中間段階を占めてゐる小生產者の階級運動、卽ち小ブルジョアジーの利害に應じてゐる。それ故に、『遺產分』に對するナロードニキの矛盾せる態度は決して偶然でないばかりか、ナロードニキ・見解そのものの內容の必然的結果でもある。吾々は、啓蒙家の種々の

見解における基調の一つがロシヤの歐化に對する熱望にあることを見た。しかしながら、ナロードニキはナロードニキたることを止めることなくして、この熱望を分つことは斷じて不可能である。

かくして吾々は、結局、これまで特殊な場合に繰返し强調してきた結論に到達する。すなはち、『學徒』は、ナロードニキに比してはるかに首尾一貫せる、はるかに忠實なる遺產分の番人である。彼れ等は遺產分との緣を斷たないばかりか、むしろ反對に、ナロードニキのロマンチックな小ブルジョア的危惧の論破を以て自己の主要任務の一つなりと思惟してゐる。さうしてナロードニキは、かういふ危惧のために、甚だ多くの重要なる諸點において、啓蒙家の歐化的理想を拒否することを餘儀なくされてゐる。しかし、『學徒』は記錄係が古文書を保管するやうに遺產を保存するものでないことは、言ふまでもない。遺產を保存するとは、未だ必ずしも遺產分にのみ始終するといふ意味ではない。『學徒』は歐化主義の一般的理想の擁護に加ふるに、我が國の資本主義發達が包藏するかの諸矛盾の分析と、並びに前述の特殊な視角の下におけるこの發達の評定とを以てする。

# 我らの運動の最も緊急なる諸任務

（一九〇〇年十二月『イスクラ』註一第一號、）

註一、『イスクラ』（火花）。――ロシヤ社會民主黨の國外の機關紙。ボルシェヴィキ黨の形成に當つて著明なる役割を演じた。ロシヤ社會民主勞働黨の第一回黨大會は一八九八年に開かれたが、この黨大會以後、黨の存在は名義だけになつてゐた。黨を現實に組織するためには、先づ第一に、ロシヤの社會民主主義者の間に一の統一的な理論的綱領を戰ひ取ることが絶對に必要であつた。さうして彼れ等の間にあつた謂ゆる『經濟主義』（本書三〇頁註三を見よ）を克服しなければならなかつた。新聞發刊の計畫はレーニンと彼れの最も親しい數名の思想上の同志とによつて作成され、ロシヤの都市プスコフにおける非合法的な協議會のときに完全に作り上げられた。

レーニンは、一九〇〇年、スヰズで新聞を發刊するためにその地へ旅立ち、新聞の發行について『勞働解放』團（本書二九頁註二を見よ）と合體した。新聞は『イスクラ』（火花）といふ名前をとり、『火花から火焔が燃え上がる』といふモットーを掲げた。新聞はレーニンの指導の下に素晴らしくその任務を果した。新聞の影響は非常に大きかつた。新聞はその周圍にロシヤ社會民主主義者の多數者を集め、經濟主義の信用を失墜せしめ、かくしてロシヤ社會民主主義の黨への組織的結束の可能性を作り出した。この結束は一九〇三年第二

回黨大會の時に成就され、そしてその大會は『イスクラ』を黨の中央機關紙として聲明した。レーニンの助力の下に五十一號まで發行されたが、一九〇三年十一月一日、レーニンが『イスクラ』編輯部を脱退してから後は、メニシェヴィキの機關紙となり、その終刊までそのまゝで續刊せらた。

ロシヤ社會民主黨は、ロシヤの勞働者黨の焦眉の政治的任務が、絶對主義の倒壞、政治的自由の獲得でなければならぬことを、從來繰返し聲明してきた。いまを去る十有五年前、〔當時の〕ロシヤ社會民主主義の代表者たる『勞働解放』團[註二]の會員たちもそれを聲明したし、また、一八九八年の春、ロシヤ社會民主勞働黨を設立した、ロシヤ社會民主々義の種々の組織の代表者たちも二年半前にそれを聲明した。だが、かくの如き再三の聲明にも拘らず、ロシヤにおける社會民主黨の政治的任務に關する問題が今また新たに論議されてゐる。我らの運動の代表者たちの多くも、前記の問題の解決の正しさに對する自己の疑惑を表明してゐる。經濟鬪爭に主要なる意義を置くべきであると主張され、プロレタリアートの政治的任務は背後に押しのけられ、その任務は狭められ局限されてゐる。ロシヤにおいて獨立の勞働者黨を形成するなどとは單に他國の言葉の口眞似を意味するにすぎず、勞働者はよろしく經濟鬪爭だけを行ふべきで、政治のことは自由主義者と同盟した知識階級に一委すべしとさへ言はれてゐる。この新しき『信仰告白』(有名な信條(クレードー)[註三])の最近の聲明の歸するところは、言ふまでもなく、ロシヤのプロレタリアートを未丁年者なりと認め、社會民主々義的綱領を完

全に否認することである。『ラボーチャヤ・ムィスリ』[註四]（勞働者の思想）はたしかに（殊にその特別附錄の中で）この意味の意見を發表した。ロシヤの社會民主々義は、自己否認にも類する動搖の一時期、懷疑の一時期を閲してゐるのだ。一方において、勞働者運動は社會主義から切り離されてゐる。すなはち、人々は勞働者を助けて經濟鬪爭を行はせてはゐるが、全體としての運動の社會主義的目標と政治的任務とを彼れ等に傳へることは避けてゐる。他方において、社會主義は勞働者運動から遊離されてゐる。すなはちロシヤの社會主義者たちは、政府との鬪爭はすべからく知識階級だけがその獨自の勢力を以て行ふべきであると、日を追ふて益々唱へはじめてゐる。なぜなら、勞働者は專ら經濟鬪爭にのみ終始するであらうからといふのである。

**註二**、『勞働解放』團。――ロシヤにおける最初の革命的な國外團體で、科學的社會主義の基礎の上に立つてゐた。一八八三年、『チォルヌ・ペレデル』團の以前のナロードニキ、プレハーノフ、ドイツ、サスーリッチ、アクセルロード、およびイグナトフ等がこの團體に加入してきた。解放團は『近世社會主義文庫』の出版に從事し、マルクス及びエンゲルスの重要著作をロシヤ語の飜譯で發行した。八十年代には、プレハーノフやアクセルロードの獨立の論文、殊にナロードニキの說に對する批判の問題を取扱つた論文を發行してゐた。同團體は、一八八四年に『ロシヤ社會民主主義者の綱領草案』を發表した。一八九五年の初頭、同團體の發起に基づき『ロシヤ社會民主主義者同盟』が設立された。この同盟の出版物の編輯は同團體の手に歸してゐ

た。一八九八年、『同盟』の第一回大會のとき、ロシヤにおける勞働者運動の次ぎの任務に對する評價の問題につき、同盟の日和見主義的多數派(クリチェフスキー、プロコポウィッツ、クスコワ其他)と意見の相違をきたして出版物の編輯を中止した。一九〇〇年に開かれた同盟の第二回大會のとき、つひに最後の分裂がきた。解放團はその支持者と共にその大會を去り、一の革命的組織『ソチィアルデモクラット』を形成した。解放團は革命的社會主義の意味における旗幟鮮明な戰術的方針を斷乎として代表し、日常の經濟的諸要求の端初的鬪爭のために革命的任務を紛飾したところの、同盟內の日和見主義を銳く攻擊した。一九〇一年、解放團は『ザリャ』(曙光)および『イスクラ』の諸組織體と合同して、『ロシヤの國外聯合』となつた。解放團は『イスクラ』および雜誌『ザリャ』の發行に直接參加して、綱領および戰術上の諸問題に關しては、ロシヤ社會民主勞働黨第二回黨大會の準備を着々と進めて行つた。その黨大會のとき、同團體は獨自の組織としての自己を解體した。

註三、『クレードー』(卽ち信仰告白)。——クスコワの一論文。ベルンシュタインの理論に基づき、ロシヤの勞働者運動の『經濟主義的』傾向(經濟主義および經濟主義者)を基礎づけやうとした試み。その論文の要旨は、階級としてのロシヤの勞働者階級は、その生存の改善のためにはただ日常の經濟鬪爭のみを行ふべきで、獨立に政治的要求をかかげることを要求すべきではないといふのであつた。政治鬪爭はブルジョア自由主義的反對黨の繩張なのだから、勞働者階級はただ自由主義者を支持すればよろしい。『クレードー』は、レーニンを先頭とする社會民主主義者中の革命派の代表者側からの銳い抗議をひき起した。クスコワは今日

白衛兵亡命者のなかで生活してゐる。

註四、『勞働者の思想』。――社會民主主義の新聞。初めの二號は一八九七年ペテルスブルグにおいて非合法的に發行され、その他の號はすべて國外において發行された。新聞は一九〇二年の終りまでつゞいた。『勞働者の思想』は經濟主義の最も明白な代表者であつた。すなはち、運動は經濟的勞働組合的闘爭の上にそのすべての力を集中すべしといふ立場を代表したところの、以前のロシヤ社會民主主義內部の傾向を代表してゐた。『勞働者の思想』は、勞働組合的闘爭――『純然たる勞働者運動』――を政治的勞働者運動、革命的政治的運動と對立させ、後者の運動を勞働者黨の任務のなかに加へなかつた。かういふ風に純經濟的煽動にのみ終始したことは、組織の方面において、政權の獲得をその目標とするすべての黨にとつて絕對に必要なる、黨の組織の中央集權的形態に對する憎惡を伴つた。『勞働者の思想』は、自己の政治的任務を理解するまでに成熟してゐない、端初的な勞働者運動の前に低頭したものであつて、それは組織された勞働者團體および『インテリゲンチャ』、卽ち意識的な社會民主主義的指導者と正統マルクス主義とを盛んに非難した。『イスクラ』は、レーニンを先頭として、『勞働者の思想』に對し强烈な闘爭を行ひ、すべての方面に亘つて革命的社會民主主義の任務と戰術とを代表した。

三種類の事情がこの悲しむべき現象に對する地盤を作り出したと、私は考へる。第一、ロシヤの社會民主主義者たちは、彼れ等の活動を開始するに當つて、專ら小集團內における宣傳的事業にの

み終始してゐた。〔その後〕、吾々が大衆への煽動に移つたとき、吾々は必ずしも他の極端を避け得たわけではなかつた。第二、吾々は我らの運動を開始するに當り、『政治』をすべての勞働者運動からかけ離れた活動の意味に解し、政治といへば一も二もなく陰謀家の鬪爭だとけなしつけてゐたところの『ナロードナヤ・ウォリャ』[註五]（人民の意志）の代表者たちとの鬪爭において非常にしばしば自己の立場を主張せねばならなかつた。社會民主々義者たちはかかる意味の政治をしりぞけて、〔自らは〕他の極端に陷り、さうして政治一般を後方へ押しやつたのである。第三、地方の小さな勞働者集團の中にあつて分散的に活動してゐた社會民主々義者たちは、地方の各集團の全活動を集合して、×××事業を正當に組織することを可能ならしめる、一の××的政黨の組織の必要を充分に洞察しなかつた。主として分散的活動が行はれてゐたことは、當然のこととして經濟鬪爭の優勢を伴つたのである。

**註五**、『ナロードナヤ・ウォリャ』（人民の意志）。――ロシヤの革命的ナロードニキの政黨は一八七九年に成立した。その政黨は、あらゆる政治鬪爭に反對したロシヤの無政府主義的ナロードニキ（バクーニン主義者）を繼承したものであつた。『ナロードナヤ・ウォリヤ』はその宣傳的活動を主として青年學生や軍人の間に行つたが、しかしまた勞働者層の間にも行つた。その政黨は、しかしながら、その本質においては嚴密なる陰謀的反逆者の組織であつた。それはロシヤの專制支配に對するその鬪爭戰術をテロルの上に樹立してゐ

た。彼れ等の闘爭はロシヤの絕對主義の權力全體に對する大衆の支持なき革命家の小集團の英雄的決闘だつたのだから、如上の戰術は『ナロードナヤ・ウォリャ』には避け得られなかつたのである。『ナロードナヤ・ウォリヤ』の執行委員會の決議に基づき、アレキサンダー二世は暗殺された。その直後、執行委員會はアレキサンダー三世へ一の公開狀を送り、その中で、大赦、民主主義的自由、憲法制定會議の召集を要求した。八十年代の中葉、ツァー政府は犬を使つて『ナロードナヤ・ウォリャ』の政黨を破壞した。

以上すべての事情は運動の一方面の偏重をもたらした。『經濟主義的』傾向（この場合、一の『傾向』が問題たり得るかぎり）はこの狹隘を一の特殊な理論たらしめんとする企圖を起し、この目的のために、新流行のベルンシュタイン主義、新たに擡頭せる『マルクス主義の批判』を利用して、舊來のブルジョア的思想の進行を新たな旗の下に走らしめんとした。この企圖は、まづ、ロシヤの勞働者運動と政治的自由獲得のための前衞隊としてのロシヤ社會民主黨との間の、連絡を弱めんとする危險をもたらした。我らの運動の最も緊急なる任務はいまやこの連絡を鞏固ならしめることにある。

社會民主主義とは勞働者運動と社會主義との結合である。その任務は勞働者運動の各段階に受動的に仕へることではなく、全運動の利害を代表することであり、全運動およびその政治的任務の最終目標を指定することであり、その政治的および理論的獨立性を保持することである。社會民主主

義から切り離された勞働者運動は支離滅裂となり、ブルジョア化するに相違ない。勞働者階級がただ經濟鬪爭のみを行ふなら、それはその政治的獨立性を失ひ、他黨の後塵を拜するものとなり、次いでそれは『勞働者の解放は勞働者自身の事業でなければならぬ』といふ偉大なる命令を放棄するに至るであらう。いづれの國においても、勞働者運動と社會主義とが獨立にはなれ〴〵に存在し、それぞれ別個の道を進んでゐた一時代が曾てあつた、――さうして、いづれの國においても、この分離は社會主義と勞働者運動とを弱めることとなつた。いづれの國においても、社會主義と勞働者運動との結合はまづ兩者のために强固な基礎を作り出した。しかし、どこの國でも、社會主義と勞働者運動とのかういふ結合は歷史的に實現され、場所と時代とに應じて特殊な進路を辿つてきた。ロシヤにおいては、社會主義と勞働者運動との結合の必要は理論的には疾うの昔しに宣言されたのである、――しかし、實踐的には、今日になつて漸やくこの結合へ着手されてゐる。この事業の過程は甚だしく困難な過程である。そしてこの過程が色々な動搖と疑惑とを伴ふとしても、それは驚くに當らない。

吾々のために如何なる教訓が過去〔の經驗〕から生ずるか？

ロシヤの社會主義全體の歷史は、要するに、ツァーの政府に對する鬪爭、政治的自由の獲得がその緊急なる任務たることを證明し、我が國の社會主義運動は云はば絕對主義との鬪爭に集中されで

きたことであつた。他方において、歴史はまた、勤勞諸階級の進步せる代表者たちからの社會主義的思想の隔離は、ロシヤにおいてはその他の諸國におけるよりもはるかに甚だしく、かかる隔離のためにロシヤの革命的運動は無能を宣告されたことを示した。以上の事實から、ロシヤの社會民主々義が實現すべき使命に置かれてゐる任務、即ち、社會主義的觀念と社會主義的自己意識とをプロレタリアートの大衆のなかに植ゑつけ、端初的な勞働者運動と不可分に結合せる一の×××政黨を組織すべき任務が自づから生じてゐる。この方面において、すでに多くのことがロシヤの社會民主々義によつて果されたが、まだ〳〵爲さるべきはるかに多くのことが殘されてゐる。運動の成長と共に、社會民主々義の活動分野はます〳〵擴大され、その活動はます〳〵多方面的となり、運動に從事する人々は、宣傳および煽動の日常欲求から生ずるところの、種々樣々な特殊任務の實現の上にいよ〳〵益々その力を集中しつゝある。この現象は全く當然且つ不可避的ではあるが、それは、鬪爭の特殊任務および個々の方法を物それ自體たらしめないやう、豫備事業を主要なる唯一の事業と宣言しないやう、特別に注意を拂ふことを吾々に强ひてゐる。

我らの主要なる基本任務は、勞働者階級の政治的發展およびその政治的組織の促進にある。この任務を背後に押しのけ、鬪爭の一切の特殊任務および個々の方法をそれに從位させない者は、誤つた道を踏み、運動に重大な害惡を加へるものである。しかし、このことを、先づ第一に、勞働者運

動とは緣のない個々の陰謀家の小集團の力を以て政府に對する鬪爭に當るべく[illegible]家を召集する人々が行ひ、第二には、政治的宣傳・煽動・および組織の內容と昂進とを狹め、專ら勞働者の生活にのみ特有な時期、儀式祭日等の場合にのみ『政治』を以て勞働者の歡心を買ふことを可能且つ妥當なりと思惟し、絕對主義に對する政治的鬪爭を絕對主義側からの個々の讓歩の要求と兩換して、個々の讓歩に對するこれらの要求を[illegible]政黨の絕對主義に對する系統立つた終始一貫せる鬪爭にまで高めるために充分に盡力しない人々が行つてゐる。

『組織せよ』と、『ラボーチャヤ・ムイスリ』紙はいろ〳〵な音調で勞働者に呼びつけ、『經濟主義的』傾向のすべての信者もこれを繰り返してゐる。吾々と雖ももちろんこの呼聲には全然贊成する。しかし、吾々はこれに加ふるに、相互扶助の組合、ストライキ金庫、および勞働者の小集團に組織するのみならず、一個の政黨にも組織し、專制政府に對する、あらゆる資本主義的社會秩序に對する、斷乎たる鬪爭のためにも組織せよと呼ばなければならぬ。かかる組織なくしては、プロレタリアートは意識的階級鬪爭にまで飛揚する能はず、かかる組織なくしては、勞働者運動は初めから無力を宣告されてゐる。ストライキ委員會、小集團、および扶助組合のみを以てして、勞働者階級は自己に課せられた偉大なる歷史的使命、卽ち自己およびロシヤの全民衆を政治的および經濟的隷屬から解放するといふ使命を正當に果すことは斷じて不可能である。如何なる階級と雖も、自己の政治的

指導者、運動を組織し指導する能力を有する自己の代表者を選拔することなくして、歴史上未だ嘗て支配の地位に就いたことはない。ロシャの勞働者階級は、すでに、彼れ等がかかる人物を撰拔し得る地位にあることを示した。すなはち、最近五六年間におけるロシャの勞働者の鬪爭の擴大は、如何に無量の××的勢力が勞働階級の間に潛在してゐるかを示し、狂暴極まる政府の迫害も、社會主義へと、政治的意識へと、政治的鬪爭へと押し寄せる勞働者の數を減少せずして、却つて增加してゐることを示したのである。一八九八年における我らの同志の黨大會はこの任務を正當に理解したものであつて、それは他國の言葉の反復でも『知識階級』の運動のみを表現したものでもない。さうして吾々は斷乎としてこの任務の遂行に取りかかり、黨の綱領・組織・および戰術に關する問題を日程にのぼせなければならぬ。吾々が何を我らの綱領の原則と見做すかは、すでに述べたところである。いまはこの原則を詳細に說いてゐる場所ではない。吾々は次號で多くの論文を組織問題のために捧げるつもりである。この問題は我らの最も甚だしい弱點の一つである。吾々は、この方面では、ロシャの運動の舊時の戰士たちよりもひどくおくれてゐる。吾々はこの缺點を率直に承認しなければならぬ。さうして吾々は、もつと　な運動の指導、活動規律の組織的宣傳、××の鼻をあかし、××の網の目をくぐり拔ける方法の組織的宣傳を實現するために全力をあげなければならぬ。××のために夕方の暇な時間を捧げるばかりでなく、その全生涯をそのために捧げ

る人物を養成しなければならぬ。組織の內部にあつて、我らの活動の種々なる種類のために嚴密なる分業が行はれ得るほど大きな組織が作られなければならぬ。最後に、戰術の問題に關して、吾々は次のことだけをここに述べるてをかふ。すなはち社會民主黨は自らの活動を拘束するものでも、政治鬪爭の豫め確立された何かの計畫または唯一の方法にのみその活動を局限するものでもない、——その鬪爭手段が黨の現存の勢力に適合し、當面の狀勢の下で達し得られる最大の成果を達成すべき可能を與えるならば、社會民主黨にとつては鬪爭のあらゆる手段が正しいのである。强固に組織された政黨が存在する場合には、一つ一つのストライキも　　　に轉化され得る。强固に組織された政黨が存在する場合には、一地方の××もの勝利へと成長し得る。吾々は、個々の要求のための、個々の讓步を强要するための、政府に對する鬪爭は、單に敵との小競り合ひを意味するにすぎず、單に前哨戰にすぎない——決定的な會戰はなほ前途に迫つてゐることを忘れてはならぬ。吾々目がけて　　　霰と降り注ぎ、最良の戰士を拉致し去る　　　は、あらゆる權力を擁して我らの前に立ち塞がつてゐる。吾々はこの　　　を攻め取らなければならぬ。さうして、吾々が眼醒めつゝあるプロレタリアートの一切の勢力をロシヤの　　　たちの一切の勢力と結合して唯一の政黨となし、ロシヤに存在する生き生きした眞摯な要素のすべてをその政黨に糾合するとき、吾々はこの保壘を攻め取るであらう。その時また、初めて、

ロシヤの勞働革命家ピョートル・アレキセーエフの偉大な豫言も實現されるであらう。曰く『幾百萬人の勞働者民衆は　　　　であらう。そして××××××によつて守られる　　の　　は崩壞するであらう！』。

# 勞働者黨と農民

（『一九〇一年四月『イスクラ』第三號）

農民解放以來すでに四十年を經過した。ロシャの社會がこの二月十九日を農奴制舊ロシャの倒壞の日として、人民に自由と福祉とを約束せる時代の發端として、特別の感激を以て祝賀するのは全く當然のことである。〔しかしながら〕、祝賀演說の讚辭のなかに、農奴制とその一切の發露とに對する僞らざる憎惡と並んで、無量の虛僞が含まれてゐることを忘れてはならぬ。我が國で流傳されてゐる『大』改革に對するかの評價、『國家賠償のお蔭による農民の解放と土地の割り當て』は絕對に虛僞であり嘘つぱちである。實は、農民が數百年來所有してゐた持地が著しく切り取られ、數十萬の農民が全く土地を失くしたのだから、それは農民の土地からの解放にすぎなかつた。實をいへば、農民は二重に　されたのだ。すなはち彼れ等の地所が切り取られたばかりでなく、農民は元々彼れ等の物だつた土地をそつくりそのまゝあてがはれて、その土地に對し『賠償金』を支拂ふことを强制され、しかもその賠償金は本當の地價見積よりもはるかに高率に査定されたのである。農民解放後十年を經て、地主自身が、農業の狀態を檢視してゐた政府の役人に向ひ、農民は彼れ等の土地

に對してのみならず、彼れ等の自由に對しても税金の支拂ひを强制されたのだと自白したほどである。しかし、人身的解放のために身請金を支拂つたにも拘らず、農民は自由な人間とはなれなかつた。彼れ等は二十年の間債務を負擔させられて、依然として——そして今日に至るまでも依然として、笞打つても差支えない賤民であり、それに特別の税を支拂ひ、半農奴制的村落を去ることも、自分の土地を自由に賣り拂ふことも、國内の好きな場所へ勝手に移住することも許されれてゐない賤民である。我が國の農民改革は政府の寛大を證するものではない。むしろ反對に、それは、どんな事柄でも專制政府の手にかかれば如何に甚だしく傷けられるかを示す最大の歷史的實例を供してゐる。軍事的敗北、恐るべき財政的困難、脅威的な農民暴動等の壓迫に押されて、政府は餘儀なく農民を解放せざるを得なかつたのだ。ツァー自身ですら、下からの解放が始まらなければ、上から『解放』しなければなるまいと自白した。しかるに、解放に着手した政府は『損害を受けた』地主の貪慾を醫やすために、ありとあらゆる手段を講じたのである。政府は、改革を實施すべき筈の人々——これらの人々は貴族から選ばれてゐたのに！——を罷免する醜態をすら辭せなかつた。最初に任命された調停者は罷免されて、地主に非常な好意を寄せ、農民〔の土地〕をしたたか捲き上げることのできた人々が代任された。大改革は、　　的强制執行や、證券を受取ることを拒んだ農民の銃殺に依らなければ實現不可能だつたのである。あの時代の最良の人士が檢閲の口籠(クチゴ)を無理に嵌

めさせられて、この大改革を沈默の呪ひを以て迎へてゐたのに何んの不思議もない……。

農奴制度から『解放された』農民は、改革者の手にかかつて、隷屬・赤貧・壓制の地位に置かれ、彼れ等の僅かな持地に縛りつけられて、彼れ等は『自由意志で』雇役に出かけるより外はなかつた。さうして農民は自身の以前の地所を『賃借り』して、彼れ等の從來の地主の土地を耕やしはじめ、自身の飢えたる家族にパンの前拂ひを受けるために、冬には既う夏の仕事のために雇はれたのである。賦役と雇役——事實これは、一人のジェスイット僧侶によつて起草された宣言の文句をかりれば、農民が『神の惠み』として乞ひ求めねばならなかつた『自由』勞働の眞相であつた。

改革の發案者たり遂行者たる官吏の寬大のおかげて維持された地主のかくの如き桎梏に、なほ資本の桎梏が加つてきた。貨幣の力は、たとへば、貧弱な半端な改革によつてでなく、强力な民衆によつて解放された、フランスの農民をすら壓しつけてゐる。この貨幣の力は、そのあらゆる負擔を伴ふて、我が國の半農奴的農民を襲ふてきた。お情けの改革のために倍加された税金を支拂ふためにも、土地を賃借するためにも、農民の家内生產物を驅逐しはじめた工業生產物をほんの少しばかり買ひ求めるためにも、さらにパンやその他を買ふためにも、農民は何んとかして貨幣を才覺しなければならなくなつた。貨幣の力は農民を壓しつけたばかりでなく、さらにまた彼れ等を分裂させたのである。すなはち、大多數のものは零落してプロレタリア化され、少數のものだけが一握の

慾深い富農(『クラーキ』)となつて、農民の經濟と農民の地所とを着服し、そしていまや擡頭しかけた農村ブルジョアジーの先驅をなしたのである。改革後のまる四十年間は、かかる〔農民〕頽廢の唯一の過程、じりじりと苦痛に充ちた〔農民〕死滅の過程をなしてゐる。農民は赤貧の生活水準にまでひき下げられた。彼れ等は家畜と一緒に襤褸をまとつて住み、雜草を食んでゐたのである。彼れ等はどこへでも逃れ得るならば、收入よりも出費の方がかさむ自分の持地を誰れかに引き渡すために金を支拂つてまで、自分の土地から逃れて行つた。農民の飢餓は慢性的となり、凶作が度かさなつて繰返された時は、幾萬の農民が飢餓と疫病のために斃れたのである。

我が國の農村における事態は今日も尚ほかくの如くである。しからばどこに打開の道を求め、如何なる方策を以て農民の狀態の改善を達成すべきであるか。小農が資本の桎梏から解放され得るには、彼れ等自ら勞働者運動に參加して、社會主義のための鬪爭、および土地並びにその他の生産手段(工場、機械等)を社會的財産に轉化するための鬪爭においてその運動を支持する外はない。小經濟および小所有を資本主義から保護することによつて農民を救はんとする企てがもしあるとすれば、それは社會的發達を無益に阻止して、資本主義内においても幸福は可能だといふ幻想を農民に懷かせ、勤勞大衆を離間し、且つ小數者に對し多數者を犧牲にした特權的地位を認容することを意味する。これ卽ち社會民主主義者たちが、農民の持地の維持だの、國體擔保だの、農民共同村落か

らの脫出の禁止だの、その他の身分の者の農民共同村落への自由なる加入の禁止だのの如き、無意味にして有害なる種々の制度に反對して絕えず鬪つてゐる所以である!。だが、既に述べた如く、我が國の農民は資本の桎梏の下に苦んでゐるばかりでなく、否むしろ、それよりも地主の桎梏と農奴制の遺物との下により多く苦められてゐる。農民の狀態を名狀しがたきほど惡化せしめ、彼れ等の手足を繫縛するこれらの桎梏に對する假借なき鬪爭は啻に可能なるのみならず、我が國の社會的發達全體のために必要なことでもある。といふのは、農民の恐るべき貧窮と無知と愚昧とは、我が祖國の一切の事情にアジア的極印を捺してゐるからである。社會民主主義がもしこの鬪爭にあらゆる支持を與へないならば、それは自己の義務を果したとは言へないであらう。かくの如き支持は、要約すれば、農村への階級鬪爭の移入となつて具體的に表現されなければならぬ。

吾々は、現在のロシヤの農村に、二様の階級對立が並立して行はれてゐるのを見た。一は農村勞働者と企業家との對立であり、二は農民階級と全地主階級との對立である。第一の對立は發展し成長しつゝあり、第二の對立は漸次衰退しつゝある。第一の對立はまだ全く未來のことに屬し、第二の對立はすでに著しく過去のこととなつてゐる。それにも拘らず、今日のロシヤの社會民主主義者にとつては、なかんづく、第二の對立の方がはるかに重要で實踐的にも大きな意義がある。吾々はあらゆる機會を利用して、農業賃銀勞働者の間に階級意識を發展させなければならぬこと、從つて

吾々は農村へ行く都市の勞働者（たとへば蒸氣打穀機に働らく機械工等）や、農村勞働者の勞働紹介所に我らの注意を向けなければならぬこと――これがすべての社會民主主義者にとつて一の公理であることは、言ふまでもない。

しかしながら、我が國の農村勞働者はまだ甚だしく〔從來の〕農民と結びついてゐる。〔從來の〕農民の窮乏はまだ甚だしく農村勞働者を壓しつけてゐる。從つて農村勞働者の運動は、現在においても、近き將來においても、國民全體にとつて一の意義をとることはできぬ。これに反して、農奴制遺物の掃蕩の問題、ロシヤの國家のあらゆる制度における幾百萬の、しかも幾百萬『賤民』の身分的差別および擯斥精神の絶滅の問題――この問題は今日すでに一般的國民的意義を有してゐる。從つて自由のための前衞鬪士たるの役割を主張する政黨はこの問題を回避することはできぬ。

農民の貧窮は今日（多かれ少なかれ一般的な形で）ほとんど萬人の認めるところとなり、一八六一年の改革の『不完全』、國家の補助の必要などといふ言葉はすでに常套の眞理となつた。この貧窮はとりも直さず農民階級に對する階級的壓迫に起因すること、政府は壓迫者階級の忠實な擁護者であること、政府の補助でなく、政治の壓制からの解放、政治的自由の獲得が、農民の狀態の根本的改善を公明に且つ熱心に希望する人々によつて要求さるべきであること、これを指摘することは我らの義務である。人々は法外に高い賠償金を言ひ、賠償金低減および支拂猶豫に關する政府側のお

情け政策を言ふ。これに對して吾々は、この賠償金なるものは、法律とお役所言葉とによつて隱蔽された、地主および政府による農民の　　に外ならず、農奴解放の代價として地主に納める貢税に外ならないと主張する。吾々は賠償金支拂および稅金徵集の即時全廢の要求をかかげ、ツァー政府が奴隸所有者の貪慾を醫すために永年誅求し來つた幾億の金を人民に返せと要求するであらう。人々は農民に土地が缺乏してゐると言ひ、農民の土地所有の擴大のために國家の補助が必要だと言ふ。これに對して吾々は、國家の補助――もちろん地主に對する補助――のお蔭でこそ、農民は多くの場合無くてはならぬ所有地を失つたのだと主張する。吾々は補助を受けてゐる持地――それが補助されてゐるために、强制的賦役勞働卽ち舊農奴制は依然として存在してゐるのだ――を農民に返せと要求するであらう。吾々は、ツァー政府の任命せる委員會が解放さるべき農奴に對して加へてきた、かの憎むべき不公平を排除するために、農民委員會を設立せよと要求するであらう。吾々は、地主が農民の絕望的境遇に乘じて取り立てる法外に高い小作料を引下げ得る權利を有する裁判官――他人の窮乏を利用して詐欺的契約を締結する人々の暴利を農民がその人の前に告訴し得る裁判官の任命を要求するであらう。農民に向つて現在の國家の補助や支持をまことしやかに說き立てる人々は、愚物でなければ詐欺師であり、農民の最惡の敵であること、農民階級は何よりも先づ官吏の、と壓制とからの解放を必要とし、彼れ等がすべての點でその他のあらゆる身分の者と完

全に且つ絕對に同權なることを承認されることを必要とし、完全なる移住の自由、土地の自由處分權、村落共同態の一切の事務および一切の收入の自由處分權を必要とすることを、吾々は絕えず機會ある每に農民に知らしめるやうに努めるであらう。どこのロシヤの農村生活の日常事實でも、これらの要求の名において　　するための幾千の機會を常に提供するであらう。かくの如き煽動は地方の具體的な特に切迫せる農民の窮迫を出發點としなければならぬが、そこにとゞまるべきではなく、農民の限界を孜々として擴大し、彼れ等の政治的意識を展開させ、國家內において地主と農民とが占むる特殊な地位を彼れ等に闡明し、農村を專斷と壓迫との堪えがたき壓制から解放するための唯一の手段として、國民議會の召集、官僚の專制支配の排止を主張しなければならぬ。政治的自由に對するかくの如き要求は勞働者の意識には理解されぬなどゝ主張するのは、無意味で馬鹿げたことである。工場主と　　とに對する直接の鬪爭の幾年かを閱みし、自分等の同志中の最良分子の專斷的逮捕や迫害を不斷に目擊した勞働者、既に社會主義の感化を受けた勞働者のみならず、自身の周圍に目擊する事柄について幾分の考へを抱いてゐる物の分つた農民でさへあれば、勞働者が何んのために鬪ひつゝあるかを理解し洞察するであらうし、憎むべき　　　　から全國を解放すべき憲法制定會議の思想を理解するであらう。農民階級の直接緊急なる窮迫に立脚する　　は、あれやこれやの『經濟的』害惡のあらゆる曝露に一定の政治的要求が結びつけられるとき――その

時はじめて階級鬪爭を農村へ移入すべきその任務を正當に果し得るであらう。

しからば問はん、社會民主主義的勞働者黨はこの種の要求をその綱領に採用し得るであらうか？　農民の間に煽動を行ふことは可能であるか？　その結果は、吾々自身が分裂して、さうでなくてさへ格別多くでもない我らの的勢力を、最も重要にして唯一の確實な運動の潮流からそらすことになりはしないか？

この種の異論は誤解に基づくものである。然り、吾々は、我が國の農村を農奴制のあらゆる遺物から解放するといふ要求を無條件に我らの綱領のなかに加へなければならぬ。かかる要求は、農民の最良分子の間に、獨自の政治鬪爭とまでは行かずとも、勞働者階級の解放鬪爭の意識的支持を喚起し能ふものである。もし吾々が社會的發達を阻止するか、または小農を資本主義の成長から、大生産の發達から、人爲的に保護する如き方策を取らんとするならば、吾々は一の誤膠を犯すものであらう。しかし、もし吾々が、一八六一年二月十九日の改革が地主および官吏の手に歪められて果さなかつた、かの民主々義的諸要求を農民の間に流布するために、勞働者運動を利用することを理解しないならば、それは尚ほ一層有害な誤謬であらう。我が黨が絶對主義に對する鬪爭において全民衆の先頭に立たんと欲するならば、我が黨はこれらの要求を採用しなければならぬ。* しかし、これは、吾々が活動的な的勢力を都市から農村へ召集することを前提とするものではない。そん

なことは問題たり得ない。黨のすべての戰鬪的要素は都市および工場中心地へ志さなければならぬこと、工業プロレタリアートのみが絶對主義に對する果斷なる大衆鬪爭を行ひ得ること、工業プロレタリアートのみが、たとへば公けの示威運動の組織とか、正規的に發行されて廣く配布される民衆新聞の發刊とかの如き鬪爭の手段を用ひ得ることは、何らの疑ひをも容れぬところである。吾々が農民の諸要求を我らの綱領中に加へなければならぬのは、確信ある社會民主主義者を都市から農村へ召集するためでも、彼れ等を農村へ縛りつけるためでもなく——斷じてそんなためではなく——、むしろ農村以外には利用され得ない諸勢力に行動への指針を與へるためであり、多くの優秀な社會民主主義的知識階級や勞働者が種々の事情のために農村と保つてゐる連絡——その連絡は運動の成長と共に擴大し成長するに相違ない——を、民主主義と自由に對する政治鬪爭とのために利用せんがためである。吾々が義勇兵の小部隊であつた段階、社會民主主義的諸勢力の全貯蓄が『勞働者の方へ行つた』青年の小集團のなかで全部費ひ果された段階を、吾々は既う疾くの昔しに經過した。我らの運動はいまや全部の軍隊、——社會主義と自由とのための鬪爭に從事してゐる勞働者の一軍、——嘗て運動に參加したし、現にまた參加してゐて、目下のところ既にロシヤ全土にひろまつてゐる知識階級の一軍——、希望と信念とに滿ちて勞働者運動を眺め、いつでもそのために幾千の勞を執らうとしてゐる同情者の一軍——を驅使してゐる。吾々はこれらすべてのすべ

* 前記の諸要求を含む社會民主々義的綱領草案は既に吾々の手で作成された。この草案が「勞働解放團」の助力を得て審議され，訂正された後，近刊の機關紙のなかで，それが我が黨の綱領草案と一緒に發表せられんことを希望する。

き一大任務に當面してゐるのである。すなはち、速かに　一する沸騰を喚起するのみならず、分散的な（從つてまた無害な）不意打ちを敵に加へるのみならず、執拗なる組織された鬪爭において敵を全線に亘つて追擊し、　　　　が壓制の種子を蒔いて憎惡を買つたあらゆる場所でその政府を攻擊し得るやうに組織しなければならぬ。幾百萬人口の農民大衆のなかに階級鬪爭と政治的意識との種子を植ゑつけずして、この目的を達成することが果して可能であらうか？　吾々はこれが「農民のなかへ階級鬪爭を持ち込むこと」が不可能であるとは言はぬ。それは啻に可能なるのみならず、既に進展してゐて、我らの眼や我らの影響の屆かぬ幾千の方法で實行されてゐる。吾々がかゝる働きかけのためにスローガンを發することを理解するとき、不名譽な農奴制の一切の遺物からロシヤの農民を解放せよといふ旗印を高く揭ぐるとき、それは比較にならぬほど廣汎に且つ急速に進展するであらう。都會へ來る田舍の人達は、今日既に、彼れ等には理解しがたき勞働者の鬪爭を好奇心と興味とに滿ちて眺め、そのことを遠隔の隅々にまで傳へてゐる。吾々は、これらの局外の傍觀者の好奇心を、勞働者は全民衆の利益のために鬪つてゐるのだといふ絕對的理解、あるひは少なくとも漠然なる意識に代へ、——その好奇心をますく多く勞働者の鬪爭に對する同情に代へるほどに進展することができるし、またさうしなければならぬ。しかるときまた　　　　政治に對する××的勞働者黨の勝利の日が、吾々自身にさへ豫期し得ざるほどの意外な速さを以て近づくであらう。

# 黨の組織と日和見主義者に對する爭鬪

# 『批判の自由』とは何んぞや？

（一九〇二年、『何を爲すべきか？』より）

『批判の自由』とは、目下のところ、たしかに、萬國の社會主義者や民主主義者の間の論爭において最も多く用ひられる最新式の標語である。一見したところ、論爭者たちがかくも勿體ぶつて批判の自由を主張することほど奇怪に見えるものはない。學問の自由と學術研究の自由とを保證するかのヨーロッパの大多數の國々の憲法に反對する聲が、進歩的な諸政黨の中から何時か唱へ出されたことがあつたか？　局外者のすべては到る處でこの流行語を聞くが、しかもまだ論爭の眞相を見究め得ずに、『どうも變だ』と言ふに相違ない。『この標語は、明かに、綽名の如く使つてゐるうちに認められ、さうして全く普通名詞となつてしまつた慣用語の一つである。』

實際、近代の國際的*社會民主主義に二個の傾向が發生して、その間で或る時は鬪爭が燃え上がり赤い焰をふくかと思へば、やがて消え失せて、堂々たる『休戰』決議の灰の下にちらちらしてゐることは、何人にも隱れなき事實である。『舊き獨斷的』マルクス主義を『批判的』に取扱ふ『新傾向』が如何なるものであるかを、ベルンシュタインが充分に明言し、ミルランがその實例を示した。

* 因に，最近の社會主義の歴史において，社會主義の內部における種々の傾向の爭論が，國民的範圍から，初めて國際的範圍へ移つて行つたといふこの事實は，この方面における殆んど唯一つの喜ぶべき現象である。以前には，ラッサール派とアイゼナッハ派との，ゲェート派と漸進派との，フェビアン派と社會民主主義者との，『ナロードナヤ・ウォリヤ』と社會民主主義との，爭點は純然たる國民的問題にとどま

社會民主黨は、社會、　の政黨から、社會改良の民主主義的一政黨へ轉化しなければならぬ。ベルンュタインは、この政治的要求を、可なり巧みに精選された『新しき論據と觀察』との全砲壘を以て掩護した。社會主義を科學的に建設すべき可能性は否定され、唯物史觀の立場から社會主義の必然性と不可避性とを論證すべき可能性は否認された。貧困の增大とプロレタリア化と資本主義的諸對立の尖銳化との事實は否認され、『最終目標』そのものの概念は不充分なりと宣言され、プロレタリアート××の觀念はきつぱりと拒否された。自由主義と社會主義との間の原則的對立は否認され、階級鬪爭の理論は、多數者の意志に從つて規制される嚴密に民主的な社會には適用しがたきものだといふので否認された。

かくの如く、××的社會民主主義からブルジョア的社會改良主義への斷乎たる方向轉換の要求はマルクス主義のあらゆる基本思想に對するブルジョア的批判への同じく斷乎たる方向轉換を結果した。ところで、後者のかういふ批判は、政治の演壇からも、大學の構壇からも、または無數のパンプレットや幾多の學術論文のなかでも、既に久しくマルクス主義に對して行はれてきたのだから(有識階級の青年は、何十年もの間、かうした批判を系統立つて敎へ込まれたのだから)、社會民主黨內における『新たな批判的』傾向が、まるでミネルバ(智慧の女神)がジュピターの頭から飛び出したやうに、充分の用意を整へて忽然と出現したことは何も驚くに當らない。この傾向はその內容

り，純然たる國民的特性を反映し，云はば舞臺を變へて行はれてゐたのである。現在では(今日ではそれは殊に明瞭に看取される)，イギリスのフェビアン派，フランスの入閣派，ドイツのベルンシュタイン派，およびロシヤの』批判家』たちはただ一個の家族を形式してゐて，彼等は皆お互に讃め合ひ，お互に支持し合ひ，謂はゆる『獨斷的』マルクス主義を共同に攻擊してゐる。國際的革命的社會民主黨は　おそら

上自己を發展さすに及ばなかつた。それはブルジョアの文壇から直接社會主義の文壇へ持ち込まれたのである。

そればかりではない。ベルンシュタインの理論的批判と彼の政治的意見とは今以て何人にも不明であるとしても、フランス人はこの『新方法』の具體的な實物をありありと見せてくれたのである。フランスは、今度もまた、『歷史的階級鬪爭が、その都度、その他のどこの國よりも最後のどたん場まで鬪ひ貫かれた國』（マルクス『ブルメール十八日』へのエンゲルスの序文）としてのその舊き名聲をはづかしめなかつた。フランスの社會主義者たちは、理論を弄ばず、直ちに實行に着手した。民主的方面では比較的に發達してゐるフランスの政治的狀勢は、彼等をして直ちに『實際的ベルンシュタイン主義』に訴へさせ、その一切の歸結を見ることを可能ならしめたのである。ミルランはこの實踐的ベルンシュタイン主義のすばらしい模範を提供した――ミルランがベルンシュタインとフォルマールとにかくも熱心なる辯護者を見出したことは、無理からぬことである！ 實際、社會民主黨が元々單に一個の改良黨であり、さうしてそれを公然と承認する勇氣を持たねばならぬとせば――社會主義者といふものはブルジョア內閣に入るべき權利を有するのみならず、常にそのために努力すべきでさへもある。民主主義なるものが元々階級支配の廢止を意味するものとせば――なぜ社會主義大臣は階級協調に關する演說を以てブルジョアの全世界を狂喜させてはいけないのか？ 憲兵

く，社會主義的日和見主義との眞に國際的なるこの遭遇戰において既に久しくヨーロッパに跋扈してゐる政治的反動を終熄せしめるに足るほど充分に强固となるであらう？

による勞働者の虐殺が百度も千度も民主主義的階級協調のほんとうの性質を曝露した後といへども
なぜ彼は內閣に踏みとどまつてゐてはいけないのか？　なぜ彼は、フランスの社會主義者たちが今日絞首臺と笞刑と迫害との英雄と稱してゐるところの、ツアーの歡迎會に個人的にのぞんではいけないのか？　さうして、全世界の面前でのこの言ひやうなき社會主義の屈辱と自己卑屈とに對する埋合せ、勞働者大衆の社會主義的意識——これは吾々に勝利を保證する唯一の基礎である——を腐敗させたことに對する埋合せ、この埋合せこそ、みすぼらしい種々の改革、ブルジョア政府にすでに多くのことをなさしめたほど無意味な改革の仰山らしい企圖なのだ！

故意に目をつぶらない者であれば、社會主義における新しい『批判的』傾向が日和見主義の新しい一變種に外ならぬことを見るに相違ない。本人自身が身につけた金ぴかの禮服に從つてその人を判斷せず、自分で自分自身に名づけた魅力的な稱號に從つてその人を判斷せず、むしろその人が如何に行動し、實際何を宣傳してゐるかに從つて判斷するならば——謂はゆる『批判の自由』なるものは社會民主黨內における日和見主義的傾向の自由であり、社會民主黨を民主主義的改良黨に轉化することの自由であり、ブルジョア的觀念およびブルジョア的要素を社會主義のなかに培養することの自由であることが明かとならう。

自由とは偉大な言葉ではあるが、產業の自由の旗の下に略奪的戰爭は行はれた。勞働の自由の旗

の下に勞役者は搾取された。これと同樣の內密の胡麻化しは、今日の『批判の自由』なる言葉の應用のなかにもある。自分が科學を進展させたことを事實上確信してゐる人々なら、舊き見解と並んで新しき見解の自由を要求せず、むしろ前者に代ふるに後者を以てせんことを要求したであらう。『批判の自由萬歲』といふ今日の叫びは、空樽の寓話を甚だしく思ひ起させる。

吾々はしつかり手を握り合ひながら、小さな集團として、險阻な峨々たる山路をよぢ登らう。吾々は四方八方から敵に取り卷かれてゐるのであつて、ほとんど絕え間なく敵の砲火を浴びて前進しなければならぬ。吾々はなかんづく敵と鬪ひ、さうして近くの泥沼に落ち込まないやうに、各自みづから決心した上で團結した。その泥沼の住民たちは、吾々が一の特殊な集團に團結して、和解の道の代りに鬪爭の道を選んだと云つて初めから吾々を讒謗した。いまや吾々のなかの多くの人々がこの泥沼へ行かう！　と叫びはじめてゐる。——彼等の迷を解かうとすると、彼等は答へて言ふ、『君達は何といふ時代おくれの人間なんだ！　君達は、もつと安全な道へ來いといふ吾々の自由を剝奪して恥ぢないのか？』と。さうだとも諸君！　諸君がさう呼ぶのは自由であり、諸君の行き度い處へ、泥沼にまで行くのは諸君の自由である。吾々は、君達のほんとうの場所が泥沼のなかにこそ在ることを知つてゐる。吾々はいつでも諸君がそこへ移轉するのをお傳ひしよう。だが、吾々に構つてくれるな、吾々に嚙りつかないでくれ、さうして『自由』といふ偉大な言葉をけがしてくれる

な。吾々も同じく吾々の行き度い處へ行くのは『自由』であり、泥沼に對して戰ふのみならず、その泥沼へ廻れ右する連中を攻擊するのも吾々の自由なんだから！

# エンゲルスの理論闘争の意義について

（一九〇二年『何を爲すべきか？』より）。

『獨斷主義』、『理論拘泥主義』、『思想の强制的劃一に對する不可避的懲罰としての黨の硬化』――これは謂はゆる『批判の自由』の擁護者たちが『ラボーチェエ・ディエロ』（註一）（勞働者の事業）のなかで騎士の如く攻め立ててゐるところの敵である。吾々は、この問題が日程にのぼされたことを非常に喜ぶものである。ただ吾々はこれにもう一つの問題を附加したい、

審判者は誰れか？

（註一）『ラボーチェエ・ディエロ』（勞働者の事業）。――一八九九年から一九〇二年まで發行された『ロシヤ社會民主主義同盟』の機關紙。この機關紙はロシヤ社會民主黨内における日和見主義的傾向を代表してゐた。『勞働者の事業』紙は謂はゆる段階理論を宣傳した。その理論の具體的表現は、『經濟主義者』（勞働組合一點張り論者）の宣傳と『政治家』――政治運動の指導と政權獲得のためには勞働者階級の獨自の政黨が必要であると聲明した人達――の宣傳とが、勞働者階級の『首尾一貫せる發展段階』であると說いたことである。『勞働者の事業』紙の見解に從へば、ロシヤの勞働者階級は、彼等の物質的地位を高上さすための闘爭にのみ終始しなければならなかつたので、彼等は、その當時はまだ、政治闘爭のために充分に成熟してゐなか

つたといふのであつた。

文書出版に關する二個の宣告書が吾々の手元にある。その一はロシヤ社會民主主義者同盟の定期的に發行される機關紙『ラボーチェエ・ヂィエロ』の綱領であり、他は『勞働解放』團の出版物の再發行に關する聲明書である。兩者共その日附は、『マルクス主義の危機』が既に久しく切迫してゐた一八九九年である。しかるにいまは？前者の宣告のなかに、かかる現象の一痕跡なり、またはこの問題においてその新機關紙が採用しようとしてゐる立場の一定の說明を求めて見ても無駄であらう。理論的活動および所定の時期における自己の緊急なる諸任務については、この綱領のなかにも、または一九〇一年の同盟の第三回大會が採用したその綱領の補修のなかにも一言片句も述べてない。理論上の諸問題は全世界の社會民主主義者を忙殺せしめたにも拘らず、『ラボーチェエ・ディエロ』の編輯部はその全期間を通じてこの問題を顧みなかつた。

これに反して『勞働解放』團の聲明書は、先づ第一に、最近數年間における理論に對する興味の減少を指摘し、『プロレタリアートの運動における理論的方面の鋭き注意』を切に要求し、我らの運動における『ベルンシュタイン派およびその他の反革命的傾向に對する忌憚なき批判』を叫んでゐる。『ザリャー』(註二)(曙光)の既刊號はこの筋書が如何に實行されたかを示してゐる。

（註二）『ザリャー』(曙光)。――『イスクラ』(同誌がメニシェヴィキの手に歸する以前の）の協力を得て出

版された正統マルクス主義の雜誌。同誌は一九〇〇年から一九〇三年まで發行された。同誌はマルクス主義および社會主義の理論に關する種々の問題を取扱つてゐた。レーニンは『ザリャー』誌に寄稿してゐた。

かくて吾々は、思想の硬化云々に對する誇張の言辭が、單に理論的思惟の發展における無關心と無能とを言ひ繕ふものにすぎないのを見る。ロシヤの社會民主主義者の實例は、ヨーロッパの一般的現象(この現象はドイツのマルクス主義者たちによつて疾うの昔しに認められたものである)を特に明瞭に例示するもので、そは約束の批判の自由なるものが、一の理論に代ふるに他の理論を以てすることを意味せず、むしろすべての統一的な徹底せる理論からの自由、すなはち折衷主義および無原則主義を意味するものであることを示してゐる。幾分でも我らの運動の實狀に精通してゐる人なら、マルクス主義の著しい普及が或る程度の理論的水準の低下をきたしたことを知つてゐるに相違ない。理論の豫備知識の甚だ乏しい、または全然ない多數の人々が運動に投じてきたことは、運動の實際的意義およびその實際的効果のためには嘉すべきことであつた。しかし、この事實から『ラボーチェエ・ディエロ』が『現實の運動の一歩一歩は一ダースの綱領よりも重要である』といふマルクスの言葉を得々として唱へるとき、同紙に如何に機略が缺けてゐるかを見ることができる。理論的沈衰の時期にこの言葉を繰返すのは、ロシヤの民間童話のなかの或る主人公の如く、葬式の行列を眺めながら『果しなくつゞけ！』と叫ばんとするに齊しい。それにマルクスの右の言葉は、

ゴータ綱領に關する彼の書翰から引用したものであつて、彼はその書翰のなかで、原則を規定するに當つて讓歩された折衷主義を鋭く批判したのである。マルクスは黨の指導者に宛てて、吾々が合同しなければならぬ以上、運動の實際的目的のために協定を結ぶのは止むを得ないが、しかし原則の掛引は許さるべきでなく、理論上の『讓歩』をなしてはならぬと書いてゐるのである。これがマルクスの思想であつた。しかるに吾々の間には、マルクスの名において理論の意義を低下せんとする人々がゐる！

××的理論なくして、また如何なる××的運動もあり得ない。日和見主義の近代的說教が實際的活動の狹量なる形態に對する熱狂と合體してゐる時期に當り、この思想はいくら强調されてもいゝ。しかし、ロシヤの社會民主主義にとつては、理論の意義は、しばしば閑却されがちな三つの事情によつて尙ほ一層强められてゐる。すなはち、第一、我が黨はやうやく成立しかけたばかりで、やつとその面相を表面に現はしはじめ、さうして、運動を正道からそらせやうとするその他の革命的思想傾向を片付けてまだ間もないこと。むしろ反對に、最近の時期こそ非社會民主主義的革命的傾向の活躍を以てその特徴としてゐたのである（たとへばアクセルロードが疾うから經濟主義者に對してそれを豫言してゐた如く）。かくの如き事情の下では、一見『重要ならざる』誤謬も最惡の結果をもたらし得るし、また近眼者流のみが、分派的論爭や各派の相異の嚴密な識別を時機に適せぬ無

用のことと見做すことができる。ロシヤ社會民主主義の長い將來は、各派の『色合』の整理統合„Konsolidierung" にかかつてゐる。

第二に、社會民主主義運動はその全本質上國際的である。といふのは、吾々が國民的排外主義に對して鬪はなければならぬといふばかりではない。それはまた、若い國に起る運動は、その他の諸國の經驗を攝取するときにのみ成巧的であり得るといふことを意味する。それを攝取するためには他國の經驗に單に通じてゐるとか、最近の決議を單に筆寫するだけでは足りない。そのためには、これらの經驗を批判的に把握し、それを獨立に檢討することを解しなければならぬ。近世勞働者運動が如何に力強く成長して、如何に種々の分枝を生じたかを思ひ浮べる人なら、その運動の任務の成就のために、理論の力と政治的(または×××)經驗との如何ばかりの貯蓄が必要であるかを悟るであらう。

第三に、ロシヤ社會民主黨の國民的諸任務は、世界の如何なる社會主義黨も未だ曾て有しなかつた如きものであることである。吾々は、絕對主義の壓制から全民衆を解放するといふこの任務が吾人に課するところの、種々の政治的および組織的義務については後ほど述べることとしよう。いまは、指導的理論に導かれる政黨のみが、前衞鬪士の役割を果し得るといふことを指摘するだけにとどめたい。これが何を意味するかを幾分でも具體的に描き出すためには、讀者諸君はよろしく、へ

ルツェン、ビエリンスキー、チェルニシェフスキー[註三]の如きロシヤ社會民主黨の先驅者や、七十年代の輝かしい革命家の一團を想起するがいゝ、よろしく、今日ロシヤの文獻が獲てゐる國際的意義を想起するがいゝ。よろしく……いやこれで充分だ。

(註三) ヘルツェン——著述者にして哲學者(ヘーゲル學徒)。ロシヤの社會主義の始祖の一人。——ビエリンスキー、批評家にして政論家。その世界觀から言へばヘーゲル學徒であつた。ロシヤにおける農奴制と封建支配とに反對して評論の筆を執つてゐた。その晩年には、青年ヘーゲル學派および社會主義に傾いてゐた。チェルニシェフスキー、ロシヤの著明な唯物論者、空想社會主義者。ロシヤの『啓蒙家』の最大代表者で、マルクスもこの人を非常に尊重してゐる。

以下に、社會民主主義運動における理論の意義に關するエンゲルスの言葉を引用しよう。エンゲルスは社會民主黨の偉大な鬪爭を——たとへば我が國の慣しとなつてゐる如く——二つの形態(政治的形態と經濟的形態)だけとせず、それに理論鬪爭を加へて三つの形態を主張する。實際的にも政治的にも有力であつたドイツの勞働者運動に對するエンゲルスの指導は、今日の種々の問題や論爭の立場から見てもしかく教訓的であるので、讀者諸君はおそらく『ドイツ農民戰爭』から取つた次の長い引用文を惡く取られないであらう。

『ドイツの勞働者はその他のヨーロッパの勞働者に比して二個の本質的な長所を有してゐる。第

一、彼等はヨーロッパの最も理論的な國民に屬してゐて、ドイツの謂はゆる『教養ある人士』に全く失せてしまつてゐた理論的意義を守つてきたのである。ドイツ哲學、なかんづくヘーゲル哲學の先行なかりせば、ドイツの科學的社會主義——嘗て存在したうちで唯一の科學的社會主義——は決して成立しなかつたであらう。勞働者の間に理論的意義なかりせば、この科學的社會主義は、今日ある如く、勞働者の血と肉となることはなかつたであらう。しかして、このことが如何に測り知るべからざるほどの長所であるかを示す實例としては、一方に、イギリスの勞働者運動が一つ一つの組合の優れた組織にも拘らず、かくも遲々として進展してゐない主もな理由の一つたる、あらゆる理論に對する無關心があり、他方ではまた、プルードン主義がフランス人やベルギー人の間ではその本來の姿をとつて、スペイン人やイタリア人の間ではバクーニンによつてさらに一層戲畫化された姿をとつて起つたところの、不整頓と混亂とがある。

第二の長所は、ドイツ人が時間から言へば殆んど最後に勞働者運動へ來たことである。ドイツの理論的社會主義は、サン・シモン、フリエー、およびオーエン——この三人はその架空的なることとその空想主義とにも拘らず、あらゆる時代を通じて最も卓越せる人物に屬して居り、さうして無數の眞理を時代に先んじて天才的に認めた人々で、吾々はその眞理の正しさを今日科學的に論證することができる——の後を繼いでゐることを決して忘れない如く、ドイツの實踐的勞働者運動は、

イギリスおよびフランスの運動の後を繼いで發達したもので、高價な犧牲を拂つて得られたこれらの諸國の經驗をわけなく利用し、その當時多くは避け得られなかつた誤謬をも今日避け得ることを決して忘れてはならぬ。イギリスの勞働組合、フランス勞働者の政治的鬪爭の先例がなかつたら、特にパリー・コムミュンが與へた巨大な衝動がなかつたら、吾々は今日どこにゐただらう？

『吾々は、ドイツの勞働者に向つて、彼等が稀に見る理解力を以て自己の境遇の長所を利用してきたことを稱讚しなければならぬ。勞働者運動が起つて以來、はじめて、その鬪爭は三つの方面に向つて――理論的・政治的・および實際的＝經濟的（資本家に對する反抗）方面に向つて――相互に調和し連絡を保ちながら計畫的に行はれてゐる。この云はば集中的攻擊のなかにこそ、ドイツの運動の强みと不拔性とは橫はつてゐる。

『ドイツの勞働者は、目下のところ、一方では彼等のかくの如き有利な地位により、他方ではイギリスの運動の島國的特性とフランスの運動の暴力的鎭壓とにより、プロレタリア鬪爭の前衞に置かれてゐる。種々の事件がいつまでこの榮職をドイツの勞働者に許すかは豫言のかぎりでない。しかし、彼等がその地位を占めてゐるかぎり、彼等はおそらく適宜にその職務を果してゆくであらう。そのためには、鬪爭と煽動とのあらゆる分野における倍加せる努力が必要である、あらゆる理論的問題をますます鮮明にし、舊來の世界觀に屬する在り來りの慣用語の影響からますます自己を解放

して、社會主義が一の科學となつて以來、それはまた恰も一の科學の如く取扱はれんことを、卽ち研究されんことを欲するといふことを常に眼中に置くことは、なかんづく指導者の義務であらう。要は、かくして獲られた、ますます鮮明となれる見解を一層の熱心さを以て勞働者大衆の間に流布させ、政黨並びに勞働組合の組織をますます鞏固に結束せしむるにある。

『……ドイツの勞働者はかくの如く前進するとしても、彼等は必ずしも運動の先頭に進むを要しない——どこかの一國の勞働者が運動の先頭に進むことは決して運動の利益ではない——それにしてもドイツの勞働者は戰線において名譽ある一地點を占むるであらう。さうして彼等は、豫期せざる困難な試練か重大な事件かが起つて、彼等に高き勇氣と高き決意と實行力とを要求するとき、充分準備を整へてその地點を守るであらう』。

エンゲルスのこの言葉は豫言であつたことが證明された。それから數年ならずして、ドイツの勞働者は社會主義者に對する例外法の形で突然苦難な試練を受けたのである。ドイツの勞働者は自己の力を充分に準備してそれを迎へ、その難局を勝利者として切り拔けることができた。

ロシヤのプロレタリアートは遙かに測り知るべからざるほどの困難な試練に當面し、一個の怪物に對する鬪爭に當面してゐる。これに比すれば、　　　　の如きは眞に言ふに足らぬものである。歷史は今日吾々に緊急なる任務を指し示したが、その任務たるや全世界における

プロレタリアートの一切の切迫せる任務のうちで最も×××なものである。この任務を實現して、ヨーロッパの、然りまたアジアの（吾々は今日かく言ふことができる）プロレタリアートの××壞するならば、ロシヤのプロレタリアートは萬國の××となるであらう。吾々が我らの幾千倍も深刻な且つはるかに廣般な運動を〔七十年代におけると〕同樣の果斷なる決意と實行力とを以て準備することを解するならば、我らの先驅者たる七十年代の革命家たちが旣にその名に値ひしたところの、この〔前衛の〕尊稱に吾々が値ひすることを信ずべき權利を吾々有するはものである。

# 大衆の自然生長性と社會民主主義の目的意識

（一九〇二年『何を爲すべきか？』より）

吾々は、七十年代の運動よりもはるかに廣汎且つ深刻なる我らの運動を、當時におけると同様の果斷なる決意と實行力とを以て活氣づけなければならぬと言つた。事實、今まで、今日の運動の力が大衆の（主として工業プロレタリアートの）覺醒にあり、その弱みが指導的の意識程度と創意心との缺除にあることを、誰れも疑ふものはなかつたと、私は信じてゐる。

しかるに、つひ最近のこと、この問題について從來行はれてゐた一切の見解を覆えしさうな一の破壞的發見がなされた。この發見は『ラボーチェエ・ディエロ』によつてなされたものであつて、同紙は『イスクラ』および『ザリャー』に對する論戰において細々しい反對意見にあくせくされず、『一般的な意見の相違』を深いところにある根源にまで、すなはち『自然生長的要素と意識的計畫的要素との相對的意義に關する評價の相違』にまで遡らうと試みたのである。『ラボーチェエ・ディエロ』の彈劾狀は、『客觀的な卽ち自發生長的な發達要素の過少評價』を訴へてゐる。吾々はこれに對して答へやう、『イスクラ』および『ザリャー』の反駁文は『ラボーチェエ・ディエロ』をしてこ

の『全般的意見の相違』に關する結論をなさしめた以外に、絶對に何らの結果をも生まなかつたにしろ、この結果だけでも吾々を大に滿足させたのだ、と。――それほど右の彈劾狀は意義多きものであり、且つロシャの社會民主主義者の間における今日の理論上および政治上の意見の相違の全本質の上にそれほど明るい光を投じてゐる。かるが故に意識的行動と自然生長性との間の關係の問題は重大な一般的興味を惹くし、且つまたこの問題は一層詳細なる考察に値ひする。

九十年代の中葉頃、ロシャの教養ある青年の間にマルクス主義の理論に對する疫病的熱狂が起つたことは、吾々の既に指摘したところである。勞働者のストライキも、これとほぼ時を同じうして一八九六年の有名なペテルスブルグの産業戰以後、同樣の疫病的性質を帶びてきたのであつた。勞働者のストライキがロシャ全土に擴まつて行つたことは、新たに開始された民衆運動の深刻さを明かに證明したもので、苟も『自然生長性』を言はんとする以上、先づ第一に、この運動をこそ自然生長的と稱すべきであらう。しかし、自然生長性にも色々ある。ストライキは、ロシャにおいては『自然生長的な』端初的な機械の破壞やその他を伴ふて、七十年代にも六十年代にも(十九世紀の前半期にすらすでに)存在した。これらの『暴動』と比較すれば、九十年代のストライキは(註一)『意識的』とさへ稱され得やう――勞働者運動がこの時代に前進した進歩はそれほど著しきものである。この事實は、『自然生長的要素』なるものが、もともと目的意識的行動の萠芽形態に外ならぬことを吾人

に示してゐる。原始的な暴動でさへ既に或る程度の意識の覺醒を表現した。すなはち勞動者たちは彼等を壓しつけてゐる制度の大磐石に對する傳來の信念を失ひ、……さうして集合的防衛の必要を理解しないまでも、それを感じはじめ、かくして彼等は、　　に對する奴隷的屈從と斷然手を切るに至つたのである。しかし、これはまだ鬪爭といふよりも、むしろより多く絶望と復讐との流出であつた。九十年代のストライキとなると早くもより多く意識的要素を吾人に示してゐる。すなはち一定の要求が掲げられ、如何なる時機が有利であるかが前以て考慮され、他の地方に起つた一定の事例や實例が審議されてゐる等々。種々の暴動は單に壓迫された人々の叛逆にすぎなかつたとしても組織的ストライキは既に階級鬪爭の萠芽を表現してゐた。しかし要するにまだ萠芽であつた。これらのストライキはそれ自體としては一の勞働組合主義的鬪爭であつて、未だ決して社會民主主義的鬪爭ではなかつた。それは勞働者と雇主との間の敵對關係に對する覺醒を特徴としたが、勞働者はまだ現在の政治的および社會的制度の全體と彼等の利害との相容れざる對立關係を意識しなかつたし、また意識することもできなかつた。言ひ換へれば、彼等はまだ社會民主主義的意識を持たなかつたのである。この意味において、九十年代のストライキは、種々の暴動に比較すれば巨大な進歩たるにも拘らず、依然として一の純粋に自然生長的な端初的に行はれた運動であつた。

（註一）——九〇年代におけるロシヤの產業の急速なる發達と前後して、ストライキ運動も非常な勢ひを

以て勃興した。一八九六—九七年には、ペテルスブルグにストライキが起り、そのストライキはその他の地方にも弘まつて行つた。このストライキは、過古のストライキに比し、はるかに大きな組織とより多くの意識要素とをその特徴とした。過古のストライキはより多く自然發生的暴動の性質を帶びてゐて、機械の破壞工場の破壞等を伴つてゐるのである。これに似た勞働者の自然發生的行動は、資本主義發達の初期に當つては、西ヨーロッパにおいても起つてゐた。(イギリスにおける『機械破壞者』、ドイツにおける織工の暴動等)。勞働者運動が成長するにつれて、ストライキはます〳〵自然發生的性質を脱し、そしてます〳〵組織的となつてくる。

吾々は勞働者が社會民主主義的意識を實際持ち得なかつたと言つた。この意識は外部からのみ持ち込まれ得る。あらゆる國々の歴史は、勞働者階級が彼れ等獨自の力のみを以てしては、勞働組合主義的意識に到達し得るにすぎないこと、すなはち勞働組合に結束して、雇主に對する闘爭を行ひ政府に向つて勞働者に好意を有する何らかの法律を要求すべき*必要の確信に到達し得るにすぎないことを告げてゐる。社會主義の學説は、しかしながら、所有階級の教養ある代表者たるインテリゲンチャによつて取扱はれるところの、かの哲學的・歴史的・および經濟的諸理論から生え出でたものである。近世科學的社會主義の建設者たるマルクスおよびエンゲルスも、彼等の社會的地位から言へばブルジョア的インテリヂンチャに屬してゐた。同樣に、ロシヤにおいても、社會民主主義の

* 勞働組合主義は，しばしば假定されてゐる如く，決して如何なる『政治』とも相容れないものではない。勞働組合は，常に，一定の（しかし社會民主主義的でない）政治的煽動と一定の政治的闘爭とを行つてきた。

理論的學說は勞働者運動の自然發生的成長とは全然無關係に發生し、革命的=社會主義的インテリゲンチャの思想的發展の自然的な且つ不可避的な結果として發生したのであつた。問題の時代、すなはち九十年代の中葉には、この學說は『勞働解放』團の完結せる綱領を形成してゐたばかりでなく、ロシャにおける多數の　「青年を味方にひき入れてゐたのである。

かやうに、一方には、勞働者大衆の自然生長的覺醒、意識的生活および意識的鬪爭への覺醒があり、他方には、社會民主主義的理論を身に具へて、勞働者の方へおし寄せて行つた革命的青年の存在があつたのである。この際とくに重要なことは、しばしば閑却されてゐる（そして比較的にあまり知られてゐない）次の事實をたしかめてをくことである。すなはち、熱心に經濟的煽動を行つてゐた（そしてこの點では、當時まだ筆寫のまゝ流布してゐた小冊子『煽動について』[註二]の眞に有益な指圖に從つてゐた）その當時における初期の社會民主主義者たちは、經濟的煽動を彼等の唯一の任務と見做すことなく、むしろ反對に、一般的にはロシャ社會民主黨の最も廣汎なる歷史的任務を、また特殊的には絕對主義を××すべき任務をそもそもの初めからかかげてゐたのである。かくて例へば、『勞働者階級解放鬪爭團』[註三]を設立したペテルスブルクの社會民主主義團は、すでに一八九五年の終りに、『ラボーチェィエ・ディエロ』(勞働者の事業)なる標題の下に一新聞の第一號の編輯を終へてゐたのである。この第一號はすでに印刷に附するばかりになつてゐたところ、一八九五年十二

月八日から九日の夜にかけて同國體員の一人アー・アー・ワネイエフ*の處で押收され、『ラボーチェエ・ディエロ』の初號は世の光を見ることができなかつた。同紙の論説(今後三十年も經てば、『ルシカヤ・スタリナ』(ロシヤの古代)といふ如き何かの機關紙が多分この論説を警察署の文書のなかから堀り出してくれやう)はロシヤにおける勞働者階級の歷史的任務を記し、その任務の先頭に政治的自由の獲得をかかげてゐた。さらに同紙のなかには『初等教育委員會』の警察による解散を扱つた一論文『我が國の大臣は何を考へてゐるか?』や、ペテルスブルグおよびその他の地方からの幾多の通信文(たとへばヤロスラウル縣における勞働者の虐殺などの)が載つてゐた。かくの如く、吾々が間違つてゐなければ、九十年代におけるロシヤの社會民主主義者のこの『最初の試み』は、一地方的な、もしくは全然『經濟的』な性質を帶びてゐたのではなく、むしろストライキ鬪爭を絶對主義に對する××的運動と融合させ、反動的な解らず屋の政治のために壓迫されるすべての人々を社會民主黨の支持のために獲得しようと努力した一新聞をなすものであつた。幾分でも當時における運動の狀態に通じてゐる人であれば、かくの如き新聞が主要都市の勞働者や知識階級の絶對的な共鳴を見出し、廣く流布してゐたことを疑はぬであらう。この計畫の失敗は、當時の社會民主主義者たちに××的經驗と實踐的準備とが缺けてゐたために、彼等が當面緊急の要求に應じ得なかつたことを證明したものにすぎない。同樣のことは『聖ペテルスブルグ勞働新聞』についても、

* アー・アー・ワネイエフは，未決拘留の密室監禁のなかで罹つた結核のために，1899年東シベリアで死亡した。玆に引用した事實は，ワネイエフと直接に親しく知り合つてゐた人達から出たものなのだから，私はそれを發表しても差し支へはなからうと思つてゐる。

また特に『ラボーチャヤ・ガゼータ』（勞働者新聞）、および一八九八年の春に創設されたロシヤ社會民主勞働黨の『宣言』(註四)についても言ひ得られやう。もちろん吾々はかくの如き準備の缺除を當時の責任ある同志たちに歸せやうなどとは露ほども思つてゐない。しかし、運動の種々の經驗を利用してこの經驗から實際的敎訓を引き出すためには、當の誤謬の原因と意義とを充分明かにしてをかねばならぬ。それ故に、一八九五年から一八九八年の間に活動してゐた社會民主主義者の一部（おそらくはその多數者まで）が、『自然生長的』運動のそも〳〵の初めに當つて、當時全く正當に、最も廣汎に亘る綱領と鬪爭戰術とを提唱することを可能なりと考へてゐたことを明かにしてをくことは、*極めて重要なことである。大多數の　　　たちに準備が缺けてゐたことは、全く當然の現象として殊に憂ふるほどのことでもなかつた。問題の提起が正しく、この任務を實現せんとする孜々たる試みのための精力があつたとすれば、一時的な失敗それ自體は半分の不幸たるにすぎなかつた。××　　　とは吾々が修得し得る事柄である。それに必要なる資格を練へんとする意志のみが必要だ！　自己の誤謬を明かにすることのみが必要だ！　　　な事柄においては過失の半端な匡正ほど有害なものはない。

　だが、この意識が消え失せかけ（前記の諸團體の人々の間ではこの意識は非常に生き生きと存してゐた）、過失を言ひ繕はんとした人々、自然生長性に對する自己の盲目的禮讚と崇拜とを理論的に

* 經濟主義者たちは『ロシヤ社會民主黨機關紙に對する公開狀』（「イスクラ」紙第12號）のなかで，「イスクラ」紙は90年代の初頭における社會民主主義者の活動に對し消極的態度をとり，同時に部分的要求のための鬪爭以外のすべての活動のためには，その條件が缺けてゐたことを誤認してゐる』と聲明してゐる。しかし，本文に引用した事實は『諸條件が缺けてゐる』といふ主張が眞理とは正反對になつてゐること

さへ基礎づけやうと試みた人々、あまつさへさうした社會民主主義的機關紙までが出現するに及んで、この半分の不幸は全部の不幸となつた。

（註二）小册子『煽動について』は、一八九三年から九四年の冬にかけて、當時のロシャの國境地方ヴィルナで發行されたものである。その著者はクレーマーで、その編輯人はマルトフであつた。小册子『煽動について』は、社會民主主義者の狹まい範圍内の宣傳が政治的性質を帶びてをらず、專ら啓蒙の性質のみを帶びてゐたものを、ツァーリズムに對する大衆的政治鬪爭へ移すといふ具體的計畫を確實な論據に基づいて說いたのである。この小册子は理論的には全然非難すべき點がなくもなかつたが、その影響は非常に大きかつた。この小册子は、筆寫のまゝ、非合法的に、苟も何かの社會民主主義的小集團が存在した處には、ロシャ全土に亙つて著しく普及した。それは外國で飜刻されたのである。

（註三）『勞働者階級解放同盟』（一八九四年）。――ペテルスブルグにおけるプロレタリアの革命的組織、社會民主黨の先驅者。この種の團體はロシャの幾多の地方都市にも成立してゐた。ペテルスブルグ『同盟』は、『勞働者運動中央指導團』なる名の下に活動してゐた社會民主主義宣傳家の小集團から、レーニンの著しい影響を受けて發達したものである。レーニンが國外へ行つて、『勞働解放』團と連絡をとり、革命文書の輸送網を組織して以來、『同盟』の活動は頓に活氣を呈してきた。

一八九五年十二月九日の夜、『同盟』は叩きつぶされ、その主もな指者たち（レーニンもその中に加はつてゐた）は逮捕されて、流刑に處せられたのである。この時を以て同盟の活動は終りを告げた。しかし、形式

を示してゐる。九十年代の初頭のみならず，その半ばにおいても，部分的要求のための鬪爭以外の活動のためには，指導者の充分なる準備を除けば，そのあらゆる條件が全部具つてゐたのである。しかるに『經濟主義者たち』は，我らの側の，理論家および指導者の，この缺陷を公然と自白する代りに，すべてのことを『條件の缺除』に歸し，物質的諸關係の影響に歸せやうとする。そして彼等の謂はゆる物質的諸關

的には、同盟は、一九〇三年、ロシヤ社會民主勞働黨第二回黨大會の時に解散したのである。

（註四）『エス・ペェー』勞働者新聞。――社會民主黨の新聞、一八九七年に發刊さる。『勞働者新聞』。――キエフにおける社會民主主義者の機關紙（一八九七年）。ロシヤ社會民主勞働黨の第一回黨大會は、一八九八年、西部ロシヤ・サヴェート共和國の今日の主要都市ミンクスに開かれ、ロシヤの勞働者階級の種々の分散せる組織を統一的政黨に合同することを宣言した。同大會は一の宣言を發表したが、その起草者はストルーヴェであつた。その宣言はロシヤにおける資本主義的諸關係の發達、ロシヤのプロレタリアートの階級意識の覺醒を立證し、社會主義が完全な勝利を得るまで、ブルジョアジーに對する鬪爭を基礎とする政治的自由の獲得を、ロシヤのプロレタリアートの第一歩と見做してゐた。そのためには、勞働者階級の分散せる一切の力を一の統一的な社會民主黨に集合して、ロシヤにおける端初的な革命運動を意識的な階級鬪爭の軌道の方へ導びく必要があるといふのであつた。

係なるものは運動の基道を示し，如何なる理論家と雖も運動をその道からそらしめ得ないものである。かくの如きは，自然生長性への屈服以外に，『理論』家の缺陷を戀ひ慕ふ以外に果して何であるか？

# 社會主義と勞働者運動

（一九〇二年『何を爲すべきか』より、マルクス主義文庫ドイツ版第拾卷に據る）

……およそ勞働者運動における自然生長性を崇拜し、『意識的要素』の役割、社會民主黨の役割を輕視することは、同時に——誰れがこの役割を輕視し、誰れがそれを欲するか否かには全然關係ない——勞働者に對するブルジョア・イデオロギーの影響を强めることになる。絶えず『イデオロギーの過大評價』を言ひ、意識的要素の役割の誇張を云爲する者は、勞働者たちが『彼等の運命を指導者の手からひき離し』さへすれば、純粹の勞働者運動は自づから獨自のイデオロギーを作り出すことができ、またさうするであらうと空想してゐるのである。しかし、これは重大な誤謬である。私しは、以上に述べたことを補ふために、玆に、カール・カウツキーの極めて適切有意義な言葉を引用しよう。カウツキーは、オーストリア社會民主黨の新綱領草案（一九〇一年）に際して次の如く論じたのである。

『多數の我が修正主義的批評家たちは、マルクスが、經濟的發達と階級鬪爭とは社會主義的生産の前提諸條件のみならず、直接にそのものの必然性に關す認識（傍點はカウツキー）をも作り出すと主張したと思つてゐる。それだのにこれらの批評家たちは、最高度の資本主義的發達の國、即ちイ

ギリスが、あらゆる近代的諸國のうちこの認識を最も多く缺いてゐるといふ駁論を少しも取りあはぬ。

新草案に從へば、オーストリア綱領起草委員會も、かやうにして反駁される自稱『正統マルクス主義的』立場を採つてゐることが假定され得やう。けだしその文句に曰く、「資本主義の發達がプロレタリアートを增加せしむればせしむるほど、彼等はます〳〵資本主義に對する鬪爭を行ふの必要に迫られ、且つその能力を得てくる。彼等は社會主義の可能性と必然性との意識を得るに至る、云々」。

この文句で見ると、社會主義的意識はプロレタリアの階級鬪爭の必然的な直接の結果であるやうに思はれる。しかし、これは間違つてゐる。理論としての社會主義は、勿論、プロレタリアートの階級鬪爭と同じく、今日の經濟諸關係のなかに根ざしてをり、且つ後者と同じく、資本主義がもたらすところの、大衆窮乏および大衆貧困に對する鬪爭から發生するが、しかしながら、この兩者は相互に發生するものではなく、並立して、違つた諸前提の下に發生する。近代的社會主義意識は深い科學的洞察に基づいてのみ發生し得る。事實、現代の經濟學は、今日の技術とほぼ同じく、社會主義的生產の一前提條件を形成するものである。しかるにプロレタリアートは如何に希望しても、そのいづれをも同じく作り出すことはできぬ。それは兩つながら現代の社會過程から發生するもの

である。科學の擔當者はしかしながらプロレタリアートではなくて、ブルジョア的インテリゲンチャ(傍點はカウツキー)である。實際また、近世社會主義なるものは、この社會層の個々の成員の間に發生したもので、これらの人々を通じてまづ精神的に優秀なるプロレタリアートに傳へられ、次ぎに、事情が許す場合には、これらのプロレタリアートがそれ〔近世社會主義〕を彼等の階級鬪爭のなかへ持ち込んだのである。故に、社會主義的意識なるものは、外部からプロレタリアートの階級鬪爭のなかへ持ち込まれたものであつて、その階級鬪爭から自然に生え出でた或る物ではない。

從つてまた、ハインフェルト舊綱領が、プロレタリアートに彼等の地位と彼等の使命とに關する意識を充滿さすことを社會民主黨の任務となしてゐるのは、全く正しい主張である。もしかくの如き意識が階級鬪爭からひとりでに發生するものとすれば、かういふことの必要はなかつたであらう。新草案は右の文句を舊綱領から繼承して、以上に述べた文句の後にくつつけたのである。しかし、そのために、前後の思想の關係は全く引き裂かれてしまつた……』(『ノイエ・ツァイト』第二十卷、第一號、七九頁)。

勞働者大衆自身がその運動の經過につれて作り出す獨自のイデオロギーなるものが快して問題たり得ないとすれば*、問題はただ次ぎの如くである。ブルジョア・イデオロギーか、社會主義イデオロギーか。ここに中間の道はない(といふのは、諸階級の對立によつて引き裂かれた一社會にあつ

ては、一般に階級の外にある、または階級を超越したイデオロギーなるものは在り得ない如く、人類は決して『第三の』イデオロギーを作り出さなかつたからである）。それ故に、およそ社會主義イデオロギーを輕視し、それから遠ざかつてることは、同時に、ブルジョア・イデオロギーを強めることを意味する。人は自然生長性と言ふ。しかし勞働者運動の自然生長的發達こそ、取りも直さずその運動をブルジョア・イデオロギーに從屬せしめる結果となる。それこそ、取りも直さず『クレード』の綱領の方へ迷ひ込むものである。なぜなら、自然生長的勞働者運動は勞働組合主義であり勞働組合一點張り主義であり、そしてこの勞働組合主義こそ正にブルジョアジーによる勞働者の思想的隷屬を意味するからである。されば、我らの任務、社會民主黨の任務は、自然生長性に對する闘爭にある。それは、勞働者運動を、ブルジョアジーの掩護を求めんとする勞働組合主義のかくの如き自然生長的傾向から遠ざけ、その運動をして××的社會民主黨の味方に就かしむるにある……。

＊かく言ふのは、勿論、勞働者が獨自のイデオロギーの形成に毫も參加しないといふのではない。しかし彼等がそれに參加するのは、勞働者としての彼等の特性に於てではなく、社會主義理論家として、プルードン及びワイトクングとしてである、換言すれば彼等は、彼等が多少の程度に當代の知識を修習し且つその知識を發展せしめるときにのみ、且つそのかぎりにおいてのみ、それに參加するのである。しかし勞働者が屢々かかることを爲し得るためには、一般に勞動者の意識水

準を高めるためにあらゆることが爲されなければならぬ。〔そのためには〕勞働者は『勞働者用の書物』といふ人爲的に狹められた範圍に閉ぢこもつてをらず、進んで益々多く一般的文獻を渉獵することを學ぶことが必要である。勞働者は『閉ぢこもつてゐる』といふ代りに『閉ぢこもらされない』と言ふ方が確かにより正しからう。なぜなら、勞働者は自らインテリゲンチャのためにも書かれたすべてのものを讀んでをり、また讀はんと欲してゐるからである。ただ若干の（劣等な）知識階級のみが、『勞働者には』工場制度のことを語り、疾うから知れ亘つてゐる事實を繰返してやれば充分であると信じてゐる。

ドイツの實例を思ひ起さう。ドイツの勞働者運動に對するラッサール（註二）の歷史的功績はどこにあつたか？　それは、彼が、その運動を、自然生長的に（シュルセ・デリッチ（註三）およびその一味の好意的助力の下に）進められてゐた進歩的勞働組合主義および協同組合主義の道から轉換させたことである。この任務を果すためには、自然生長的要素の過少評價だの、過程としての戰術だの、種々の要素と環境との交互作用だの、その他これに類似の事柄を喋々することよりも、全く別な事柄が必要であつた。そのためには、自然生長性に對する決死的鬪爭が必要であつた。さうしてこの鬪爭が永年に亘つて鬪はれた後、その結果として、はじめて、たとへば、ベルリンの勞働者人口が進歩黨（註四）の支柱から社會民主黨の最良の牙城となつたといふことが達成されたのである。そしてこの鬪爭は今日でも

まだまだ終つてはゐない。……今日でも、ドイツの勞働者階級は、幾多のイデオロギーに分裂してゐると言はれてゐる。勞働者の一部はカトリック的および王黨的勞働者團體に組織され、他の一部は、英國式勞働組合主義のブルジョア的支持者によつて設立されたヒルシュ・ドウンカー流の組合に組織され、第三の部分は社會民主主義的諸團體に組織されてゐる(註五)。この最後の部分は殘りのすべての部分よりもはるかに多數ではあるが、社會民主主義的イデオロギーは、その他の一切のイデオロギーに對する執拗なる闘爭においてのみ、はじめてその優勢を達成し得たし、また今後もかくしてのみその優勢を維持し得るであらう。

註二、ファーヂナンド・ラッサール(一八二五——六四年)——非マルクス主義型のドイツの社會主義者一八六三年、全ドイツ勞働者總同盟を創立し、ドイツにおける最初の獨立的勞働者黨を作つた。ゴータ大會(一八七五年)のとき、全ドイツ勞働者總同盟は、ドイツのマルクス主義者(ベーベル、ウィリアム・リープクネヒト)によつて設立されてゐた社會民主勞働黨(アイセナッハ派の政黨)と合同した。この合同から發生したドイツ社會民主黨は、日和見主義的墮落に陷るまで、全世界の勞働者運動の模範となつた。ラッサールの主もな功績は、ドイツの勞働者階級を、ブルジョア民主主義者による組織的および精神的從見から解放したことである。

註三、セュルシュデリッチ——プロシヤ帝國議會の代議士、勞働者階級の窮狀調査委員會の議長。ドイツ

の手工業者や勞働者の間に、階級鬪爭を抜きにして、職業組合および經濟協同組合により社會問題を解決するといふ思想を宣傳した。ラッサールは、勞働大衆をブルジョア・民主主義組織とそのイデオロギーに從屬させてをかうとするこの計畫に力強く反對した。

註四。進歩黨――。自由主義ブルジョアジーの一政黨。一八六一年、プロシャにおける憲法爭論が尖鋭化したとき、この政黨の政策に滿足してゐた、舊自由主義政黨所屬の多數の東プロシャ選出代議士と、舊四十八人組民主主義者の若干の者とによつて創立された。その綱領は、純ブルジョア的・自由主義的であつた。すなはち實をいへば、『ブルジョアジーと共に、プロレタリアートも注意を拂ふところの、普通選擧、出版および集會の自由、等々の如き民主主義的諸要求は、暗默の裡に忘れられたのである』(メーリング)。その勢力は貧弱であつたとはいへ、初期においてはビスマルクと當時の貴族的反動とに對し反對黨の立場を執つたために、進歩黨の周りには、ブルジョアジーの自由的分子のみならず、勞働者中の最も進歩せる層までが集まつてきた。ラッサールの煽動の影響を受けて、勞働者たちにとにかく極めて速かに進歩黨から脱し、そして自分たちの一政黨を創つた。獨佛戰爭後、進歩黨はます／＼ビスマルクの友黨となり、右へ右へと進んで行つた。一八八四年、進歩黨は自由主義同盟と合同してドイツ自由黨となつた。このドイツ自由黨は、一八九三年、國民自由黨と自由主義同盟とに分裂した。この兩政黨は、一九一〇年、南ドイツ國民黨と合同して國民進歩黨となり、一九一八年十一月の轉覆以來、その黨名を變更して、現在ではドイツ民主黨と名乘つてゐる。

註六、ドイツにおけるカトリック的またはキリスト敎的、および王黨的勞働者團體――。表向きは『無黨派』勞働者團體の變種ではあるが、實は一定の政治集團（中央黨その他）によつて指導されてゐる。キリスト敎的およびその他の諸原則の假面の下に一の平和經濟政策が行はれてゐる。
またヒルシュ・ドゥンカー式勞働組合（勞働者の注意をベーベルやリープクネヒトの社會主義的宣傳からそらせるために、一八六八年、自由主義者ヒルシュと彼れの同僚ドゥンカーによつて創設されたもの）は階級的立場を拒んで、同じくブルジョア政策を追求してゐる。
社會民主主義的諸團體は、社會民主主義的諸政黨の直接の助力と指導との下に形成された（たとへば、ドイツ、オーストリア、スヴェーデン、デンマルク、オランダ等において）種々の勞働組合組織であつて、以前には首尾一貫せる階級的立場を執り、資本主義の枠内における勞働者の利害の守護と並んだ、資本主義そのものを覆へすことにもその任務を認めてゐた。

しかし、一體なぜ、自然生長的運動、最少抵抗線に沿ふ運動が、ブルジョア・イデオロギーの支配に導びくのかと、讀者は問ふであらう。その理由は簡單である。ブルジョア・イデオロギーは、その由來するところ社會主義イデオロギーよりもはるかに舊いからであり、そのイデオロギーははるかに廣く行き亘つてゐるからであり、その流布手段を比較にならぬほど多く使用してゐるからである。さうして一國における社會主義運動が若ければ若いほど、非社會主義的イデオロギーを强め

んとするあらゆる試みに對する闘爭はそれだけ根氣よく行はれなければならず、また『意識的要素の過重評價』を罵倒する卑劣な忠告者に對し勞働者を斷乎として警告しなければならぬ……。

……如何なる階級の場合たるを問はず、　とのあらゆる事件に對し、勞働が直ちに立つてそれに應ずることに慣れてゐなければ、しかも、その他の如何なる立場からでもなく、まさに社會民主主義的立場から應じなければならぬといふことに訓練されてゐなければ、勞働者階級の意識は眞に政治的意識ではあり得ない。もし勞働者が、その他の社會諸階級の各々の知識的・道徳的、および政治的生活のあらゆる現象を觀察することを、具體的な且つまた當面緊急の政治的諸事實および諸事件について學んでゐなければ、もし彼等が、唯物論的分拆と唯物論的批判樣式とを、全體の階級、人民の各層および各集團の、全活動と全生活との上に實際に適用することを學んでゐなければ、勞働者大衆の意識は眞の階級意識ではあり得ない。勞働者階級の注意と着眼點と意識とを、ひとへに、あるひはまた主としてでも、勞働者階級そのものの上にのみ向ける人、さういふ人は決して社會民主主義者ではない。なぜなら、勞働者階級の自己認識は、近代社會の全階級の交互關係に關する充分明白なる理論のみならず――もつと正確に言へば、理論といふよりもむしろ政治生活の經驗によつて作り出された種々の觀念を得ることと不可分の關係にあるからである。それ故に、經濟鬪爭が大衆を政治運動へひき入れるための最も廣汎に適用され得る手段である

といふ我が經濟主義者たちの說敎こそ、甚だしく有害なものであり、その實踐的意義よりすればかくも反動的である。社會民主主義者となるためには、勞働者は、地主と坊主、顯官と農民、學生と浮浪民等の經濟的性質および社會政治的樣姿について、一の明白な觀念を持たなければならぬ。彼はこれらの人々の長所と短所とを知り、すべての階級、およびすべての層がその生來の利己心とその本當の『內心』とを紛飾さすところの、いろ〳〵な常套語やありとあらゆる詭辯を看破しなければならぬ。彼は、如何なる制度、如何なる法律がいづれの〔階級の〕利害を表現するか、また如何にして表現してゐるかを知らなければならぬ。かくの如き明白な觀念は、しかしながら、書物の上から作られるものではない。それは、一定の瞬間に吾々の周圍に起るもの、人々がお互に語り合ひ耳語き合ふところのもの、一定の事件、一定の數字、一定の判決等々となつて表現されるところのもの、これらの事柄の生き生きした描寫と卽時の暴露とによつてのみ與へられ得る。かういふ全面的な政治的暴露は、大衆を　的活動に敎育するための必然的な且つ基本的な一條件である……。

ロシヤの勞働者の經濟鬪爭の廣汎なる普及と强力化とが、經濟的（工場および職業に關する）暴露『文獻』の出版と相ひ携へて進んで行つたことは、世間周知の事實である。『ビラ』の主要內容は種々の工場における狀態を暴露することであつた。かくして勞働者の間には、暴露に對する眞の熱情がやがて燃えあがつてきた。社會民主主義的サークルが、勞働者の悲慘な生活や彼等の極度に苦

しい勞働や、法律上の保護なき狀態等に關する眞相を一杯に書き立てた新しい種類のビラを勞働者に與へやうと欲したし、實際また與へることができたのを勞働者が確信するやうになるや否や、いろ〳〵な通信が工場や職場からまるで雨の如く送られはじめた。かくの如き『暴露文獻』は、その狀態が當のビラのなかに罵倒されてゐる工場のみならず、一般に、暴露された事實について何かが知れてゐるあらゆる工場のなかに、異常の感動を喚起した。そして、樣々な工場や職業に從事する勞働者の貧困と窮乏とは、多くの共通なる特徵を示すものであるから、『勞働者の生活に關する眞相』はすべての勞働者を感動させたのである。最もおくれた勞働者の間にも『印刷にすつて貰ふための』眞の熱情——略奪と壓服との上に築かれた現代の全社會制度に對する鬪爭のこの種の萠芽形態のための高貴な熱情が起つた。さうしてこれらの『ビラ』は、大多數の場合、事實上の宣戰布告に均しかつた。すなはち、種々の暴露はすばらしく感動的な効果を及ぼし、勞働者の間に、最も惡むべき弊害の除去に對する一般的要求を叫ばしめ、これらの要求をストライキを以て勢ひづけんとする決意をさへ喚起した。工場主自身は、結局、これらのビラの意義を宣戰布告と認めなければならなくなつて、彼等は戰爭そのものをもはや安閑として待つてゐられなくなつた。暴露は常にさうである如く、それが發表されたといふ單なる事實だけで既にその効果をあげ、權威ある道德的壓迫手段たるの意義をかち得た。一枚のビラが發行されたばかりで、要求の全部または一部が容れられ

たことも稀れではなかつた。一言にして蔽へば、經濟的（工場の狀態を罵倒した）暴露は經濟鬪爭の重要な槓杆であつたし、今も尙ほ依然としてさうである。そして、勞働者をして必然的に自己防衞に訴へさせる資本主義が存在するかぎり、經濟的暴露は永久にかうした意義を持つであらう。最も進步したヨーロッパの諸國においても、今日尙ほどこかの場末の『工場』や家內勞働の極惡非道な何かの部門における弊害の暴露が、階級意識の覺醒のための、勞働組合的鬪爭の開始および社會主義の普及のための出發點となつてゐることが認められる。

ロシヤにおける大多數の社會民主主義者たちは、最近、工場の暴露戰を組織するといふ以上の仕事のために、ほとんど全く忙殺されてゐた。『ラボーチャヤ・ムイスリ』を思ひ起すだけでも、人々が如何に甚だしくこの仕事に忙殺されて、その際、このことそれ自體は本來まだ社會民主主義的活動ではなく、むしろ單に勞働組合主義的活動にすぎないことを忘れてゐたかがわかる。これらの暴露は、元々ただ、一定の職業の勞働者と彼等の雇主との關係を捉へただけで、その範圍も、勞働力の賣手がその『商品』を有利に賣りつけ、純然たる商取引に基づいて買手と爭ふことを學んだだけにとどまつてゐた。かくの如き暴露事業は（　　　の組織による或る程度の利用といふことを條件として）社會民主主義的活動の發端となり、その一構成要素となり得たらうが、しかしそれはまた『勞働組合一點張りの』鬪爭、非社會民主主義的勞働者運動を誘致することともなつたのである。

（さうして自然生長性を崇拜する場合にはさうならずするを得なかつた）。

社會民主黨は、勞働者階級が彼等の勞働力の販賣條件を有利ならしめるための鬪爭を指導するばかりでなく、無産者をして富者に　　　　のための鬪爭をも指導する。社會民主黨が勞働者階級を代表するのは、一定の企業家團のみとのその關係においてではなく、近代社會の全階級との關係、組織された政治力としての國家との關係においてである。從つて社會民主主義者は、單に經濟鬪爭にのみ終始するを得ないばかりでなく、彼等はまた、經濟的暴露戰の組織をその主要活動となすことを認むべきでもないことは、明らかなことである。吾々は勞働者階級の政治的教育、彼等の政治意識の發展に積極的に着手しなければならぬ……。

しからば政治的教育とは何を言ふか？　絶對主義に對する勞働者階級の憎惡の觀念を宣傳すればそれでいゝのか？　勿論、さうではない。勞働者の政治的壓迫を説明するだけでは足りない（勞働者に彼等の利害と雇主の利害との對立關係を説明するだけでは充分でない如く）。かかる壓迫のあらゆる具體的暴露を捉へて煽動することが必要である（今日吾々が經濟的壓迫の具體的發露を捉へて煽動しはじめた如く）。さうして、かくの如き壓迫の下では、種々樣々の社會階級が苦しめられなければならぬのだから、即ちかかる壓迫は、色々樣々な生活領域や活動領域に、勞働組合の領域にも一般國民の領域にも、個人的領域にも家族の領域にも、宗教の領域にも學問の領域にも、その他到

る處に發現するのだから、——もし吾々が絕對主義に對する全面的な政治的暴露の組織に着手しないければ、勞働者の政治意識を發展さすといふ我らの任務が果されないことは明かではないか？　壓迫の具體的發露を捉へて煽動を行ふためには、これらの發露の眞相を暴露することが必要ではないか？（經濟的煽動を行ふために、工場の不正を暴露しなければならなかつたやうに）。

これは全くわかり切つたことかのやうに見える。しかし、この點でこそ政治意識を全面的に發展さすことの必要は、單に言葉の上だけで『一般的に』認められてゐるにすぎないことが明かとなつたのだ。この點でこそ、例へば『ラボーチェエ・ディエロ』は全面的な政治的暴露を組織すべき、あるひはそれを開始すべき任務を提起しないばかりか、かへつてこの任務に着手した『イスクラ』を後ろへ引き戻さうとさへしてゐることが明かとなつたのだ。その言ふところを聞かう。

『勞働者階級の政治鬪爭は、單に（必ずしも單にではない）、經濟鬪爭の最も發達した、廣汎にして且つ有効なる形態にすぎない』（『ラボーチェエ・ディエロ』の綱領、同誌、第一號三頁）。

『今日社會民主主義者の當面せる任務は、經濟鬪爭そのものに出來るだけ政治的性質を附與することである』（マルチノフ、同誌、第十號四二頁）。

『經濟鬪爭は、大衆を積極的な政治鬪爭へ引き入れるための最も廣汎に適用され得る手段である』（聯盟大會の決議と『追加提案』、『二つの大會』第一一および一七頁）。[註六]

註六、『ロシヤ社會民主主義者聯盟』は一八九五年に創立され、間もなく經濟主義に傾きはじめた。一九〇〇年、スキズに開かれた聯盟大會のとき、革命的少數派は斷然同聯盟を脱退して、別にプレハーノフを先頭とする『ロシヤの革命的社會民主主義者の組織』を作つた。その多數派――そのなかには『ラボーチェエ・ヂィエロ』の編輯部も加はつてゐた――は舊來の名稱を維持してゐた。ロシヤにおけると同じく、國外においても、同聯盟の意義はおくれる一方で、ロシヤ社會民主勞働黨第二回黨大會のとき、同聯盟はつひに解散を聲明した。

讀者諸君の見らるる通り、かくの如きテーゼは、『ラボーチェエ・ディエロ』の發刊の瞬間から最近の『編輯訓示』に至るまで、すべて同誌を貫いてゐるもので、そのすべては、政治的煽動と政治的鬪爭とに關する同一の見解を明白に表現してゐる。さて吾々は、政治的煽動は經濟的煽動の後に來なければならぬといふ、すべての經濟主義者の間に專ら流行してゐる意見の立場から、この見解を吟味して見やう。經濟鬪爭なるものが、一般に、大衆を政治鬪爭に引き入れるための『最も廣汎に適用され得る手段』であるといふのは當つてゐるか？　それは全然當つてゐない。かういふ風に『引き入れる』ためのそれに劣らず『廣汎に適用され得る』手段は、およびのありとあらゆる發現がさうなのであつて、經濟鬪爭と關聯してゐる現象だけが必ずしもさうなのではない。農民に對する ゼムスキーエ・ナチャルニキと笞刑、官吏の收賄、都會の『平民』に對する(註七)

官憲の取扱ひ、餓えたる者のための鬪爭、光明と知識とを求めんとする人民のあらゆる運動に對する壓迫、學生および自由主義的知識階級に對する門徒衆に對する迫害、(註八) ××——『經濟』鬪爭と直接關係のないかくの如き壓迫の發露、およびこれに似たその他の凡百の事實が、なぜ政治的煽動のための、大衆を政治鬪爭に引き入れるための、それほど『廣汎に適用され得る』手段と動因とではないのであらうか？ 全くその反對である。勞働者が無法律の狀態と專斷と横暴（勞働者自身に對する、あるひは彼等に近い人々に對する）との下に苦まなければならぬ、あらゆる生活事實の總體のうち、官憲の壓迫といふ事實の如きは、疑ひもなく、勞働組合の鬪爭にあつてはほんの一少部分をなすものにすぎないのだ。社會民主主義者にとつては、その他にも、一般的に論ずれば、同じく『廣汎に適用され得る』多くの手段がある筈なのに、ただ一つの手段だけを『最も廣汎に適用され得る』ものと宣言して、政治的煽動の昂揚をあらかじめ狹めるとは、一體どういふわけか？

註七、——ゼームスキエ・ナシルニキ——農村における官憲横暴の代表者、勞働者および農民に向けられたツール政府の暴壓政策の目標として通つてゐた。

註八、——門徒衆——キリスト敎の門徒衆のことで、彼等は正敎派の國立敎會に背き、且つ絶對主義に對し反對の態度をとつてゐたために、ツール政府から迫害されたのである。

……『聯盟』は、ユダヤ人勞働者同盟（ブンド）第四回大會の決議のなかにある『最善の手段』といふ文句に代ふるに、『最も廣汎に適用され得る手段』といふ文句を以てした事項に重きを置いてゐる。兩つの決議のうちいづれが優れてゐるかを斷言することは事實において困難である。私の考へでは、どちらも拙いと思ふ。聯盟もブンドも、ここでは等しく（傳統の影響を受けて、一部はおそらく無意識的にさへ）政治の經濟主義的・勞働組合主義的解釋に陷つてゐる。それが『最善』といふ文句を用ひて實現されるにしろ、あるひは『最も廣汎に適用され得る』といふ文句を用ひて實現されるにしろ、根本においては何の變りもない。もし聯盟が、『經濟的地盤の上に立つ政治的煽動』は最も廣汎に適用された（『適用され得る』ではない）手段であると言つたのなら、その主張は我が國の社會民主主義運動の一定の發達時期については正しかつたらう。取りわけその主張は、經濟主義者たち、卽ち一八九八年から一九〇一年までの多くの實際家たち（彼等のうちの大多數ではなくとも）については正しかつたらう。といふのは、これらの經濟主義的實際家たちは、事實上、政治的煽動を殆んど專ら經濟的地盤の上にのみ適用してきた（彼等が一般にそれを適用したかぎり！）からである。吾々の旣に見た如く、『ラボチャヤ・ムイスリ』も『自己解放團』もかくの如き政治的煽動を承認し、且つ推賞しさへしたのである！『ラボーチェエ・ディエロ』は、有益なるべき經濟的煽動が政治鬪爭の有害なる制限を伴つたといふことを斷乎として宣告すべきであつたの

だ。しかるに、さうする代りに、(經濟主義者たちによつて』)最も廣汎に適用された手段を最も廣く適用され得る手段であると宣言してゐる。……

……『經濟鬪爭そのものに政治的性質を附與する』といふ社會民主黨に課せられた任務は、マルチノフに言はすれば、そもそも如何なる具體的現實的意味を有するのであるか? 經濟鬪爭といへば、勞働力を販賣する際に有利な條件を得るための、勞働者の勞働條件を改善するための、雇主に對する勞働者の集合的鬪爭である。この鬪爭は必然的に一の職業組合的鬪爭である。なぜなら、種々なる職業における勞働條件は極めて種々雜多であり、從つてまた、これらの諸條件を改善するための鬪爭も、ただ職業に應じてのみ行はれ得る(西歐においては勞働組合を通じて、ロシャにおいては臨時の職業同盟やビラを通じて)にすぎないからである。從つて、『經濟鬪爭そのものに政治的性質』を附與するといふのは、『立法および行政の方策』を介して、勞働條件に對する自分だけの職業的要求、自分だけの職業的改善を實施せんとすることである。(丁度マルチノフが彼の論文の四三頁に言つてゐる如く)。これこそすべての職業的勞働者團體が現に行つてゐるところであり、また常に行つてきたところである。學識深遠なる(また日和見主義的にも「深遠なる」)ウェッブ夫妻の著書に一瞥を投げて見よ。すると吾々は、イギリスの勞働者團體が、『經濟鬪爭そのものに政治的性質を附與する』といふ任務を既に久しい以前から認めてきて、それを實現してゐること、イギリスの

勞働者團體は、既に久しい以前から、ストライキの自由のために、協同組合および勞働組合運動に對するありとあらゆる法律上の障害の撤廢のために、婦人および兒童保護法のために、衞生および工場立法による勞働條件の改善のために、その他等々のために鬪つてゐることを見るであらう。

かくの如く、『怖ろしく』聰明で革命的に聞えるところの、『經濟鬪爭そのものに政治的性質を附與する』といふ仰山な文句の蔭には、元々、社會民主主義的政治を勞働組合主義的政治にひきさげんとする因習的傾向がひそんでゐるにすぎない！　人々は『生活の革命化よりも獨斷の革命化を』提唱する『イスクラ』の一面性を矯正すると稱して、經濟的改革のための鬪爭を何か事新しいこととして吾々に持ち出してゐる。實際『經濟鬪爭そのものに政治的性質を附與する』といふ文句のなかには、經濟的改革のための鬪爭を除いては、丸つきり何もないのである。そしてマルチノフ自身も、もし彼が自分の言葉の意味をとくと考へたなら、この單純な結論にきたことであらう。

マルチノフは、『我が黨は、立法上および行政上の方策に從ひ、經濟的搾取・失業・饑餓、その他に對する種々の具體的要求を政府に向つて提出し得たし、またさうすべきであつた』（『ラボーチェエ・ディ』『第十卷エロ四三頁）と言つて、彼の重砲を『イスクラ』に差し向ける。

種々の方策に從ひ具體的要求を——それは社會改良の要求ではないか！　そこで吾々は重ねて公平なる讀者に次の質問を發する。ラボーチェエ・ディエロ主義者（この舌なめりの惡い流行語を使ふ

ことを許されたい）は、經濟的改革の必要に關するテーゼを、彼等と『イスクラ』との相違點としてあげてゐるので、吾々が彼等を覆面せるベルンシュタイン主義者と呼ぶのは、彼等を誹謗するものであるかどうか？

××的社會民主黨は、常に、改良のための鬪爭を彼等の活動のなかに加へてきた。しかし、彼等が『經濟的』煽動を利用するのは、政府にあらゆる施設を要求するためばかりでなく、さらにまた（そして何よりも先づ）この　　　でなくなることを要求するためである。それに××的社會民主黨は、經濟鬪爭の地盤においてのみならず、社會政治生活一般の一切の現象の地盤においても、この要求を政府に向つて掲げることを自己の義務であると思惟してゐる。一言に蔽へば、××的社會民主黨は、改良のための鬪爭を、全體の一部として、自由と社會主義とのための革命的鬪爭に從位せしめるのである。しかるにマルチノフは段階理論（註十）を別な形で復活させ、政治鬪爭をして無條件に云はば經濟的進化道程を進ませやうとしてゐる。彼は、××的躍進の瞬間に、改良のための鬪爭といふ有名無實な特殊の『任務』を提唱して、それによつて黨を退却させ『經濟主義的』日和見主義と自由主義的日和見主義とに等しく手をかしてゐる。

註十、段階理論――。經濟主義者の理論であつて、それに從へばプロレタリアートの鬪爭は種々の繼續的な段階を通過しなければならぬといふのである。まづ第一には純然たる經濟鬪爭、次ぎにプロレタリアート

が經濟鬪爭の地盤で充分な經驗を集めたならば、政治的煽動へ進んでもよろしい、等々。

それのみではない。マルチノフは、『經濟鬪爭そのものに政治的性質を附與する』といふ大げさな論旨の蔭に、改良のための鬪爭を羞しげにひそませて、經濟的（しかも工場にのみ鬪する）改良のみを何か特別な事として掲げたのである。なぜ彼がそんなことをしたのか吾々には解らない。おそらく過つてか？　しかし、もし彼が『工場』の改良のみを眼中に置いたのでなかつたとしたら、以上にあげた彼の論旨の全部には何んの意味もなくなるであらう。おそらく、彼は經濟的領域における政府側からの『讓歩』のみが可能であると思つてゐるからなのか？　しかりとすれば、これこそ驚くべき誤謬である。笞刑、旅劵制度、償却、宗門、檢閲、その他等々に關する立法の領域においても、讓歩は可能であり、且つまた明記されてもゐる。『經濟的』讓歩（あるひは欺瞞的讓歩）は政府にとつては勿論最も承認し易く、且つ都合のいゝことである。なぜなら、政府はそれに依つて勞働者大衆の信賴を得んと期待するからである。そして、それ故にこそ、吾々社會民主主義者たるものは、經濟的改良が吾々に重んずべきことであるかのやうな、吾々がそれを特別に重要視してゐるかのやうな意見（または誤解）を、斷じて、また如何なる手段によつても發生させてはならぬ。

マルチノフは、彼がさきに提唱したところの、立法上および行政上の方策に對する具體的要求について論じて曰く、『かくの如き要求は決して空虛な叫び聲ではない。なぜなら、それは一定の具體

的な成果を約束するが故に、勞働者大衆によつて積極的に支持され得るであらうから……』と。

吾々は經濟主義者ではない。斷じて然らず！　吾々は、ただ、絕對主義に對する抗議が勞働者大衆に對し絕對に具體的な效果を約束しないにしても、彼等はその抗議をすべて積極的に支持し得ることはなからう（あらゆる人々が自分自身の俗物根性を彼等になすりつけやうとして見ても、彼等はつひぞその能力を示さなかつたらう）と言ふだけである。

『雇主および政府に對する勞働者の經濟鬪爭（政府に對する經濟鬪爭!!　レーニン）は、その直接の革命的意義以外に、なほ勞働者をして不斷に彼等の政治的無權利の問題に當面させるといふ意義を有してゐる』（マルチノフ、四四頁）。

吾々がこの引用句を拔き書きしたのは、既に以上に述べたことをまんべんなく繰り返すためではなく、『雇主および政府に對する勞働者の經濟鬪爭』といふこの斬新なすばらしい定式に對し、吾人の特別な感謝をマルチノフに表したいためである。なんとすばらしいことよ！　如何にも比類なき才能を以て、經濟主義者たちの間のあらゆる分派的意見の相違や各派の色合の差別を如何にも名工らしく取り去ることによつて、この簡短明瞭な文句のなかに、勞働者が共通の利害において『一切の勞働者の狀態を改善するために行ふところの政治鬪爭へ』勞働者を勸誘することからはじまつて、段階理論を越へ、最後に『最も廣汎なる適用性』等々に關する黨大會の決議に至るまでの、經

濟主義の全本質が說明されてゐる。『政府に對する經濟鬪爭』といへば、言ふまでもなく、勞働組合主義的政治のことであつて、この種の政治から社會民主主義的政治に至るまでにはまだ〳〵非常な隔りがある。

# 民主主義のための先頭隊としての勞働者階級

（一九〇二年、『何を爲すべきか？』より）

吾々は最も廣汎なる政治的煽動、從つてまた全面的な政治的曝露の組織が、無條件に、――この活動が眞に社會民主主義的であるとして――最も必要且つ緊急なる活動任務の一つであることを見た。しかしながら吾々は、專ら勞働者階級の政治的知識および政治的教育に對する最も緊急なる必要から出發して、以上の結論をひき出したのである。ところで、この種の見方はあまりにも狹隘すぎはすまいか。それは一般的にはあらゆる社會民主黨の、特殊的には今日のロシヤの社會民主黨の一般的な民主主義的諸任務を度外視するものではあるまいか。以上の原則を出來るだけ具體的に明白ならしめるために、吾々は、經濟主義者たちに『最も親しい』一面、すなはち實際的方面からこの問題を捉へることとしよう。勞働者階級の政治的意識を發展さす必要のあることは、『誰れでも等しく認めるに相違ない』。これを如何にして行ふべきか、これを達成するためには何が必要であるか？　經濟鬪爭は、勞働者を、ただ政府と勞働者階級との關係に關する諸問題にのみ『突きやる』にすぎない。しかるかぎり、吾々もまた『經濟鬪爭に政治的性質を附與する』といふ任務に努力してきた。さうしなければ、吾々が、この任務の範圍內において、勞働者の政治的意識を（社會民主

主義的政治意識の段階にまで）發展さすことは斷じて實現されないであらう。なぜなら、この任務の範圍そのものがあまりに狹隘だからである。マルチノフ流の公式[註一]が吾々から見て價値があるのはそれが問題を混亂さすマルチノフの才能の實例を示してゐるからではなく、すべての經濟主義者の根本誤謬をはつきりと表現してゐるからである。すなはち、勞働者の政治的階級意識は、內部から、云はば經濟鬪爭から、言ひ換へれば、專ら（または主として）經濟鬪爭から出發して、專ら（または主として）經濟鬪爭に立脚してのみ發展させ得るといふ確信をはつきりと表現してゐるからである。かくの如き見解は根本から間違つてゐる。――さうして經濟主義者たちは、彼等と論戰を交じへたといふので吾々に立腹して、意見の相違の根源を充分にただそうとも欲しないが故にこそ、吾々がお互同士言葉を誤解してゐるやうな狀態、別々な言葉を話してゐるやうな狀態が現に生じてゐるのである。

註一、マルチノフ。――ロシヤの知名な社會民主主義者。『勞働問題』の編輯人の一人。ロシヤ社會民主黨內の經濟主義的傾向を奉じた人。彼は第二回黨大會の時メニシェヴィキに加入した。一九〇五年以後は淸算主義者となつた。即ちロシヤ社會民主黨の極右翼を奉じ、同時に、非合法的な黨の組織は淸算されなければならぬといふ立場を代表した。帝國主義的戰爭はマルチノフをして『インターナショナル主義者』の陣營にこさせた。ロシヤ共產黨第十三回黨大會の決議に基づき、彼れは共產黨への加入を許された。

政治的階級意識は勞働者にはただ外部からのみ、すなはち經濟鬪爭の外部、勞働者と雇主との關係の領域の外部においてのみ注入され得る。政治的知識がそこからのみ作られ得る領域は、一切の階級および社會層と　　　の領域、階級全體の間の交互關係の領域である。それ故に、勞働者に政治的知識を注入するためには何を爲すべきか？　といふ問題に對しては、必ずしも、多くの場合、實際家たち——經濟主義の方へ傾いてゐる實際家たちは言はずもがな——が滿足してゐる回答、すなはち『勞働者のなかへ行く』といふ回答を與へるわけにはゆかぬ。勞働者に政治的知識を注入するためには、社會民主主義者は人民のあらゆる階級のなかへ行き、あらゆる方面へ向つて自分の部隊を派遣しなければならぬ。

吾々が、殊さらかくも寸鐵的な表現を擇び、吾人の意見をわざと簡單卒直に述べるのは、決して奇矯の語を弄ばんとする希望からではなく、經濟主義者たちをして、彼等が赦しがたきほど蔑ろにしてゐる諸任務、彼等が理解しようとしない勞働組合主義的政治と社會民主主義的政治との相違へ適當に『突きや』らんがためである。讀者諸君は氣を落ちつけて、吾々の言ふところを最後まで聞いて欲しい。

まづ最近數年間に最も多く普及した社會民主主義者のサークルを例に取り、その活動を吟味して見やう。その集團は『勞働者と連絡』を取り、工場內の弊害や、資本家に對する政府側の愛護や、

官憲の暴狀等を罵つたビラを發行することを以て滿足してゐる。勞働者との集會では、その談話は決して又は殆んど以上の如き話題の範圍を出でず、××運動の歴史や、我が政府の內外政策の種々の問題や、ロシヤおよびヨーロッパの經濟的發達の諸問題や、あれやこれやの諸階級の現下の狀態等に關する講演や討論は滅多に行はれず、誰れもその他の社會階級との組織立つた結び付きや連絡の擴大などを考へてゐるものはない。かくの如きサークルの會員たちの念頭には、多くの場合、社會主義者及び政治的指導者の理想として、むしろ勞働組合の書記が浮んでゐるのである。なぜなら、どこかの勞働組合、たとへばイギリスの勞働組合の書記は、常に、勞働者たちが經濟鬪爭を行ふのを手傳ひ、工場の狀態を曝露し、ストライキの自由や爭議立番の配置の自由を妨げる法律や規則の不正を說き、ブルジョア階級出の仲裁裁判官の依估贔負等々を說明してゐるからである。要するに、どの勞働組合の書記も『雇主および政府に對する經濟鬪爭』を行ひ、且つそれを行ふことを援助してゐる。しかし、これはまだ社會民主主義ではないこと、社會民主主義者の理想は勞働組合の書記があつてはならず、むしろ專斷と壓迫とのあらゆる發露に對し、それがどこに起らうと、如何なる階級または社會層に關するものたるを問はず、直ちに立つてそれに應ずることを解し、これらのすべての發露を官憲の橫暴と資本家の搾取との全樣相に統一することを解し、如何なる瑣末な事件をも利用して、全世界の面前に自分の社會主義的確信と民主主義的要求とを說き、何人に向つて

もプロレタリアートの解放鬪爭の世界史的意義を明白ならしめることを解する護民官でなければならぬことは、いくら强調してもいゝことである。例へば、ロバート・ナイト（イギリスの最も勢力ある勞働組合の有名な書記にして指導者）とウィルヘルム・リープクネヒトの如き人物を比較し、この兩人の上に、マルチノフが『イスクラ』と自分との相違點をあげてゐる比較を當てはめて見よ。さうすると——私はマルチノフの論文の頁をめくつて見て——ロバート・ナイトはより多く『大衆に周知の具體的行動を呼びかけ』てゐるが、ウィルヘルム・リープクネヒトはより多く『今日の全制度またはその部分的發露に對する革命的曝露に』沒頭してゐること、ロバート・ナイトは『プロレタリアートの手近な要求を說き、その要求を實現するための手段を指し示し』てゐるが、ウィルヘルム・リープクネヒトはこのことをも行ひ、且つ『それと同時に種々樣々な反對層の積極的活動を指導して、彼等に積極的な行動綱領を口授する*』ことをも辭せないこと、ロバート・ナイトは取りわけ『經濟鬪爭そのものに出來るだけ政治的性質を附與する』ことに努め、且つ『手近な何かの効果を約束する具體的要求を政府に向つて提出する』ことを立派に理解してゐるが、ウィルヘルム・リープクネヒトはより多く『一面的な曝露』に沒頭してゐること、ロバート・ナイトは『平凡な日常鬪爭の經過』をより多く重要視するが、ウィルヘルム・リープクネヒトは『輝かしい觀念の宣傳』をより多く重要視してゐること、ウィルヘルム・リープクネヒトは彼の指導せる新聞を、『我が國の

* たとへば．獨佛戰爭の時，リープクネヒトは民主黨全體に行動綱領を口授した。——マルクスとエンゲルスとは1848年にこの點について尙ほ多くのことを實行した。

制度、なかんづく政治上の法律が種々雜多な人民層の利害と矛盾するかぎり、それらのものを曝露するところの、革命的反對黨の機關紙』たらしめたが、ロバート・ナイトは『プロレタリアの闘爭と緊密な組織上の同盟を保つて勞働者のために活動し』(『緊密な組織上の同盟』とは、クリチェフスキーやマルチノフの場合に見られる如く、自然生長性に對する禮讃の意味に解されてゐる)、さうして『その闘爭の影響範圍を狹めた』こと——もつとも彼は、マルチノフと同じく、『かくすることによつてその影響を高めた』と確信してゐたのではあるが、——かういふことを吾々は見るであらう。これを要するに、吾々は、マルチノフが社會主義を事實上勞働組合主義に墮落させてゐるのを見るであらう。もつともマルチノフがさうしてゐるのは、彼が社會民主主義に禍ひあれと願つたからではなく、單に彼がプレハーノフを理解しようと苦心する代りに、プレハーノフを深めやうと少々あせりすぎたからではあるが。

だが、吾々は吾人の主張に立ち歸らう。社會民主主義者にしてプロレタリアートの政治意識を全面的に展開さすことを單に口先きばかりで公言する人でなければ、彼は『人民のあらゆる階級のなかへ』行かなければならぬと、吾々は言つた。そこで次の如き問題が起る。これを如何にして果すべきか? 吾々はさうするための力を具へてゐるか? かかる事業のための地盤はその他のすべての階級に存在してゐるか? これは階級的立場からの徧流を意味しないだらうか、あるひはさうい

ふ偏流を招かないだらうか？　これらの問題を仔細に吟味してをかう。

吾々は、「理論家として、宣傳家として、煽動家として、組織者として、『人民のあらゆる階級のなかへ』行かなければならぬ。社會民主主義者の理論的活動は、個々の階級の社會的および政治的狀勢の一切の特殊性の研究の上に向けられなければならぬこと――これを疑ふものはゐない。だが、この方面のことは、工場生活の特殊性に關する研究に費やされる活動に比較すれば、甚だしく貧弱で、比較にならぬほど僅かしか研究されてゐない。委員會や研究團體のなかには、たとへば何かの製鐵部門の專門研究にさへ沒頭してゐる人々を見受けることができるが、――しかし種々の組織の成員たち（彼等は一定の理由から餘儀なく實踐的活動を中止せざるを得ない場合がしばしばある）が、我が國の公けの政治生活に關する何かの日常問題について、たとへばその他の人民層のなかに社會民主主義的活動をひき起し得るやうな問題について、資料の蒐集に從事してゐる場合を吾々は殆んど知らないのである。もし勞働者運動の今日の大多數の指導者の準備が不行屆きだと言ふなら吾々はまたこの意味の準備をも問題としなければならぬ。なぜなら、これも同じく『プロレタリアの鬪爭との緊密なる組織上の連絡』に關する『經濟的』解釋と關係があることだから。しかし、要點はもちろん――人民のあらゆる層のなかへの宣傳と煽動とである。西歐の社會民主主義者たちには、この任務は、誰れでも行くことのできる國民大會や集會のために比較的容易であり、彼等があ

らゆる階級の代議士の前で演說する議會のために比較的容易となつてゐる。我が國には議會もなければ、集會の自由もない。だが、吾々はそれにも拘らず、社會民主主義者の說を聞かうとする勞働者たちとの集會を催すことができる。吾々はまた、民主主義者の說しか聞かうとしない人民のあらゆる階級の代表者たちとの集會を開くことをも解しなければならぬ。なぜなら、『××主義者たるものはあらゆる×××運動を支持すべき』ことを事實において忘却する人、從つてまた、吾人の社會主義的確信を一瞬間たりとも隱蔽することなく、全民衆の面前に一般的＝民主主義的諸任務を說明し指摘することは、吾々の義務であることを忘却する人、さういふ人は怏して社會民主主義者ではないからである。他のすべての人々に率先して、あらゆる一般的な民主主義的諸問題を提出し、闡明し、解快すべき自己の義務を事實において忘却する人、さういふ人は怏して社會民主主義者ではない。

『そんなことには誰れでも皆同意見である！』と、性急な讀者は吾々の言をさへぎるかも知れぬ最近の大會で採用された『ラボーチェエ・ディエロ』紙編輯部の新指令は率直に聲明して曰く、『公けの政治生活の一切の現象並びに事件は、それが直接に特別な階級としてのプロレタリートに關するものにしろ、あるひは自由獲得のための鬪爭における一切の××的勢力の前衛としてのプロレタリアートに關するものにしろ、すべて政治的宣傳と煽動との動機として用ひられなければならぬ』

（『二つの大會』一七頁、傍點は著者のもの）と。然り、これは極めて正當にして立派な言葉である。『ラボーチェエ・ディエロ』紙がこの言葉の意味を理解して、この言葉の外にそれと矛盾する他の事柄を言はなかつたら、吾々もまたたしかに滿足したであらう。『前衞』と稱するのみではいまだ必ずしも充分でない。吾々が先頭に進んでゐることを、その他の一切の部隊が目擊し、且つそれを承認せざるを得ないやうに行動しなければならぬ。そこで吾々は讀者に問はふ。一體その他の『部隊』の代表者たちは、言葉の上だけで吾々が『前衞』たることを信ずるほどの愚物であらうか？ いまこの繪面を具體的に描いて見やう。一人の社會民主主義者がロシヤの教養ある急進主義者か、または自由主義的立憲主義者の『部隊』へやつて來て、『吾々は前衞である、目下吾々は經濟鬪爭そのものに政治的性質を附與するといふ斯々の任務に當面してゐる』と聲明するとする。多少とも總明な急進主義者かまたは立憲主義者であれば（そしてロシヤの急進主義者や立憲主義者のなかには總明な人材が多い）、かかる言說を一笑に附して、次の如く言ふだらう（勿論、彼は多くの場合老練な外交家なので、內心密かにかうつぶやくだらう）。『なんとおめでたい「前衞」なんだ！ 彼等は、勞働者の同一なる經濟鬪爭に政治的性質を附與することは、言ふまでもなく吾人の任務――ブルジョア民主主義の進步せる代表者の任務――であることをすら理解してゐないのだ。吾々もまた、西歐のすべてのブルジョアジーと同じく、勞働者を政治にひき入れやうとしてゐる。しかし、勞働組合主義

的政治にだけであつて、社會民主主義的政治にではない。勞働者階級の勞働組合主義的政治は、本質的には、勞働者階級のブルジョア的政治である。この任務を『前衛』が提唱したところで、それはやはり勞働組合主義的政治の提唱なんだ！　だから諸君が勝手に社會民主主義者だなどと自稱するのもよからう。たしかに、俺は名前のために激昂するほどの子供ぢやない！　ただ諸君はこの有害な正統派的獨斷論者の影響に陷つてはならぬ。諸君は、社會民主主義者を無意識的に勞働組合主義的進路に押しやる人々に、『批判の自由』を委せておけ！』と。

　しかしながら、前衛としての社會民主黨などとだわけてゐる社會民主主義者が、「我らの運動に自然生長性が殆んど絕對的にはびこつてゐる今の時期において、『自然生長性の要素の過少評價』を最も恐れ、『輝かしい完成された思想の宣傳に比較して、平凡な日常鬪爭の意義を輕視する』等々と、その他色々なことを不安がつてゐるのを、我が立憲主義者が聞いたとき、彼の微苦笑は呵々大笑と變るであらう！　かくの如き前衛は、目的意識が自然生長性を追ひ越すかも知らぬと慄えあがり、意見を異にする人々にも承認を强ゆるやうな『大膽な計畫』を立てることを恐れ憚かつてゐる。これは結局前衛といふ言葉と後衛といふ言葉とを混同するものではないか？

　實際、マルチノフの次の考察を仔細に點檢して見るがいゝ。彼は、第四二頁において、『イスクラ』の曝露戰術は一面的であると言ひ、吾々が政府に對するひがみを憎惡とを如何に多く蒔かうと

しても、吾々が『政府を轉覆するに足る積極的な社會的實行力を展開する』ことに成功しないかぎり、吾々は目的を達することはできぬであらうと言つてゐる。括弧内の文句は、獨自の活動を卑下しようとする熱望と並んで、吾々には既によく知れ亘つてゐるところの、大衆の活動の躍進に對する不安を述べたものである。しかし、今はそれが問題なのではない。マルチノフはここに（『……を轉覆するための』）　　實行力と言つてゐる。さうして彼は如何なる結論に到達するか？　普通の時には、種々樣々な社會層は離れ〴〵に進むのだから、『この點を顧みれば、吾々社會民主主義者は反對の立場にある種々なる層の積極的活動を同時に指導することも、彼等に一の積極的な行動綱領を口授することも、彼等に如何なる手段を以て日々自己の利害のために闘ふべきかを示すことも不可能であることは明かである。……自由主義的な諸層は、既にみづから、彼等の手近な利害のために、彼等が　　　　　するところの、かの積極的鬪爭に心をくばつてゐる』（四一頁）。かくの如く、マルチノフは絶對主義を轉覆するための革命的實行力、積極的鬪爭を云爲することから論を起して、いつの間にか勞働組合の實行力、手近な利害のための積極的鬪爭に立ち歸つてゐる！吾々が、學生や自由主義者等々の鬪爭を『彼等の手近な利害』のために指導し得ないことは言ふまでもないことだが、しかしそんなことが問題ではなかつた筈だ、經濟主義の先生！

　　　への種々なる社會層の可能且つ必要なる參加を言つたのであつた。さうして吾々は『反

對の立場にある種々の層の』かういふ『積極的活動』を指導することができる、然り、吾々が『前衞』たらんと欲するならば、無條件にそれを指導しなければならぬ。我が學生たちや、我が自由主義者たちが、我が『　　　　　　　する』ことに對しては、單に彼等みづからばかりでなく、先づ第一に、絕對主義的政府そのものの警察や官吏がそのために策を講ずるであらう。しかし、もし吾々が進步せる民主主義者たらんと欲するならば、『吾々』は、元來その大學やそのゼムストヴォ（地方自治體議會）其他の狀態に不滿を懷いてゐる人々に、政治制度の全體が無用であるといふ思想を懷かしめるやうにしなければならぬ。吾々はかかる全面的政治闘爭を我が黨の指導の下に組織すべき任務を引き受け、かくして反對の立場にある現在の一切の層がこの闘爭と我が黨とを出來るだけ援助し得るやうに、實際また援助するやうに努力しなければならぬ。吾々は、社會民主黨の實際家から、この全般的闘爭の一切の發露を指導し得る如き、且つ必要なる瞬間には、反抗せる學生に對しても、不滿を有するゼムストヴォの人々に對しても　　　　　　　　　　々に對しても、『積極的な行動綱領を口授し』得る如き政治的指導者を作り上げなければならぬ。それ故に、『これらの人々に對しては、吾々はただ告發人の消極的役割しか行ひ得ない……吾々はただ彼等の希望を種々なる政府委員會に分散させ得るにすぎない』（傍點は著者のもの）といふマルチノフの主張は完全に誤謬である。マルチノフは、右の言葉を以て、彼が革命的『前衞』のほ

んとうの役割を露ほども知つてゐないことを示してゐる。讀者諸君がこの點を注意されれば、マルチノフの次の結語の眞の意味も明かとならう。『「イスクラ」は、我が國の状態、なかんづく政治状態が人民の種々雜多な層の利害と矛盾するかぎり、それらのものをの機關紙である。しかし、吾々はプロレタリアの鬪爭と緊密なる組織上の連絡を保つて、勞働者の事業のために活動しつゝあり、また活動するであらう。我らの活動分野を制限することによつて、吾々は我らの活動を複雜ならしめるだけである』と。この結論の眞の意味は、『イスクラ』は勞働者階級の勞働組合主義的政治(我が國の實際家は、誤解からか、不用意からか、または確信からかくもしばしばこの種の政治にのみ局限されてゐる)を社會民主主義的政治にまで高めやうとしてゐるといふのである。しかし、『ラボーチェエ・ディエロ』は社會民主主義的政治を勞働組合主義的政治にまでひき下げやうとしてゐる。しかもこの際、この兩者が『共通の事業において完全に一致し得る立場』であると嚴かに誓はれてゐる。なんといふ單純さだ!

先きへ進まふ。吾々は人民のあらゆる階級のなかへを有するか?

勿論然り。往々我が經濟主義者たちはこれを否認せんとするのあまり、我らの運動が(ほぼ)一八九四年から一九〇一年以來なしとげた、かの巨大な前進を看過する。彼等は、眞の『追隨主義者』(註二)"Chwastisten"として、運動の初めから、疾うの昔しにすぎ去つた時代の觀念にのみ低迷してゐ

る。その當時は、事實吾々にはみすぼらしい勢力しかなかつた。その當時は、勞働者の間の活動に全然身を投じて、それからのあらゆる偏流を鋭く非難する果斷さは當然にして且つ正當なことであつた。その當時の全任務は、勞働者階級のなかに鞏固な地位を占めることであつた。今日では强大な量をなす種々の勢力が運動にひき入れられ、教養ある階級の青年人士の最良の代表者たちはすべて吾々の方へ來り投じ、各地方の到る處に旣に運動に參加した、または參加せんとしてゐる人々が、社會民主主義に傾いてゐる人々が居るのである（一八九四年には、ロシャの社會民主主義者は指で數へるほどしか居なかつたのに）。我らの運動における政治上および組織上の根本的缺陷の一つは、吾々がこれらすべての　　　　そのすべてに　　　　を理解してゐないことである。これらの勢力の大多數は絕對に『勞働者階級のなかへ行く』べき可能性を有せず、從つてその勢力を我らの根本任務から他の方へ轉ずるといふ危險は問題たり得ないのである。勞働者に眞實の、全面的な、生き生きした政治知識を傳へるためには、吾々は、到る所に、あらゆる場所に、あらゆる社會層のなかに、　我が國の　　　　まれるあらゆる地位に、『我らの味方』を、社會民主々義者を必要とする。かくの如き人々は宣傳や煽動においてのみならず、それよりもはるかに多く組織の方面において必要なのである。

註二、『クヴースチィスト』（跛つこをひきながら人の後を追ふ人、または尾つぽを追ひ廻す戰術家）——

プロレタリアートの政黨組織は、プロレタリアートの運動、勞働者運動の自然發生的な發達過程の諸段階の後を追ふ(『尾つぽを追ふ』)べきであるといふ意見を代表した、日和見主義的社會民主主義者(『机上戰術家』)の綽名。その結果は、『クヴォースチィスト』はいつも頼りなく事件の後を追ひ廻してばかりゐて、一の極端から他の極端に陷いり、あらゆる場合に、革命的プロレタリアートの活動とその力に對する信念とを皮相化することとなつたが、その際、彼れ等はいつもプロレタリアート獨自の活動を云爲することによつて、これらすべてのことを蔽はふとしてゐた。

人民のあらゆる階級のなかで活動するための地盤は存在してゐるか？　この地盤を見ない人は、その目的意識が大衆の自然發生的昂揚よりもおくれてゐる人である。勞働者運動は相變らず或る者には不滿を抱かせ、或る者には反對の立場を支持せんとする希望を起させ、さらに第三の者には絶對主義の不可能なることとその不可避的倒壞との意識を呼び起してゐる。もし吾々が、勞役農民や小營業者や小手工業者等々の數百萬人口の大衆が、多少とも老練な社會民主々義者の主張にいつも喜んで耳をかすといふことは全然別として、　　　　を利用すべき任務、些々たる萌芽的な　　　　の種子を集合して、それを發展さすべき任務を意識してゐないから、吾々は單に言葉の上だけの『政治家や社會民主々義者』(甚だ多くの場合それが事實であるやうに)たるにすぎないであらう。公權蹂躪や横暴に不平を抱き、從つてまた一般に民主々義的な最緊急なる

諸要求の辯護者としての社會民主々義者の宣傳を受け容れる人々や集團や倶樂部のゐない階級を、人民のなかに唯の一つでもあげることができやうか？　しからば、　階級および層のなかへの社會民主々義者のかういふ　を具體的に理解せんと欲する者は、かかる煽動の最も主要なる手段（しかしもちろん唯一の手段ではない）としての廣い意味における政治的曝露を目差さなければならぬ。

私は論文『何から始むべきか』（一九〇一年五月『イースクラ』第四號）のなかで次の如く論じてをいた。『吾々は、幾分でも自覺せる　のなかへ、政治的曝露に對する熱情を喚起しなければならぬ。吾々は、政治的不滿の聲が目下極めて微弱に、稀薄に、且つ臆病に唱へられてゐるといふことによつて迷はされてはならぬ。その原因は決して　との一般的馴れ合ひに求むべきではない。その原因は、曝露せんとする、または曝露し得る人々に、自分の主張を述べ得る演壇がなく、演士の言ふところを熱心に聞いて、演士を力づける聽衆がゐないからであり、彼等が、人民のどこにも『全能』なるロシヤの政府に對する不平を唱へるに足るだけの力を認めることができぬからである。……吾々はいまは　を彈劾するための演壇を作ることができるし、また作らなければならぬ。かかる演壇こそ即ち社會民主々義的新聞でなければならぬ。』

政治的曝露に對するかくの如き理想的聽衆をなすものは、なかんづく勞働者階級であつて、彼等

は、何よりも先づ、そして最も多く、全面的な生き生きした政治的知識を必要とし、且つ政治的知識が何ら『具體的な効果』を約束しない場合と雖も、その知識を最も多く積極的鬪爭に變へ得る能力を有するところの階級である。一の全ロシヤ的新聞のみが全民衆の利益のためのかゝる曝露の演壇となり得るであらう。『近代的ヨーロッパにあつては、一の政治的機關紙なくしては、「政治」の名に値ひする運動は不可能である』。ロシヤは、この點において、疑ひもなくまた近代的ヨーロッパに屬してゐる。新聞は既に久しく我が國でも一の權力となつてゐる――さうでなかつたら、政府はいろいろなカトコフやメスチェルスキーなどを買收したり補助したりするために、幾萬ルーブルを投げ出すやうなことはなからう。(註三)專制主義のロシヤにおいて、非合法的新聞が檢閲の取締をくぐり、合法的新聞や保守的新聞が餘儀なく自己の立場を公表させられてゐることは、珍らしいことではない。これは七十年代においても、あるひは五十年代においてさへ既にさうであつた。非合法的新聞を讀んで、その新聞から『如何に生き、如何に死すべきか』――『イスクラ』へ手紙を寄せた一人の勞働者の言葉を籍りれば、――を學ばふとしてゐる人民の層は、今日でははるかに廣く且つ深刻になつてゐる。經濟的曝露が工場主に對して戰ひを宣する如く、政治的曝露はなかんづく政府に對する同樣の宣戰布告である。さうして政治的曝露戰が廣く行き亘つて力強くなればなるほど、戰端を開くために戰ひを宣する社會階級が多數となり且つ一層果斷であればあるほど、その宣戰布告はそ

れだけ大なる道德的意義を持つのである。されば政治的曝露なるものは、すでにそれ自體として、の制度を　　さすための最も力強き一手段であり、敵の偶然的な又は一時的同盟者を彼等から背かしめるための一手段であり、　　　　とを蒔くための一手段である。

註三、カトコフ——第十九世紀の後半における政治記者にして、且つロシヤの貴族階級の理論家。彼れは自由主義的政治記者としてその生涯を始めた。ロシヤにおける革命運動の成長は、彼れの面相から速かにその自由主義的假面をもぎ取つた。一八八一年三月一日のアレキサンダー第二世の暗殺後は、粗暴なる貴族的反動と狂暴極まる警察獨裁政治の最も熱烈な鼓吹者となつた。

メスチェルスキー——最も極端な反動家。『國民』新聞の發行者。彼れは、同新聞のなかで、前世紀六十年代の大改革（農民解放、陪審裁判其他）以前の農奴制度や苔刑を主張した。

我らの時代においては、眞に　　　　を組織し得る黨のみが、××　　　　となり得るであらう。この『全國民的』といふ言葉は一の非常に重大な内容を有してゐる。勞働者ならざる階級出の大多數の曝露者たち（そして　　　　となるためには、吾々は殊にその他の階級に近づかなければならぬ）は思慮ある政治家であり、冷靜な活動家である。彼等は『全能の』ロシヤ政府については言はずもがな、下級の一官吏についてさへ『不平を並べる』ことが、我が身を甚だ危くするも

のであることをよく知つてゐる。さうしてこれらの不平が事實上何かの効を奏するのを彼等が見てとるとき、且つ吾々が一の政治的勢力たることを彼等が見てとるとき、彼等は初めて自分等の不平を携へて吾々の方へ來るであらう。吾々が局外者の眼に一の政治的勢力と見えるやうになるためには、吾々は、我らの目的意識と我らの創意と實行力とを高めるために、多くのことを根氣よく實行しなければならぬ。そのためには、後衞の理論と實踐との上に單に『前衞』のレッテルを貼り付けるだけでは足りない。

しかし、吾々が眞に全國民的な曝露の組織を吾人の任務と見做さなければならぬとすれば、――我らの運動の階級性はどこにあるのか？　と『プロレタリアの鬪爭との緊密なる組織上の連絡』の誇張的崇拜者は吾々に質問する。――然り、我らの運動の階級性は、まさに、この曝露の組織が吾々社會民主主義者を起點とするといふ點に、煽動によつて巻き起るあらゆる問題が、故意のものたると、さうでないものたるとを問はず、マルクス主義の曲解に對しては一歩も讓歩することなく、斷乎たる社會民主主義的精神に照し出されるといふ點に、この全面的な政治的煽動が一個の政黨――その政黨において、　　　　　　　　は、プロレタリアートの××的教育、並びにその政治的獨立性の墨守と合體し、さらにまた勞働者階級の經濟鬪爭の指導とも、即ちプロレタリアートのますます新たな層を起たしめ、且つ吾々の方へ導びくところの、プロレタリアートとそ

の搾取者との自然發生的衝突の利用とも合體してゐるところの一政黨――によつて指導されるといふ點に！

しかるに經濟主義の本質的特徴の一つは、この結びつきどころか、プロレタリアートの最も緊急なる欲求（政治的煽動と政治的曝露とによる全面的な政治教育）と一般に民主主義的な欲求とのかくの如き投合をさへ誤認してゐる點にある。このことは『マルチノフ』の言葉のなかにあらはれてゐるばかりでなく、彼の言葉と意味を同じうする一見階級的な立場の主張のなかにもあらはれてゐる。たとへば、『イスクラ』[*]第十二號に發表された『經濟主義者の書翰』の筆者は次の如く述べてゐる。『「イスクラ」の同一の根本誤謬（イデオロギーの過大評價）は、種々なる社會階級並びに傾向に對する社會民主黨の態度の問題において、同紙が不徹底なる原因である。「イスクラ」は理論的考察によつて（「黨と共に成長する黨の諸任務の成長」によつてでなく）……絶對主義に對し即時戰端を開くべしといふ任務を解決すると共に、現下の狀勢にあつては、この任務は勞働者にとつて極めて困難であることをたしかに感じてゐる……（感じてゐるばかりでなく、この任務は、勞働者に對しては、幼兒の世話を燒く『經濟主義的』知識階級に對するほどに困難ではないことをよく知つてゐる。なぜなら、勞働者は、忘れがたきマルチノフの言葉を借りて言へば、何ら「具體的な効果」を約束せない要求のためにみづから鬪はふとしてゐるのだから）……されば同紙は、この鬪爭のため

* 紙面の不足のために，吾々は『イスクラ』紙のなかで，經濟主義者の特徴を最もよく示してゐるこの書翰に對して詳しく答へることができなかつた。吾々は,『イスクス』紙の階級的立場から不徹底であるといふ風評を，既に久しく，しかも色々な方面から耳にしてゐたので，この書翰が發表されたことを非常に喜んだのであつた。吾

に種々の力が集合されるまで、長く待たうとする忍耐を有せず、かくして同紙は、自由主義者や知識階級の間に同盟者を求め始めてゐる。』

然り、吾々は、事實あらゆる種類の妥協政治家たちが既に久しく吾々に豫期せしめたかの祝福すべき時期、我が經濟主義者たちが自己の怠慢を勞働者に轉嫁することをやめ、自己の精力の不足を勞働者の力の不足であるかの如く言ひ繕ふことをやめる時期を、安閑として『待つ』べくあらゆる『忍耐』をすでに失つた。吾々は、我が經濟主義者たちに、『この鬪爭のための種々の力の集合』はどこになければならぬのかと問ひたい。それは勞働者を政治的に教育し、我が國の醜惡なる絶對主義のあらゆる方面を彼等の前で曝露することではないか？吾々は、この仕事のためにこそ、ゼムストヴォの人々や教師や統計家や學生などに對する政治戰野の曝露を吾々と共に分たうとしてゐる、『自由主義者や知識階級の間に同盟者』を必要とすることは明かではないか？この珍らしい、拔目のない『からくり』は實際それほど理解しにくいのであるか？ペェー・アクセリロードは、既に一八九七年以來、諸君に向つて繰り返してゐるではないか？『プロレタリアならざる階級の間に支持者並びに直接または間接の同盟者を獲得するといふ任務は、ロシヤの社會民主主義者のためには先づ第一に、そして主として、プロレタリアート自身の間における宣傳家的活動の性質如何によつて解決される』と。しかるにマルチノフとその他の經濟主義者たちとは、勞働者はまづ『雇主および政

々は以上の非難に答へるために，適當な機會を求めてゐたか，またはその非難が一定の形に表現されるのを待つてゐたにすぎなかつた。吾々が一の非難に答へるのは，自己辯護に依つてでなく．逆襲を以てする慣はしになつてゐる。

府に對する經濟鬪爭』において其の力を集合し(勞働組合主義的政治のために)、次ぎに初めて勞働組合主義的『活動への教育』から社會民主主義的活動へ『移る』べきであるといふ風に、依然として物事を想像しつづけてゐるのだ!

經濟主義者たちは語をついで曰く、『イスクラ』は、その試みにおいて、しばしば階級的立場を見棄て、階級對立を粉飾し、政府に對する共通の不滿に重きを置く――この不滿の原因と程度とは、たとへば『イスクラ』とゼムストヴォとの關係の如く、その『同盟者』の間でも甚だしく相違してゐるにも拘らず……『イスクラ』は、政府からの貰ひ金に滿足しない貴族に向つて、勞働者階級の援助を約束してゐるやうであるが、その際、これらの人民層の間の階級對立については一言片句も言及してゐないのである』と。もし讀者諸君が『イスクラ』第二號および第四號所載の論文『絶對主義とゼムストヴォ』――例の書翰の筆者は多分この論文のことを言つてゐるらしい――を讀まれるなら、同論文が、『身分的=官僚的ゼムストヴォの穩かな煽動』に對する、『所有階級獨自の活動』に對する政府の態度を取扱つてゐることを見られやう。その論文のなかには、勞働者は、ゼムストヴォに對する政府の鬪爭を無關心に傍觀してゐてはならぬこと、またゼームストヴォの人達は、革命的社會民主黨が全力をあげて政府の前に立ち現はれる場合には、その穩かな演説を止めて、頑强な鋭い言葉を發するやうに促がされることを論じてゐる。一體、書翰の筆者はこの論文のどこが氣に召さぬ

のか？　彼等は、勞働者が『所有階級』とか『身分的＝官僚的ゼムストヴォ』とかの言葉を誤解するとでも信じ、ゼムストヴォ會員に鋭い言葉をすすめることは『イデオロギーの過大評價』であるとでも信じてゐるのか？　彼等は、勞働者が絕對主義とゼムストヴォとの關係さへ解らずにゐて、絕對主義に對する鬪爭のために『種々の力を集合し』得るとでも思ひ込んでゐるのか？　依然としてすべてが不明である。ただ次の一事だけが、すなはち、この筆者は社會民主黨の政治的諸任務を甚だ漠然と考へてゐるといふことだけが明かである。このことは、『學生運動に對する「イスクラ」の態度も同じことである』といふ文句を見れば一層明かになる。公けの示威運動において、騷動・亂暴・および放逸の眞の發生地は學生層ではなくて、むしろロシヤの政府である（『イスクラ紙』第二號）ことを布告するやうに勞働者を促がす代りに、吾々はむしろ『ラボーチャヤ・ムィスリ』の精神に則つて考察すべきであつたのだ！　さうして社會民主主義者たちは、一九〇一年の秋、すなはち二月および三月事件の後に、新たな學生運動に臨んでこの種の意見を弘く流布させたのである。そしてこの學生運動は、この領域においても、絕對主義に對する抗議の『自然生長性』が、運動に對する社會民主黨側からの目的意識的指導をいいい追ひ越してゐることを明白に示してゐる。官憲とコザックのために虐待された學生のために立たんとする勞働者の自然生長的熱望は、社會民主主義的組織の目的意識的活動を追ひ越してゐるのだ！

書翰の筆者はさらに語り續ける、『しかるに「イスクラ」は、その他の諸論文において一切の妥協を鋭く非難し、たとへばゲート派の非妥協的態度を擁護してゐる』と。吾々は、今日の社會民主主義者の間における意見の相違を見て、この意見の相違が本質的なものではなく、從つて分裂は正當でないと、かくも自惚れて、かくも輕卒に聲明する人々に對し、この言葉をとくと熟考するやうに忠告しよう。一體、一つの組織內における有効な活動は、色々な階級に絕對主義の危險を知らしめ、勞働者に色々な層の相反する立場を解らせるために、吾々がこれと言ふほどのことを果さなかつたと主張する人々にとつて可能であるか、それとも、この問題のなかに、一の『妥協』を、明かに『雇主および政府に對する經濟鬪爭』の理論との妥協を見る人々にとつて可能であるのか?

吾々は、農奴解放四十年記念祭に際し、第三號のなかで、階級鬪爭を農村へ移入すべき必要を論じ、ウィッテの祕密廻狀に際して、第四號のなかで、ゼムストヴォの自治と絕對主義との兩立しがたき性質を論じてをいた。(註四)吾々は、新法律の發布に際して、(第八號のなかで、)大地主と彼等に仕へてゐる政府とを攻擊して、ゼムストヴォ會員の非合法的大會を歡迎し、彼等が屈從的な請願から鬪爭へ移るべきことを勸告した。吾々は、政治鬪爭の必要を理解し始め、且つそれを企てた學生を激勵し(第三號)、それと同時に、學生に街頭の示威運動をさせまいとする、『純學生運動』の主張者たちの『曚昧な無理解』を罵倒した(二月二十五日のモスクワの學生實行委員會の檄に際して第三號

のなかで)。吾々は、『ロシヤ』紙(註五)の自由主義的老猾漢の『虚妄なる夢想』と『嘘つぱちな僞善』とを曝露し(第五號のなかで)、それと同時に、『平和な文士や老大學教授や學者や知名の自由主義者たちを罰した』、政府刑吏の氣狂ひ沙汰を摘發した(第五號所載『文壇に對する警察の動員)。吾々は、『勞働者の幸福のための國家保護』に關する筋書の眞の意味をあばき、『下からの改革が起るまで待つよりも、むしろ上からの改革によつて下からの改革に對する要求を豫防する』といふ『貴重な告白』を迎へた(第六號において)。吾々は政府に抗議する調査員を支持して(第七號において)、調査員の間のストライキ破りを責めた(第六號において)。かくの如き戰術を、プロレタリアートの階級意識を曖昧ならしめるものと見、自由主義との妥協と見る者は、その人が『クレード』の綱領の眞の意味を理解せず、如何に誓ひを立てやうとも、その綱領を事實上實行してゐることを示してゐる。なぜなら、その人はかくすることによつて、社會民主黨を『雇主および政府に對する經濟鬪爭』に曳きずりおろし、自由主義の前に平伏するのであるから。なぜなら、その人は、あらゆる『自由主義的』問題に積極的に參加して、その問題に對する自己の社會民主主義的態度を決定すべき任務を放擲するのであるから。

註四、ウィッテ。――第十九世紀の末から第二十世紀の初めにおけるロシヤの政治家。鐵道網の加設、貨幣價値の確立、および保護關稅主義によつて、ロシヤの資本主義發達に甚だ多くのものを貢献した。政治家

としてのウィッテは、ロシヤのゼムストボォ・インスチィチュート（地方の貴族が壓倒的勢力を占むる地方自治制の代議機關）を代表する溫和反對黨と、官中に非常な勢力を揮つてゐた大官ポベィエドノゼェノの極端なる反動政策との間を旨く立ち廻らうと計つた。彼れは新たな寵臣プレフヴェに敗れて、一時政界から遠ざけられたが、一九〇四――五年の日露戰爭の不首尾な結末は、彼れをしてこの戰爭を決濟し得た唯一の外交家たらしめた。ニコライ第二世は彼れに動かされて『十月十七日の宣言』を發布し、政治的自由の保證と國會の召集とを約束した。彼れは二重政策を行ひ、一方ではゼムストヴォー大會の自由主義者たちを籠弄し、計畫中の『立憲內閣』へはゐることについてその主もな指導者たちと商議すると同時に、他方彼れの閣僚ヅルノヴォは愛國的な黑百黨の團體を組織した。（黑百黨とは一の王黨的なユダヤ人迫害團體である）。ウィッテは第一國會召集前に罷免され、その時以來國家の重立つた役割を演じなかつた。

**註五、**『ロシヤ』――ゴレムキン・ストルピン政府の公認機關紙。

# 勞働者の組織と×××の組織

（一九〇二年『何を爲すべきか？』より）

社會民主々義者にとつて、政治鬪爭の概念がもし『雇主および政府に對する經濟鬪爭』の概念と等しいとすれば、『×××の組織』なる概念は、彼れ等かれ見れば、多かれ少なかれ『勞働者の組織』なる概念と一致するといふことが當然に期待される。さうして事實さうなのだから、吾々が組織のことを論ずる場合、吾々は別々な言葉を話してゐるといふやうなことになるのだ。たとへば私は、それ以前には知合ひのなかつた相當徹底せる一人の經濟主義者との會話を、つひこの間のことのやうに記憶してゐる。話題はたまく『何人が政治革命を完成するか？』といふパンフレットに及んだ。[註一]吾々は、同書の根本誤謬が組織問題を等閑に附してゐることにあるといふことについては、速かに一致した。吾々はお互に全く同意見であると思つてゐたが……話しが進むにつれて、吾々は別々な事柄を言つてゐることがわかつてきた。私の知人は同書の著者が罷業資金や後援會等々を無視してゐると言つて非難したのに、私は政治××の『完成』のために必要なる××の組織のことを考へてゐたのである。この意見の相違が判明するや否や、私は一般に、もはや如何なる原則上の問題についても、これらの經濟主義者との和解を計るべきではなかつた！と信じてゐる。

註一、『何人が政治革命を完成するか？』――このパンプレットは當時の評論界において可なり大きな役割を果したが、今では完全に忘れられてしまつた。

この意見の相違の原因はどこにあつたか？　言ふまでもなく、經濟主義者たちが、組織上の問題についても、政治上の問題についても、絶えず社會民主々義をはなれて勞働組合主義の軌道へ陷つてゐる點に。社會民主々義の政治鬪爭は、雇主および政府に對する勞働者の經濟鬪爭よりもはるかに廣汎にしてはるかに複雜である。同樣に（從つてまた）、××的社會民主黨の組織は、經濟鬪爭のための勞働者の組織とは別個の種類のものでなければならぬ。勞働者の組織は、第一に、勞働組合的組織でなければならぬ。第二に、それは出來るだけ廣汎なものでなければならぬ。第三に、それは出來るだけ祕密結社風のものでないことを要する（もちろん私は、茲でも、また以下の文章においても、專制主義ロシャのことだけを言つてゐるのである）。これに反して、×××は、先づ第一に、そして主として、××とする人々を捉えなければならぬ（それ故にまた、私は×××の組織と言ふ場合、××的社會民主々義者を眼中に置いてゐるのである）。かくの如き組織成員の一般的特徵の前には、勞働者とインテリゲンチャとの間の區別は、兩者の職業的區別は言はずもがな、すべて完全に消失しなければならぬ。この組織は特別に廣汎なることを要しないが、出來るだけ×××××的でなければならぬ。この三種の相違點を詳論してをかう。

政治的自由を有する諸國においては、勞働組合と社會民主黨との區別が明かなる如く、勞働組合的組織と政治的組織との區別も充分に明白である。もつとも、勞働組合と社會民主黨との關係は、國を異にするに從ひ、その國の歴史的・法制的・およびその他の諸條件に應じてそれぞれに異つてはゐる。その關係は多かれ少なかれ緊密であつたり、複雜であつたりするかも知れぬが（吾々の立場からすれば、それは出來るだけ緊密であつて、出來るだけ複雜であつてはならぬ）、しかし勞働組合の組織と社會民主黨の組織とを同一視することは、自由な諸國においては問題たり得ないことである。しかし、ロシヤにおいては、社會民主々義的組織と勞働組合との間のあらゆる區別は、一見したところ、絶對主義の壓迫のために抹消されてゐる。なぜなら、一切の勞働組合、一切の團體は禁止されてゐるのだから。なぜなら、勞働者の經濟鬪爭の基本的發露と武器、すなはちストライキは一般に刑法上の犯罪（往々政治上の犯罪とさへ）となつてゐるのだから。かくして我が國の狀態は、一方では勞働者を彼れ等の經濟鬪爭において政治問題に『突きやり』、他方では社會民主々義者を勞働組合主義と社會民主々義との混同に『突きやる』やうなことになつてゐる。（我がクリチェフスキー、マルチノフ、およびその一黨は第一種の『撞着』を縷々と說くだけで、第二種の『撞着』に氣づかない）。實際、『雇主および政府に對する經濟鬪爭』に九割九分まで吸收されてゐる人々を想像して見よ。彼等のうちの或る者は、その活動の全期（四ケ月から六ケ月位）中に、唯の一度も、複雜

な×××の組織の必要に關する問題には思ひ當らないであらう。また他の者は、おそらく、相當の程度に普及せるベルンシュタインの文獻に『突きやられ』て、そのものから『平凡な日常鬪爭の經過』の最大重要性に關する確信を作り出すだらう。最後に、第三の者は、おそらく、プロレタリアの鬪爭との『組織上の緊密なる連絡』に關する、すなはち勞働組合運動と社會民主々義運動との連絡に關する、新たな手本を世界に示さうとする魅惑的な思想に熱中するだらう。かかる人々は論ずるであらう――一國が資本主義の領域に、從つてまた勞働者運動の領域に踏み入ることおそければおそきほど、その國の社會主義者たちはそれだけ早く勞働組合運動に參加して、その運動を支持し得るであらう。また非社會民主々義的勞働組合もそれだけ少なく存在し得るし、またさうでなければならぬ、と。この觀察はこの點までは全く正しい。ただ有害なのは、この點を一步進めて、社會民主々義と勞働組合主義との完全なる熔解を夢想することだけである。吾々はやがて『ペテルスブルグ鬪爭團』の規約を實例として、かくの如き夢想が我らの組織計畫に如何に有害な結果を及ぼすかを見るであらう。

經濟鬪爭のための勞働者の組織は勞働組合的組織でなければならぬ。すべての社會民主々義的勞働者はこれらの組織を出來るだけ助成し、且つそれに積極的に働きかくべきである。かういふのは正しい。だが、社會民主々義者ばかりが『組合團體』員たるべしと要求するのは、決して吾々の利

益ではない。それは大衆に對する吾々の影響の廣さを減少するであらう。雇主および政府に對する闘爭のための結果の必要を明白に意識せる勞働者は、すべて組合團體に參加するのもよからう。だが、組合團體そのものの目的は、組合に關するほんの初步的な知識だけでも理解し得るすべての人々を包括しなければ、すなはちその組合團體が非常に廣汎な組織でなければ達成されないであらう。そしてこの組織が廣汎であればあるほど、それに對する我らの影響もそれだけ廣汎となるであらう。そしてかかる影響は經濟闘爭の『自然發生的』發展にあらはれるのみならず、平組合員に對する社會主義的組合員側からの直接的なる意識的影響にもあらはれる。しかし、組織の廣汎なる構成にあつては、嚴格なる×××は不可能である（そのためには經濟闘爭への參加よりもはるかに多くの訓練を必要とする）。廣汎なる構成と嚴格なる祕密結社とのかくの如き必要は如何にして一致するか？　組合組織を出來るだけ祕密結社的でなくするといふことを、如何にして達成すべきか？一般的に言へば、そのためには二つの道しかあり得ない。組合團體を合法化するか（組合の合法化は、多くの諸國においては、社會主義的および政治的組織の合法化に先んじてゐた）、祕密組織を維持してゆくかである。しかし、祕密組織は、その×××行動が組合員大衆に對してはほとんど零に等しいほど散漫なものであらう。

非社會主義的および非政治的勞働組合の合法化は、ロシヤにおいては既に開始された。そして急

速に成長する我が國の社會民主主義的勞働者運動の一歩一歩が、この合法化の試み――主として、現制度の支持者から、しかし、一部はまた、勞働者自身や自由主義的知識階級からも起つてゐるところの、この試みを増大し促進することは、疑ひなきところである。合法化の旗はすでにワシリエフやズバトフ[註二]によつて揭げられ、それに對する援助はすでにオセロフ氏やウォルムス氏から豫期せられ且つ實行されて、勞働者の間にもすでにこの新傾向の支持者がゐる。吾々もまた今後この傾向に考慮を拂はなければならぬ。それを如何に考慮すべきか、――それについては社會民主主義者の間に二つの意見はあり得ない。吾々は、この運動に對するズバトフやワシリエフ、憲兵隊や僧侶などのすべての參加を斷乎として暴露し、これらの先生方の眞の意圖を勞働者に知らしむべき義務がある。吾々はまた、公開の勞働者集會における自由主義的政治家の演説に響き亙る、協調的な『調和的』賠音を殘らず暴露すべき義務がある――この賠音が平和的階級協調の要望に對する正直な確信から發せられやうと、あるひはまた　　　　らうとする望みから發せられやうと、あるひは最後に全くの不手際から發せられやうと、それは問題ではない。最後にまた吾々は、公開の集會や警察の許可を得た組合において『　　　　』を探し出し、合法的組織の助をかりて　　　　が、しばしば勞動者にかける罠に陷らないやうに勞働者を注意すべき義務がある。

註二、ズバトフ。——モスクワ・オクランカ（政治祕密警察）の指導者。大臣プレーヴェの教唆政策の熱心なる實行者。大臣プレーヴェは脅威的に成長するプロレタリアの運動を『上流社會』に氣持のいゝ軌道に導かうと試み、且つこの目的のために、憲兵隊の機關の直接の指導に服してゐた、勞働組合や勞働者の經濟組織の組織化にまで手を出した人物である。一九〇二年、ズバトフの指導の下に『機械工場勞働者自助會』がモスクワに成立した。この會を指導したものは勞働者であつたが、彼れ等は同時にオクランカの犬共であつた。同會は活潑たる活動を展開して、二三のストライキを組織し、結局、ズバトフが期待してゐたものとは全く正反對の結果を生ずるに至つた。すなはち、ブルジョアジーに對する階級的反感を深刻化し、プロレタリア大衆の間に組織的習慣を發展さすこととなつた。『ズバトフ一派』といへば、ロシヤでは、勞働者階級に對する警察の敎唆的策動の通り言葉となつた。

しかし、これらすべてのことを行ふことは、未だ必ずしも、勞働者運動の合法化か結局は吾々のために役立つもので、ズバトフ輩の爲に役立つものではないことを忘るることを意味しない。反對に、吾々は我らの曝露戰野によつてこそ小麥を粃殼から區別するのである。この粃殼については吾々の既に指摘したところである。また小麥とは、まだ廣汎な最もおくれてゐる勞働者層をも社會的および政治的諸問題のために獲得することであつて、それは、吾々××家たちが、本來合法的なる、且つまたその發展はますます多くの煽動資料を吾々に提供するに相違ない如き、種々の機能（合法

的文書の撒布、相互扶助、等々）から解放されることを意味する。この意味において、吾々はズバトフ一派やオセロフ一派に向つて次の如く言ひ得るし、また言はなければならぬ。紳士諸君、ただ働け、もつと働け！　諸君が（直接の教唆の意味においてか、または『ストルーヴェ主義』による『誠實な』買收の意味において）勞働者に罠をかけるかぎり――吾々は諸君の曝露につとめやう。諸君が眞實の一歩前進をなすかぎり――たとへ臆病で廻りくどいにしろ――吾々はどうぞよろしく！と言はふ。眞實の一歩前進は、たとへ極めて言ふに足らぬものにしろ、勞働者の活動領域の事實上の擴大あるのみである。さうしてかくの如き擴大の一歩々々は吾々を益するであらうし、また、犬が社會主義者を捕縛するのではなく、社會主義者が味方を促える如き、合法的組合の成立を速めるであらう。これを要するに、我らの仕事は今日籾殻に對して闘ふことである。植木鉢のなかに小麥を培養することが我らの仕事ではない。吾々は籾殻を遠ざけて、小麥の種子を發芽さすために土地をならさう。俗物共が彼れ等の植木へ水をかけてゐるかぎり、吾々は、今日籾殻を擇りわけて、明日小麥を獲り收れることのできる、刈取り人のために手配しなければならぬ。*

故に、吾々は、合法化に訴へて、出來るだけ×××的な、且つ出來るだけ廣汎な勞働組合組織の創設の問題を解決することはできぬ（しかし、ズバトフやオセロフ一派がこの問題の解決を一部だけでも吾々に可能ならしめるとすれば、それは非常に喜ばしいことであらう――さうするために、

* 籾殻に對する『イスクラ』の闘爭は，『ラボーチェエ・ヂェロ』の側から痛撃を受けた。『「イスクラ」紙にとつては，今春における種々の大事件は時代のしるしなのではなくて，むしろ勞働者運動を「合法化」さうとする，ズバトフ代理人等のみすぼらしい試みである。同紙は，これらの事實がその主張に反してゐることを看落してゐる。これらの事實こそ，勞働者運動が政府の眼に脅威的な廣さを得たことを示すもの

吾々は出來るだけ根氣よく彼れ等と鬪はなければならぬ！」。かくて殘されたものは勞働組合の

の道のみである。さうして吾々は、既にこの道を進んでゐる(吾々に明白に知られてゐる通り)勞働者に對し、あらゆる援助を與へなければならぬ。勞働組合組織は經濟鬪爭の展開と强化とのために非常に役立つばかりでなく、それはまた政治的煽動と××的組織とに對する非常に重要な補助手段ともなり得る。かういふ効果をあげるために、擡頭しつゝある勞働組合運動を社會民主主義にとつて望ましい進路へ導びくために、吾々は先づ第一に、ペテルスベルグの經濟主義者たちが既にもう五ケ年間も持ち廻つてゐる、かの組織計畫の愚劣さを明かにしなければならぬ。この計畫は、一八九七年七月の『勞働基金規約』のなかにも、また一九〇〇年十月の『勞働組合的勞働者組織規約』のなかにも說かれてゐる。これらの規約の根本誤謬は、廣汎な勞働者の組織を事細かに記述してゐることと、勞働者の組織と×××の組織とを混同してゐることである。右のうち第二の規約の方が行き屆いてゐるので、吾々はその方を考察しよう。その要目は五二箇條から成つてゐる。そのうち三二箇條は構成と事務擔當と『勞働者分會』の限界とを定めてゐる。勞働者分會は各工場内に設けられ(「十名以上を越えず」)、『中央の工場團體』を選ぶ。第二項に曰く、『中央の團體は各工場に起るすべてのことを調査し、事件の記錄を作る』『中央の團體はすべての寄附金納入者に對し每月基金の現在高を報告する』(第十七項)等々。地域組織のために十箇條が費やされ、『勞働者組織

である』(「二つの大會」27頁)。『すべてのこのはこの『世事にうとい』正統派の「獨斷主義」の罪である。彼れ等はメートル高さの小麥を見やうとせず，インチ高さの籾殼を非難してゐる！　これは『ロシヤの勞働者運動の見透しに關するゆがんだ感情』でにないか？』(同上27頁)

委員會』と『ペテルスブルグ鬪爭同盟委員會』との極めて複雜した組合せのために十九箇條が費やされてゐる。

社會民主主義は勞働者の經濟鬪爭のための『執行團體』である！　經濟主義の思想傾向が如何にして社會民主主義の道から勞働組合主義へ轉ずるかを、また、プロレタリアートの解放鬪爭の全體を指導し得る×××の組織のことを社會民主主義者がどう見るべきかについて、經濟主義が丸で何も知つてゐないことを、これ以上にはつきりと描き出すことは殆んど不可能である。『勞働者階級の政治的解放』を云爲し『ツァーの專斷』に對する鬪爭を云爲して、以上の如き組織規約を作成することは、社會民主主義の目下の政治的諸任務について皆目何も解つてゐないことを意味する。大衆のなかへの最も廣汎なる政治的煽動が、ロシヤの絕對主義のあらゆる方面とロシヤにおける種々なる社會階級の全姿體とを照し出す煽動が必要であることについては、五十幾箇條のうち唯の一つとしてその微光だも見せてゐない。然り、かかる規約を以てしては、政治的目的はおろか、勞働組合の目的すら貫徹されないであらう。なぜなら、そのためには職業および專門組織を必要とするが、それについては一言半句も言及されてゐないのだから。

だが、最も特色的なことは、この『制度』が三級選擧制を採り入れ、滑稽なほど小むづかしい規約の糸を通じ、各工場を『委員會』と結び付けやうとして、その全體が著しく面倒臭くなつてゐるこ

とであらう。經濟主義の狹隘な限界に囚はれて、ここではお役所風臭い煩雜さを思ひついてゐる。實際、この規約の四分ノ三は勿論いつになつても適用されることはなからうが、その代り、各工場内に一の中央團體を有するかくの如き『祕密結社的』組織は、憲兵隊が大衆逮捕を計畫することを極めて容易ならしめる。我がポーランドの同志たちは世をあげて勞働金庫の廣大な設立に熱中した時代を疾うに經過してゐる。彼れ等がただ憲兵隊に豐富な捕物を供するだけだといふことを悟つたとき、彼れ等はいち早やくこの思想を棄てたのである。もし吾々が勞働者の廣汎な組織を持ち、大衆の逮捕を避けやうと欲するならば、もし吾々が憲兵隊を喜ばせたくないならば、吾々はこれらの組織を散漫にして置くやうに努めなければならぬ。だが、さうした場合、これらの組織はよくその機能を果し得るであらうか？　そこでこれらの機能なるものを吟味しよう。『……各工場に起るすべてのことを調査して、事件の記錄を作る』（規約第二項）。こんなことが規則づくめに組織されなければならぬのか？　それは、特別な團體を設けずとも、非合法的新聞への種々の通信を通じて一層よく果されるではないか？『……各工場における勞働者の狀態を改善するための彼れ等の鬪爭を指導する』（第三項）。これについても規約は餘計なことである。幾分でも聰明な煽動家であれば、〔勞働者との〕單純な會話から、その勞働者が如何なる要求を出さうとしてゐるかを知り、次ぎにそれを××××の狹い――廣汎でない――組織の方に廻して、適當なビラを作ることができる。『二コペークの寄

附金を以て……基金を組織し』（第九項）、次ぎに毎月報告をなし（第十七項）、不納入者を除名する（第十項）等々。これこそ官憲にはもつけの拾ひ物である。なぜなら、『中央の工場基金』のこれらの內幕を殘らずさぐり、その現金を沒收して、最良の人士を拉致し去ることほど容易なことはないだらうから。それよりも、有名な（非常に狹く且つ非常に××××的な）組織體の印を捺した一コペークまたは二コペーク切手を發行するか、あるひは全然切手なしに資金の募集を行ひ、　　新聞が一定の定まつた標語の下にそのことを發表する方がもつて簡單ではないか？　さうしても同一の目的は達せられるであらうし、またさうすれば、　　　がいとぐちを探し出すことは百倍も困難とならう。

私はこの規約の分析をもつとつづけて行つてもいゝが、しかし以上だけでも充分であると信ずる。最も信頼し得る、經驗を積んだ、鍛錬された勞働者から成る小さな　　　　信頼し得る人物を主要地域に有し、最も嚴格な××××のすべての規律に從ひ、×××の組織と結びついてゐる　　は、大衆の最も廣汎な助力を得て、何らの規則なして、勞働組合組織に歸する一切の機能を、しかもなかんづく社會民主主義にとつて欲ましいやうに果すことができる。この道を辿つてのみ、　　　　と發展とを達成することができる。

これに對して或る人は答へやう。登錄濟の會員をすら持たぬほど散漫な組織は決して組織とは稱

され得ないと。あるひはしからん。だが、私は名稱を求めない。さうして必要なことは、この『會員を持たぬ組織』が、當初から、將來における我らの勞働組合と社會主義とのかたい結合を實現し且つ保證するといふことである。選擧や報告や一般投票等々を以て、廣汎なる勞働者組織を持たうとする者は、單に度しがたき空想家たるにすぎない。

このことから簡單な敎訓が生れてくる。すなはち、吾々が×××の鞏固な組織からはじめるならば、吾々は運動の强化をその全體において確保し、社會民主々義並びに勞働組合の目的をも共に實現し得るであらう。しかるに、もし吾々が一見大衆に『受け入れられ易い』勞働者の組織（その實は　が最も近づき易く、×××を最も多く官憲にひき渡し易い）からはじめるならば、吾々はどちらの目的をも實現し得ず、決して素人細工の域を脱し得ず、我らの分散と永久的な不統一とのために、ズバトフ型やオセロフ型の勞働組合のみが最も大衆に接近し易くなるだらう。

かくの如き×××の組織の機能は元來如何なるものでなければならぬか？　それについてはやがて詳しく說くつもりである。いまは先づ、經濟主義者たちと最も親しい間柄にあることが分つた、一人のテロリスト（憐むべき者よ！）の典型的議論を考察しよう。勞働者新聞『スウォボダ』[註三]（自由）第一號所載の一論文『組織』の筆者は、彼れの知人、イワノヴォ・ヴォスネッセンスクの勞働經濟主義者たちを辯護せんとした。

註三、『スウォボダ』(自由)。――ナデシヂン、セレンスキー等から成る革命的社會主義者團體の機關紙。煽動は教唆的テロルに代へ得るといふ意見を代表してゐた。

『群衆が默してゐて、無自覺であり、運動が下から起らないのはよろしくない。學生が休暇になつて、大學街を去ると――勞働者運動がぱつたり止むのを目擊する。一體、外部から促されるかういふ勞働者運動はほんとうの勢力なのだらうか？　そしてどこでも……勞働者運動はまだ一人立ちになることかできず、それはまだ手をひかれて歩いてゐる。萬事がその通りである。學生が立ち去ると――おしまひになる。クリームが抄ひ取られると、――ミルクはすつぱくなる。『委員會』が逮捕されると、新たなる委員會はまだ設けられず、再び停頓が起る。今度は如何なる委員會が設けられるかといふことを誰れが知らう。おそらく前のものとは全く別個のものであらう。或る者はこれだと言ひ、他の者は反對のことを言ふ。昨日と明日との連絡は消え失せて、過去の經驗は將來の役に立たぬ。そしてすべてのことは、大衆のなかに深く根を張つてゐないからにすぎない。働いてゐる者は百人の愚人ではなくて、十人の賢人だからである。十人の賢人はいつでもひつたくられる。しかし、いくら躍起になつても毀されるやうなことはない』(六三頁)。

事實は正確に記されてゐる。我らの素人臭さの繪面が可なりよく描かれてゐる。しかしその結論

は、その不聰明な點から見ても、その政治的無策の點から見ても『ラボーチャヤ・ムイスリ』にふさわしい。この筆者は、運動が『深い處』に張つゐる『根』に關する哲學的および社會的・歷史的問題と、憲兵に對するより有効な鬪爭に關する技術上の組織問題とをごつちやにしてゐるのだから、これは不聰明の骨頂である。また筆者は拙惡な指導者を見捨てゝ優良な指導者に訴へる代りに、一般に指導者を見捨てゝ『大衆』に訴へてゐるのだから、これは政治的無策の骨頂である。それは、丁度政治的煽動に代ふるにテロ行動を以てせんとする思想が、政治的方面において吾々を後戻りさせるやうに、組織的方面において吾々を後戻りさせんとする試みである。私は有り餘りすぎて本當の當惑を感じ、『スウォボダ』のこの混亂をどこから取扱つていゝか解らない。明晰を期するために、私は一つの實例から始めやう。ドイツ人を例に取らう。諸君は、ドイツ人の間で組織が大衆を捉え、すべてのことが大衆から起つてゐること、勞働者運動は既に一人立ちができるやうになつたことを否定されはすまい? しかもこれらの幾百萬の群衆が『十名の』老練な政治的指導者を如何に甚だしく尊重し、如何にしつかり彼れ等にしがみ付いてゐることだらう! 議會において、敵黨の代議士が社會主義者を次のやうに嘲笑したこともしばしばあつた。『見上げた民主々義者たちだ! 君たちは言葉の上では勞働者階級の運動を有してゐるが、事實はいつも同じ指導者組だけが活躍してゐる。年から年中、何十年經つても、いつも同じベーベル、同じリープクネヒトだけである。君た

ちの勞働者選出代議士は、カイザーの任命せる官吏よりもはるかに交代されれることが少ないのだ！』。しかし。ドイツ人たちは、『民衆』を『指導者』と爭はせて漁夫の利を占め、民衆のなかににごつた下らぬ本能を鼓舞し、『十名の賢人』に對する民衆の信頼を覆へすことによつて運動からその堅實性と安定とを奪はふとする、これらの民衆籠絡策を一笑に附したにすぎなかつた。ドイツ人の政治的思惟は充分に發達をとげてゐる。彼れ等は、才幹ある（そして天稟の才幹は百名と持ち合せてゐない）、老練な、職業的に完成された、さうして相互にすばらしく意氣投合せる、永年の練訓を經た『十名の』指導者なくしては、今日の社會において如何なる階級の力強い鬪爭も不可能であることを悟るほどに政治的經驗を集めてゐる。ドイツ人は、『百人の凡人』を甘言を以て釣り、民衆の『腕つ節』に呵ねて、彼れ等を（モストやハッセルマンの如く）無思慮な『×××』行動に教唆し、試練を經た沈着な指導者に對する猜疑を撒き散らした民衆煽動家を彼れ等の間に目擊した。ドイツの社會主義がかくも成長して力強くなつたのは、社會主義の内部におけるあらゆるデマゴギー分子に對する、一歩も假借せぬ斷乎たる鬪爭のお蔭にすぎなかつた。しかるに、ロシヤの社會民主々義の全危機は、自然發生的に眼覺め行く民衆が、訓練され仕上げられた有能の指導者を充分に持たないからだと言はるべき時に當り、我が七度賢人たちは愚人の瞑想を以て宣告する、『運動が下から起らないのはよろしくない！』と。

『學生から成る委員は役に立たぬ。それは堅實ではない』。——全くその通りである。だが、このことから、學生にしろ勞働者にしろ職業×××にまで發展し得るといふことは暫らくおくとして、職業×××から成る一委員を必要とすることが推論さるべきである。しかるに諸君は、勞働者運動は外部から促がさるべきものではない！といふ結論を引き出す。諸君はその政治的單純さのために、かく結論することによつて、我が經濟主義者や我が俗物共の應援に出かけてゐることすら解らない。失禮ですが、我が學生たちが勞働者を『つつ突いた』のはどの點にあつたか？たゞ單に、學生が彼れにあり合せの政治知識の斷片を、彼が手に入れた社會主義思想の斷片（といふのは、今日の學生の主もな精神的營養、合法的マルクス主義は、斷片たるイロハ以外には何物をも與へ得なかつたのだから）を勞働者に傳へたことにあつた。この『橫からの後押し』はあまりに多すぎたどころか、むしろ反對に、我らの運動においてあまりに少なすぎ、途方もなく少なすぎたのである。なぜなら、吾々は今まであまり贅澤に身を持ちくづし、『雇主および政府に對する勞働者の端初的な經濟鬪爭』をあまり奴隷的に讃美しすぎてゐたからである。吾々職業×××は、この『後押し』を百倍も多く行はなければならぬし、また行ふであらう。しかし、諸君は『橫からの後押し』といふ如き卑劣な言葉を擇び、政治知識と××的經驗とを勞働者にもたらすすべての人々に對する疑惑の念を勞働者の間に（少なくとも諸君と同じやうにおくれてゐる勞働者の間に）起させ、かかる人々に對し本能

的に反感を起させてゐるからこそ――そのためにこそ諸君はデマゴーグなのだ。そしてデマゴーグは勞働者階級の最惡の敵である。

さうだとも！　私の論戰の『非同志的方法』をさう喧しく咎め立ててくれるな！　私は諸君の志の清廉を毛頭疑ふものではない。私は全くの政治的純撲のみがデマゴーグとなり得る、といふことを既に言つた。そして私は、諸君がデマゴギーにまで成り下がつてゐることを指摘した。私は、デマゴーグが勞働者階級の最惡の敵であることを倦まず繰り返すであらう。最惡の敵だといふのは、彼れ等が大衆の惡い本能を煽てるからであり、おくれた勞働者が、彼れ等の味方の如く立ち廻り、時にはまた正直にさう立ち廻る、これらの敵を見分けることができぬからである。また、動搖と內的衰退との時代、我らの運動がやうやく人目をひきはじめた時期に當り、群衆をデマゴギー的に拉致し去ることほど容易なことはなく、しかも群集は後からにがい試練を經て、はじめて自己の誤謬を悟らされるが故に、それは最惡の敵なのである。故に、今日のロシヤの社會民主々義者にする刻對下のスローガンは次の如くでなければならぬ、曰く、デマゴギーに成り下かりつゝある『ウォスボタ』並びに『ラボーチェエ・デエロ』に對する精力的鬪爭！*

『十人の賢人は百人の凡人よりも逮捕され易い』。このすばらしい眞理（百人の凡人はこの眞理のために常に諸君を喝采するであらう）が自明のことに見えるのは、諸君が討論の進行中一の問題から

* 組織問題に關する『スヴォボダ』の『横からの後押し』やその他一切の考察について玆に私が述べたことは，その全部がすべての經濟主義者および『ラボーチェィエ・ヂェロ』の同人を指してゐることを玆に一言してをく。といふのは，彼れ等は一部は組織の問題において同一の見解を說敎し且つ辯護し，その一部は之れに乘り上げさへしたからである。

他の問題へ飛び移つてゐるからにすぎない。諸君は『委員會』の逮捕、『組織』の逮捕と言つてをきながら、いま諸君は『深い處』にある運動の『根』の逮捕の問題に飛び移つてゐる。勿論のこと、我らの運動は深い處に幾千の根を持つてをればこそ逮捕されないのだが、いまはそんなことを言つてゐるのではない。『深い處にある根』の意味においては、今日と雖も、吾々の分散にも拘らず、吾々は逮捕され得ない。それにも拘らず、吾々はみな、運動のあらゆる永續性を破壞する組織の　を悲歎するし、また悲歎せざるを得ない。もし諸君が組織の逮捕を云爲し、飽くまでそれを主張するなら、私は諸君に向つて、百人の凡人よりも十人の賢人を逮捕することの方がはるかに困難であると言はなければならぬ。諸君が私の『反民主々義的』態度に對し如何に民衆をけしかけやうと、私は右の原則を擁護するであらう。既に再三强調した如く、『賢人』とは、それが學生たると勞働者たるとを問はず、組織の方面においてはただ職業×××の意味にのみ解さるべきである。されば私は次の如く主張する。一　　る××運動も堅實たるを得ないこと。二、自然發生的に　がます〳〵廣汎に　をなし、その　加すればするほど、　必要となり、　はいよ〳〵鞏固とならなければならぬこと（大衆中のおくれた層を拉し去ることは、あらゆるデマゴーグにはそれだけ容易となるのだから）。三、　は、主として、　から

構成されなければならぬこと。四、吾々がかかる　　　　むるほど、さうして　　　　として行ひ、且つ　　　　を終へた人々のみに加入を許せば許すほど、　　　　においては、かかる　　　　することはそれだけ困難となり、また、五　　　　する可能性を有するところの、　　　　から集まる人々の範圍もそれだけ廣汎となること。

私は、我が經濟主義者たち、テロリストたち、『經濟主義テロリストたち』*が以上の命題を説破されんことを提議する。右の命題のうち最後の二つを私は間もなく取扱ふつもりである。『十人の賢人』と『百人の凡人』とはいづれが逮捕し易いかといふ問題は、非常に嚴密な　　　　と並んで大衆組織が可能であるかどうかといふ前掲の問題に歸着する。吾々は一の廣汎なる組織を　　　　な高さにまでもたらすことはできぬが、　　　　なくしては、堅實に且つ恒久的に行はれる政府との闘爭は問題たり得ない。一切の祕密結社的機能を極く小數の職業×××の手に集中さすことは、これらの職業×××が『萬人に代つて考へる』といふことを意味せず、群衆が少しも活動的に運動に參加しないといふことを意味しない。むしろ反對に、大衆はかかる職業×××の數をますます多く選拔するであらう。なぜなら大衆は、その時、『委員會』を設けるためには、二三名の學生と經濟的に闘爭する勞働者とを集めるだけでは充分でなく、幾年間かを經て自身が職業×××となることが必

* 『スヴォボダ』には前の名稱よりもこの名稱の方がおそらく當つてゐる。なぜなら『革命主義の復活』のなかではテロルが庇護され，玆に問題となつてゐる論文のなかでは經濟主義が庇護されてゐるのだから。彼等は欲するが，しかしできない！——と，吾々は『スヴォボダ』を一般的に評することができやう。最善の意圖——そしてその結果は混亂と混沌とである。組織の恒久性を唱へる『スヴォボダ』が，革命的

要であることを悟るであらうから。大衆は專ら道樂仕事のみを『考へ』てゐるのではなく、積極的に職業×××の訓練のために努力するであらうから。組織の××××機能の集中は決して運動のあらゆる機能の集中を意味しない。廣汎なる大衆の　出版物への積極的支持は、『十名の』職業×××がこの事務に關する　的機能を集中さすことによつて減少しないばかりか、却つて強力となるであらう。かくして、かくしてのみ吾々は、　出版物の購讀、かかる出版物に對する協力、一部はまたその配布が、殆んど　的な仕事でなくなるといふことをなしとげるであらう。なぜなら、官權は、幾千と配布された出版物の一冊のために、司法上および行政上の起訴を行ふことの不可能と馬鹿らしさとを間もなく悟るであらうから。そしてこのことは印刷物について言はれるばかりでなく、示威運動をも含めて運動のあらゆる機能がさうである。大衆の積極的にして廣汎なる參加は、我が國の　にも劣らぬほど　に鍛えられた「十名の」老練なる×××が、　各都市地域に對する、各工場地域に對する、　に對する等々の如き、あらゆる　事務を集中さすことによつて減少しないばかりか、むしろ反對にそのために多くの利益が得られるであらう。(私は、私の意見が「非民主々義的」だと非難されることを百も承知してゐる)。　的な機能の集中は×××の組織によつて弱められないばかりか、却つてそれは、多くの公衆を目當てとする、從つてまた出來るだけ散漫で出來るだけ

思惟と社會民主主義的理論とのこの恒久性を知らうと欲しないといふ主もな理由から。職業革命家を新たな生命に呼び覺まさうと努め(「革命主義の復活」)，そのために，第一，教唆的テロルを，第二，出來るだけ『横からつつ突かれる』ことの少ない『平均勞働者の組織』を提唱してゐる，—— これこそほんとうに家屋を暖めるために，その家屋を燒き拂ふものである。

でない、その他の種々の組織の全大衆の活動の廣さと內容とを、たとへば勞働者の組合團體、文書の獨立研究や講義のための勞働者の小會合、並びにその他の一切の人民層の社會主義的および民主々義的小集團等々を、豐富にするであらう。種々雜多な機能を有するかくの如き小集團や團體や組織は、到る處に、出來るだけ多くを必要とする。しかし、これらの組織と×××の組織とを混同せんとし、兩者の間の限界を塗抹せんとし、(あるひはまた)、大衆運動に『仕へる』ためには、專問的に社會民主々義的活動に身を捧げる人々が必要であり、これらの人々は忍耐と堅忍とを以て自己を職業×××に作り上げなければならぬといふ、さうでなくてさへ不明瞭となつてゐる意識を、大衆の間に一層曖昧ならしめんとするならば、それは馬鹿げてたことであり、有害なことであらう。

然り、この意識は信ずべからざるほど曖昧にされてゐる。組織の方面における我らの主要な罪過は、吾々が我らの素人藝によつてロシヤにおける×××の威信をひき下げたことである。理論上の問題では柔弱で腰が坐らず、狹い眼界を有し、自分のだらしなさを大衆の自然生長性を以て辯護する人、護民官たるよりもむしろ勞働組合の書記たることを考へ、遠大にして豪放なる計畫を立つる能力なき人、自己の本職、すなはち×××に對する鬪爭に不慣れて未熟で(まさか!)、敵にさへ尊敬の念を懷かしめ得ない人——さういふ人は×××ではなくて、みすぼらしい素人である!

實際家であれば、私のこの鋭い言葉を惡意に解しはしなからう。なぜなら、準備の不充分と言ふかぎり、それは先づ第一に私自身を指してゐるのだから。私は、非常に廣汎な包括的任務を立てた、一の小集團のなかで活動してゐたのである。――そしてこの集團の成員たる吾々は皆、『吾々に×××の組織を與へよ――しからば吾々はロシヤを崩壞せしむべし！』といふ、有名な警句を改めて唱へ得た歴史的瞬間において、吾々が素人であつたといふ意識の下に惱まされなければならなかつた。それ以來私は、當時感じたこの燃ゆるが如き羞恥の念を思ひ返す每に、×××を素人にまで墮落させるのでなく、むしろ素人を×××にまで向上させることが我らの任務であることを理解せず、その說敎によつて×××の職分を辱しめる、かのエセ社會民主主義者に對する惡感は私の胸にますます募るばかりであつた。

# 黨の組織規約協議會における演說

（一九〇三年八月、ロシヤ社會民主勞働黨第二回黨大會）[註一]

註一、ロシヤ社會民主勞働黨第二回黨大會は一九〇三年ロンドンに開かれた。この黨大會のとき、ボルシェヴィキーとメニシェヴィキーとの間の意見の相違は鋭く表れてきた。最も重要な相違點は、

一、組織の問題に關するもので、この問題の動機は、如何なる人を黨員と見做すべきかといふことであつた。レーニンは、そのためには、何かの地方團體に參加してゐることが絕對に必要であると見做したが、マルトフ（メニシェヴィキの指導者）は、これに反して、政黨を支持すれば充分であると見做した。マルトフの規定は、絕對主義に反對してゐて、自分の要求を社會主義的言辭を以て飾つてゐた、ブルジョアおよび小ブルジョア知識階級の大部分に、政黨所屬關係をまぎらかさす可能を與へた。同時に、この規定によるときは、黨の決議の實行を監視することは全く不可能であつた。それは、反對黨の政治家のすべてに、彼自身の戰術上日和見主義的な方針を黨の方針と僞稱することを許したため、黨の規律を破壞してしまつた。

二、自由主義者に對する關係の問題――。レーニンは、革命的鬪爭における指導をプロレタリアートに歸するといふテーゼを立てたが、これに反してメニシェヴィキの規定はブルジョアジーとの同盟並びに協働へ導びいた。

私は先づ第一に個人的性質の二つの所見を述べてをきたい。第一は、『合同すべし』といふアクセルロード[註二]の愛すべき（私は皮肉を言つてゐるのではない）提案についてであります。私は我らの意見の相違が黨の死活を制するほど本質的なものとは思つてゐないのだから、私は喜んでこの提案に從ひたかつた。惡い規約條項を採用したからとて、吾々はさう易々と滅亡しはせぬ！しかし、二つの規定のうちどちらかを選ばねばならぬとすると、私は、マルトフの規定は原案の改惡であり、その改惡は、一定の事情の下では、黨に甚だしい害惡を流し得るといふ、私の固い確信を斷じて棄てわけにゆかない。第二の所見は同志ブロウケル（リヂヤ・マッハナウェッツの匿名）に關するものであります。同志ブロウケルが、到る處で選擧原則を實施するために、黨員の概念を幾分精確に定義した私の規定を採用したのは、全く當然のことである。だから、同志ブロウケルが私に味方すると云つて同志マルトフが憤慨するのを、私は理解しかねる。一體、同志マルトフは、ブロウケルの動機と議論とを究めずに、彼れの言ふところとは反對のことを標準にしようといふのであるか？　私は問題そのものについてかう言はざるを得ません。同志トロツキーは同志プレハーノフの根本思想を全く誤解したために、全問題に對する彼の考察は的を外づれてゐる、と。トロツキーは知識階級と勞働者、階級的立場と大衆運動について語つたが、彼れは、黨員の概念は私の規定によつて狹められたのか、それとも擴大されたのかといふ、一の根本問題を見落したのである。もし彼れがこの問題を

提出したとすれは、私の規定は黨員の概念を狹めるが、マルトフの規定は『彈力性』(マルトフ自身の正確な表現に從へば)を特徴とするものだから、反對にその概念を擴大するといふことを容易に見きわめ得た筈なんだ。目下の如き黨生活の時期にあつては、この『彈力性』こそ、疑ひもなく、立場の定まらぬあらゆる要素、不確定な日和見主義要素のために門戶を開くものである。この單純な解り切つた結論を反駁するには、かかる要素は存在してゐないといふことを證明しなければならなかつた筈だ。しかるに同志トロツキーはそれをしようとも思はなかつた。實を云ふと、これは證明するまでもないことである。なぜなら、かかる要素が多分に存在してゐること、それは勞働者階級のなかにも存在してゐることは、誰れでも知つてゐることなんだから。確實な方針と黨の原則の純粹とを維持することが、今日かくも痛切な問題となつてゐるのは、黨が――その統一を恢復して――その隊列のなかに非常に多くの動搖的要素を取り入れ、しかもその數は黨の成長と共に增加しようとしてゐるからである。同志トロツキーが黨は陰謀家の組織ではないと言ふとき、彼れは私の著書『何を爲すべきか?』の根本思想を非常に間違へて解したのである。(かういふ反駁をその他の多くの人々もまた私に向けた)。トロツキーは、私が右の著書のなかで、祕密結社的な最も緊密な組織から、全く散漫な組織に至るまで、ありとあらゆる型の組織を提議してゐることを忘れたのです。彼れは、黨とは單に勞働者階級の夥だしい大衆の前衞、その指導者でなければならぬこと、そ

して勞働者階級の大衆はその全體が（または殆んど全體が）黨の組織の『統制と指導と下に』活動するけれども、その全體が黨に所屬するのでも、また所屬してもならないことを忘れたのです。同志トロツキーが根本的な點で誤まつてゐる結果、如何なる結論にくるかをほんとうに考察して見やう。彼れは多數の勞働者が逮捕に會つた場合、彼れ等のすべてが黨に所屬してゐないことを明かにしたとすれば、我が黨は奇異なものに見えやう！　と說いた。だが、結局はその反對ではないか？　同志トロツキーの議論が奇異に見えはしないか？　彼れは、幾分でも老練な革命家なら喜ぶべき筈のことを、悲しむべきことだと思つてゐる。もしストライキや示威運動のために、幾百または幾千の逮捕者が出た場合、彼れ等が黨の組織の所屬員ではないことを證明したとすれば、それは我らの組織が立派であること、多かれ少なかれ狹い範圍の指導者を祕密結社に結束させ、且つ出來るだけ廣汎な大衆を運動に導き入れるといふ我らの任務を、吾々が正當に果してゐることを意味するだけであらう。

**註二**　アクセルロード。――『勞働解放』團の一員。ロシヤ社會民主勞働黨第二回黨大會の時は助言を與へてイスクラを代表したが、彼は後にメニシェヴィキーとなり、今日に至るも尙ほさうである。

マルトフの規定に贊成する人々の誤謬の根源は、彼れ等が我が黨生活の根本的弊害の一つを見落してゐるばかりでなく、この弊害を是認してさへゐることである。この弊害といふのは、殆んど一

般的とまでなつた政治的不滿の雰圍氣にあつて、黨の仕事は絕對に祕密にされ、その活動の大部分を狹い祕密團體かまたは個人的討議に集中さすことが說かれてゐる狀態なので、吾々がお喋り屋と積極的に活動する人々との間に區別を立てることが、極めて困難であるか、あるひは一般に殆んど不可能となつてゐるといふことである。この二種類の人物の混同がロシヤにおけるほど通常のことゝなつてゐて、ロシヤにおける如く不明瞭と混亂と弊害とをかもしてゐる國はおそらく他のどこにもあるまい。知識階級の間のみならず、勞働者階級のなかあつても、吾々はこの弊害にひどく惱まされてゐるのだ。しかるに同志マルトフの規定はこの弊害を是認してゐる。

この規定は誰れでも彼れでも黨員たらしめんとするものである。同志マルトフ自身このことを條件附で承認せざるを得なかつた――『諸君が欲するなら、よろしい』と彼は言つた。このことをこそ吾々は欲しないのだ！　そのためにこそ、吾々はマルトフの規定にかくも斷乎として反對するのである。口先ばかりの一人の人間が黨員たるの權利と可能とを持つよりも、積極的に活動する十人の人間に自分が黨員だと名乘らせないにかぎる（眞に活動する人間は職名や名稱を求めはしない！）。この原則は私には反駁すべからざるものであり、且つ私をしてマルトフに反對せしめるところの原則である。これに對する答へは、吾々は實際黨員に何らの權利をも認めておらず、從つてまた何らの濫用といふことも起らなからうといふのである。しかし、かゝる異論は根據のないものである

る。黨員が如何なる特別の權利を得るかといふことが、吾々の間で言はれてゐるのでないとすれば實際また黨員の權利の制限といふことも問題ではない筈である。それに――この點が眼目である――權利はさて置いて、各黨員は黨に對して責任があり、黨は各黨員に對して責任を負ふといふことを忘れてはならぬ。我が國の政治鬪爭の狀勢の下では、ほんとうの政治組織の萠芽狀態にあつて、組織の成員に黨員たるの權利を認めやうとせず、却つて組織に所屬してゐない（おそらく故意に所屬してゐない）人々に對する責任を黨に課するとすれば、それこそ有害で且つ危險なことであらう。同志マルトフは、黨組織の會員でない者が、自分は懸命に活動したにも拘らず、法廷では黨員だと名乘るべき權利を持たぬといふことを見て仰天する。私はそんなことにはびつくりしない。反對に黨の組織に所屬しておらずに、黨員だと名乘る人が、好ましからぬ方面を見せるとすれば、それは重大な害惡であらう。かゝる人間が、概念の曖昧なる結果、黨の統制と指導との下に活動するといふことは否定できなからう。事實において――そしてこのことは疑ひなきところである。――『統制と指導』といふ言葉は、統制も指導もないといふ結果となるであらう。中央委員會が、今日の統制を、積極的に活動してゐて、しかも黨に所屬してはゐないすべての協力者の上にまで擴大することは、斷じてできないことであらう。そこで我らの任務は、事實上の統制を中央委員會の手に置くことである。そこで我らの任務は、黨の堅實性を保ち、黨の純粹を貫徹することである。吾々

は黨員の使命と意義とを向上さすやうに、ますく高く向上さすやうに努めなければなりません―

―そのためにまた、私はマルトフの規定に反對するわけであります。

# 新『イスクラ』。組織問題における日和見主義

（一九〇四年『一歩前進、二歩退却』より）』。

雑錄欄に載つた同志アクセリロードの二つの論文は、たしかに、新『イスクラ』[註一]の原則的立場を檢討するための根底となるべきものである。吾々は既に彼れが得意とする多くの言葉の具體的意義をあばいてきたので、今度はこの具體的意義をはなれて、『少數派』に（あれやこれやの小さな下らぬ事件において）これらの標語をとらしめ、その他の如何なる標語をもとらしめなかつた、かの思想傾向を究めて見なければならぬ。吾々はこれらの標語の原則的意義をそのものの起源からはなれて吟味しなければならぬ。吾々は相ひ和することを表面の看板としてゐる。で、吾々は同志アクセルロードに讓步して、彼れの理論を『本氣に取る』ことゝしよう。

註一、『新イスクラ』。――イスクラが第五四號以來メニシェヴィキの手に移つてから、同紙はロシヤの黨の文献においてさう呼ばれてゐた。

『我らの運動はそもく〳〵の初めから二個の相反する傾向を藏してゐて、この對立關係は相互に展開され、つひに運動となつて表はれなければならなかつた』といふのが、同志アクセルロードの根本

論綱である(『イースクラ』紙第五七號)。すなはち、『原則的には、(ロシヤにおける)運動のプロレタリア的目標は西歐の社會民主々義のそれと同一である』。しかしながら、我が國では、勞働者大衆への働きかけは、『彼れ等とは緣のない社會的要素』、すなはち急進的インテリゲンチャから發してゐる。かくて同志アクセルロードは、我が黨内におけるプロレタリア的傾向と急進的・知識階級的傾向との間の對立鬪係を論證する。

以上の點ではアクセリロードの主張は絕對に正しい。かういふ對立鬪係が存在することは(單にロシヤの社會民主黨においてばかりでなく)疑ひを存しない。それのみではない。この對立鬪係こそ、ロシヤにおいても最近十年間に我ちの運動に表はれたところの、革命派(または正統派)と日和見主義派(修正派、漸進派、改良主義派)とへの近世社會民主々義の、かの分裂を著しい程度に說明するものであることは、たれでも知つてゐるところである。また、運動のプロレタリア的傾向が正統派的社會民主々義となつて表はれ、これに反して民主々義的・知識階級的傾向は日和見主義的社會民主主義となつて表はれてゐることは、全世界の知るところである。

しかるに同志アクセリロードは、この一般に知れ亘つた事實にふれてくると、直ちに不安げに退却しはじめる。彼れは、前記の分裂が、一般的にはロシヤ社會民主主義の歴史において、特殊的には我らの黨大は會に於て、如何にして實現したかを、彼れ自身この黨大會のことを書いてゐながら

それを分析しようと露ほども企ててはゐない。同志アクセリロードは、新『イスクラ』の編輯部全體と同じく、今度の黨大會の議事錄を死ぬほど怖れてゐる。これは以上に述べたすべてのことから見れば不思議はないことだが、我らの運動内の種々なる傾向を研究すると稱する『理論家』の側では、眞理に對する恐怖の奇拔な一例をなしてある。同志アクセリロードは、彼れ自身のかうした性質によつて、我らの運動における種々の傾向に關する、最も新らしい最も正確な資料を推し除けて、氣心のいゝ夢想の領域に自分の靈魂の救濟を求めてゐる。彼れは曰く、『實際、合法的マルクス主義または半マルクス主義が我が自由主義者たちに文筆上の指導を讓つたとすれば、なぜ歷史の氣紛れが革命的ブルジョア民主主義に正統派的革命的マルクス主義學派の指導を與へてはならなかつたか？』と。同志アクセリロードにとつて氣持のいゝこの夢想については、吾々は、もし歷史が氣紛れを持つてゐるとしても、そのことはこの歷史の分析を企てる一人の人間の思想の氣紛れの申開きにはならぬと言ふ外はない。半マルクス主義的指導者の陰に自由主義者の姿が映つたとき、彼れ等の『傾向』を探究せんとした（また探究し得た）人々は歷史の偶然の氣紛れに賴らずに、この指導者の心理と論理との凡白の實例に賴り、ブルジョア文獻におけるマルクス主義の模倣を示す、彼れ等の文獻的面相全體のかの特質に賴つた。『我らの運動における一般的な革命的およびプロレタリア的傾向』を分析せんと企てた同志アクセリロードは、何物によつても、全く何物によつても、彼

の嫉ひな黨の正統派の代表者たちの間に、一定の傾向を發見し指摘することができず、それによつてただみづから自己の無能を堂々と曝露したにすぎなかつた。同志アクセリロードの取引は、彼れが歴史の氣紛れに訴へなければならぬのなら、甚だ景氣がよくないのに相違ない。

同志アクセリロードの――『ジャコバン黨員』についての――もう一つの參照はもつと教訓的である。同志アクセルロードは、近世社會民主々義の革命派と日和見主義派とへの分裂が既に久しく端を發し、詳しく言へば、ロシャにおいてのみならず、『フランス大革命時代の歴史的類似』に端を發したことを、たしかに知つてゐるにちがひない。同志アクセリロードは、近世社會民主主義のヂロンド黨員たちが、彼れ等の敵を特徴づけるために、到る處で、常に、『ジャコバン主義』、『ブランキー主義』などの名稱に訴へてゐることを、たしかに知つてゐるにちがひない。吾々は同志アクセリロードの眞理に對する恐怖を眞似たくはない。吾々は我が黨大會の議事錄を審査して、そのなかに問題の傾向および類似を分析し檢討するための資料があるかどうかを調べて見やう。

例の一。黨大會における綱領に關する論爭。アキモフは（同志マルチノフの意見に『完全に同意』して）曰く、『政權の獲得に關する（プロレタリアートの獨裁に關する）項目は、その他のすべての社會民主主義的綱領に比較して、組織の指導者の役割はそれが指導する階級を抑制し、前者を後者から區別しなければならぬといふ意味に解され得る、事實またプレハーレフによつてさう解された

如き用語をとつてゐる』、と。從つて我らの政治的任務の規定は、『ナロードナヤ・ウォリャ』[註三]の場合と全く同一であるといふのである。同志プレハーノフおよびその他のイスクラ派の人々は同志アキモフに反對して、彼れを日和見主義だと非難する。同志アクセリロードは、この論爭が社會民主黨内における今日のジャコバン黨員と今日のヂロンド黨員との對立關係を示してゐる（歴史の架空の氣紛れにおいてでなく、現實において）ことを見出さないのか？ 同志アクセリロードは、彼れが、（自己の犯した過失の結果）社會民主黨におけるヂロンド黨員の仲間に加はつたが故に、結局ジャコバン黨員について語りはじめたではないか？

註二、**アキモフ**。——別の名をマッハノウェッツとも云つた。ロシヤ社會民主勞働黨内における首尾一貫せる最極端なる日和見主義者。九十年代の末には『經濟主義』の支持者で、ベルンシュタインの理論を擁護した。彼れが姿を現はすと、いつでも、その『現實主義』と彼れのマルクス主義の『科學的なること』のために自由主義の側に非常な稱讚を博した。

註三、本書三二頁註を見よ。

例の二。同志ポサドウスキー[註四]は、『民主々義原則の絶對價値』に關する『根本問題』における『重大な意見の相違』について問題を提出してゐる。彼れはプレハーノフと一緒にその絶對價値を否認する。『中央派』または泥沼（エゴロフ）および反イスクラ派（ゴールドブラット）の指導者たちは斷

然これに反對して、プレハーノフにおいて『ブルジョア戰術の模倣』を認める――これこそ正統派とブルジョア的傾向との相互聯結に關する同志アクセルロードの思想であつて、ただ兩者の違ひは、この思想がアクセルロードの場合には宙に浮いてゐるに反して、ゴールドブラットの場合には一定の討論と結びついてゐるだけの事である。吾々は重ねて聞かう。この論爭もまた、我らの黨大會において、今日の社會民主黨内にジャコバン黨員とヂロント黨員との對立關係があつたことを明白に示してゐるといふことを、同志アクセルロードは見出さないのか?。同志アクセルロードかジャコバン黨員にかくもやつきに反對してゐるのは、彼れがヂロンド黨員の仲間に加はつたからではないのか?

註四、ポサドウスキー。――ロシヤ社會民主勞働黨第二回黨大會におけるシベリヤ同盟の代議員マンデルベルグの匿名。

例の三。規約第一條に關する論爭。『我らの運動におけるプロレタリア的傾向』を主張する者は誰れか? 勞働者は組織を恐れないこと、プロレタリアートは無政府狀態を是認しないこと、彼れ等は『組織せよ!』といふ勸告を尊重することを主張する者は誰れか? 日和見主義の流行病に罹かつたブルジョア・インテリゲンチャを警告する者は誰れか? 社會民主主義を奉ずるジャコバン黨員だ! さうして急進的知識階級を黨にひき入れる者は誰れか? 大學教授、學生、個人、急進的青年を配慮する者は誰れか? ヂロンド黨員アクセルロード、並びにヂロンド黨員リベール![註三四]

註五、リベール。——『同盟』(ロシヤおよびポーランドにおける全ユダヤ人勞働者同盟)の中央委員。知名のメニシェヴィキー。大戰中は『祖國擁護』の立場を代表した。一九一七年の、サヴェート第一回中央執行委員會の一員。十月革命以後はサヴェート政權の著明なる反對者となつた。

同志アクセルロードは、我が黨大會において、『勞働解放』團の多數派に對し公然と弘布された『日和見主義の誤まれる非難』を甚だ不器用に辯疏してゐる！ 彼れは自己の立場を辯疏しながら、ジャコバン主義、ブランキー主義等々に關する音のかすれたベルンシュタインの旋律を反復する事によつて、却つてこの非難を確定してゐる！ 彼れは、インテリゲンチャに對する氣遣から出たところの、黨大會における自分の演説を聞き取らせまいとして、急進的インテリゲンチャの危險を絶叫する。

『ジャコバン主義』等々のこれらの『戰慄すべき』言葉は日和見主義以外には絶對に何物をも言ひ表はしてゐない。自己の階級利害を認識せるプロレタリアートの組織と密接に結びついてゐるジャコバン黨員は、××的社會民主々義者である。大學教授や學生にあこがれ、プロレタリアートの獨裁に不安を抱き、民主々義的諸要求の絶對價値をさゝやくヂロンド黨員は日和見主義者である。政治鬪爭を陰謀にまで狹めるといふ思想が論壇において既に幾度か否認され、疾うに生活そのものによつて否認され且つ驅逐された今日、政治的大衆煽動の決定的重要性が確立され、且つ嘔吐を催すほど繰返されてゐる今日において、陰謀家の組織の危險を嗅ぎつけるものは日和見主義者ばかり

である。陰謀主義およびブランキー主義に對する恐怖の眞の原因は、實際運動において公然と姿を表はしたこれやあれやの特徴ではなく(たとへばベルンシュタインとその一味の者がそれを證明しようと永い間無益な努力を續けた如く)、むしろブルジョア知識階級のヂロンド黨的臆病がりであつて、その心理狀態は今日の社會民主々義者にかくもしば〳〵表はれてゐる。四十年代および六十年代におけるフランス陰謀家たちの戰術を警戒せよなどと、新しい言葉(その實もう百回となく言はれてゐる)を言はんとする、新『イスクラ』の發作的努力ほど滑稽なものはない。今日の社會民主主義のヂロンド黨員たちは、『イスクラ』の次ぎの號で、おそらく吾々を四十年代のフランス陰謀家たちのかゝる集りだと云ふであらう。この集りにとつては、勞働者大衆のなかへの政治的煽動の意義と、黨の側から階級へ働きかけるための基礎としての勞働者新聞の意味とは、既に使ひ古された常套語となつてゐたのだ、と。

新しい言葉の形式で絶えずイロハを繰返さうとする新『イスクラ』の努力は、しかしながら、決して偶然なのではなくて、アクセルロードとマルトフとが我が黨の日和見主義翼に加はつたとき、彼れ等がそこに身を置いた狀勢の必然的結果である、狀勢の責任である。黨大會の論爭の立場からも、また黨大會以後の黨の種々の流派や配分の立場からも維持され得ない、自己の立場に對する何らかの釋明を遠い過去のなかに見出すためには、日和見主義的な文句を繰返さなければならぬ、後

いゝ、いざりしなければならぬ。同志アクセリロードは、ジャコバン主義やブランキー主義に關するアキモフの深い智慧に加ふに、『經濟主義者』も、『政治家』も共に『一面的』で、あまり『夢中』になりすぎる等々といふアキモフの小言を以てする。すべてこれらの一面性を超克すべき要求を大言壯語する新『イスクラ』の以上の論題に關する崇高な考察を讀む時、人々は途方に暮れて問ふだらう、彼れ等はどこからさういふ要求を持つてくるのか？ どうして彼れ等はそんなことを考へ出すのか？ ロシヤ社會民主々義者の『經濟主義者』と『政治家』とへの分裂はもう疾つくに過去のことに屬してゐることを、一體誰れが知らぬのか？と。黨大會前の最近一二ケ年間における『イスクラ』に目を通して見よ、すると、『經濟主義』に對する闘爭が中止され、一九〇二年に早くも止まつてゐることを見るであらう。たとへば、一九〇三年七月發行第四三號のなかには、『經濟主義の時代』が『最終的に片付けられた』と論ぜられ、經濟主義は『最終的に葬られた』と言はれ、『政治家の成長』が公然たる隔世遺傳と見做されてゐることがわかるう。『イスクラ』の新編輯部は、一體どうしてこの最終的に葬られた分裂を取り容れることとなつたのか？ 吾々は、黨大會において、二年前『ラボーチェエ・ヂィエロ』が犯したかの誤謬のために、アキモフと論爭したのであるか？ もし吾々がさうしたのだとすれば、吾々は完全な白痴であらう。しかし、吾々がそんなことを取扱つたのではないこと、吾々が黨大會においてアキモフ派と論爭したのは、『ラボーチェエ・ヂィエロ』の舊い最

終的に葬られた誤謬のためではなくて、黨大會における彼れ等の考察と投票とが犯した新たな誤謬のためであつたことは、すべての人々の知るところである。如何なる誤謬が事實においてまだ殘つてゐるか、如何なる誤謬がまだ生命を保つてゐて、如何なる論爭が必要であるかを吾々が、判斷したのは、『ラボーチェエ・ディエロ』紙における彼れ等の態度によつてではなく、黨大會における彼れ等の態度によつてであつた。黨大會の當時には、經濟主義者と政治家との舊い分裂はもはや存在しなかつたが、しかし種々雜多な日和見主義的傾向は依然として存在してゐて、色々な問題に關する討論や投票となつて表はれ、結局『ボルシンストヴォ』（多數派）と『メニシンストヴォ』（少數派）とへの黨の新たな分裂に導びいた。[註六] 事實は、『イスクラ』の新編輯部が、容易に理解される理由から、この新たな分裂と我が黨內における今日の日和見主義との因果關係をまぎらかさうと努めたこと、そのために彼れ等は新たな分裂から舊い分裂の方へよろめき返ることを餘儀なくされたといふことである。新たな分裂の政治的原因を說明する（または相容れないといふ名目でこの原因を言*繕ふ）ことができないために、彼れ等は疾うの昔に片付いた舊い分裂について陳腐な事柄を繰返さゞるを得ないのである。新たな分裂の根底となつたものは、組織の原則（規約第一條）に關する論爭に端を發し、そして無政府主義者にふさわしい『實踐』となつて落着した、組織問題における意見の相違であることは、全世界の知るところである。經濟主義者と政治家との舊い分裂の根底をな

＊『イスクラ』第五四號所載の『經濟主義』に關するプレハーノフの論文を參照せよ。この論文の傍題には小さな誤植があつたやうに思はれる。『第二回黨大會に關する公然の思想』といふ代りに，『聯合大會に關する』とかまたは全く『補缺選擧』と讀むべきである。一定の事情の下では，個人的事柄において和解をとげることは極めて當を得てゐることもあるが，黨に關する種々の問題を塗抹することは（俗人の立場から

したものは、しかしながら、主として戰術上の問題に關する意見の相違であつた。

註六、多數派と少數派。――第二回黨大會のとき、レーニンの支持者は多數派（極めて僅かばかりの）をかち得、少數派はロシヤ社會民主々義の種々様々な日和見主義的雜種を構成した。それ以來，ロシヤ社會民主勞働黨は『多數派』（ボルシェヴィキー）と『少數派』（メニシェヴィキー）との二派に分裂した。

新『イスクラ』は、一層複雜した、たしかに當面緊急なる黨生活の諸問題から、疾うに解決がついてゐて、人爲的にむし返される諸問題の方へかういふ具合に退却して行くことを、『クヴォスチズム』（『尾つぽの政策』）と稱する外なき滑稽な議論を以て辯明しようとする。內容は形式よりも重要であり、綱領と戰術とは組織よりも重要であること、『組織の生活力は、そのものが運動のなかに取り入れる內容の廣さと意義と直接の關係にある』こと、中央集權主義は『問題それ自體でも『お守り』でもないこと等々は、同志アクセルロードのお蔭で、深淵なる『思想』の赤線の如く、新『イスクラ』のすべての論述に一貫してゐる。深淵にして偉大なる眞理！ 綱領は戰術よりも眞に重要であり、戰術は組織よりも重要である。イロハは文字論よりも重要であり、文字論は文章論よりも重要である、――だが、文章論の試驗に落第してゐながら、今日威張り散らして、自分たちが最下層の階級に居坐つてゐることを自慢する人々のことを、吾々はなんと考へたらいゝのか？ 同志アクセルロードは原則的な組織問題については日和見主義者の如く議論した（第

でなく，黨の立場からは）許すべからざることである如く，正統派から日和見主義へ滑り落ちたマルトフとアクセルロードとの新たな誤謬に關する問題と，今日綱領や戰術に關する多くの問題において，日和見主義から正統派へ立ち歸らうとしてゐるマルチノフやアキモフの舊い誤謬（新『イスクラ』以外には今日誰れもそんなことを考へてゐるものはない）に關する問題とを混同することは，許すべからざることである

一條)が、組織のなかでは無政府主義者の如く活動した(聯合大會)。――しかるにいま彼れが社會民主々義を深めてゐるとは、負け惜しみなんだ! 元來組織とは何か? 勿論、一の形式にすぎない。中央集權主義とは何か? 勿論、お守り札ではない。文章論とは何か? 勿論、文字論よりもはるかに重要ならざるもので、それは勿論文字論の諸要素を結合した一形式にすぎない。……『イスクラ』の新編輯部は勝ちほこつて問ふて曰く、『黨の活動の集中は、それが如何に完全なものに見えやうと、規約の採用によつてよりも、黨大會における黨の綱領の設定によつてはるかに促進されると吾々が言ふ場合、同志アレキサンドロフが吾々の主張を正しいとはしないのか?』と。吾々は、この典型的な發言が、社會民主々義は人類と同じく常に達し得られる目的を立てるといふ同志クリチェフスキー(註七)の有名な言葉と同じやうに、廣般にして堅實な歷史的認識に到達せんことを希望する。新『イスクラ』が賣り歩く深遠なる眞理も全く同一性質のものである。なぜ同志クリチェフスキーの發言は嘲笑されたか? それは、彼が戰術の問題における社會民主黨の或る一部のものゝ誤謬と、政治的任務を規定することの彼等の無能とを、彼れが哲學なりと自稱した下らぬ議論を以て釋明したからである。丁度同じやうに、新『イスクラ』は、組織問題における社會民主黨の或る一部のものゝ誤謬と、多數の同志を無政府主義的な饒舌家たらしめた知識階級的な動搖的態度とを――綱領は規約よりも重要であり、綱領問題は組織問題よりも重要であるといふ下らぬ議論を以て釋明してゐる

これこそ追隨主義ではないか？　これこそ人が落第したのを誇るに似てゐるではないか？

註七、クリチエフスキー。——ロシヤ社會民主黨內における『經濟主義』派の一指導者。『ラボーチェ・デーロ』(勞働者の事業)紙の編輯員。『ロシヤ社會民主々義者同盟』の一員。

綱領の採用は規約の採用よりもはるかに活動の集中を促進する。哲學と稱されるこの下らぬ議論は、如何にも社會民主々義よりもブルジョア的頽廢に近い急進的知識階級の臭ひがする！　集中といふ言葉は、この有名な文章のなかでは、言ふまでもなく象徵的意味に解されてゐる。この文章の筆者等は熟考することもできず、また熟考しようともしないにしろ、少なくとも彼らは、『ブンド派』と提携して綱領を採用することは、我らの共同の活動の集中に導かなかつたのみならず、吾々を分裂から免れさすことすらできなかつたといふ單純な事實を思ひ起すべきであつたのだ。綱領の問題および戰術の問題における統一は、しかし黨の合同と黨の活動の集中とのための必要なる條件ではあるが、なほ暫らくはその充分なる條件ではない。(天なる主よ！　すべての概念が討議しつくされた今日、なほ何んといふ平凡な眞理を穿鑿しなければならぬのだ)。その充分なる條件のためには、なほ組織の統一を必要とする。さうしてこの組織の統一は、或る程度に一家內の範圍を出たばかりの政黨においては、鞏固な規約なしには、多數派の下への少數派の從屬なしには、全體の下への部分の從屬なしには考へ得られないことである。吾々が綱領および戰術の根本問題において何らの統一

をも持たないかぎり、吾々はまだ分散と小集團との時代にゐることを實際卒直に明言し、合同する前に分裂しなければならぬことを卒直に聲明し、吾々は共同組織の諸形態のことを語らず、專ら日和見主義に對する綱領および戰術上の鬪爭に關する新たな（その當時の事實上新たな）諸問題のみを取扱つたのである。目下、この鬪爭は、吾々がみな主張する如く、既に充分なる統一を確保して、黨の綱領と戰術の問題に對する黨の決議のなかに規定されてゐるので、いまや吾々は次の一歩を進めなければならぬ。吾々は我らの一般的同意を得てこの一歩を進めた。すなはち、全團體を包括する一個の統一的組織の形態を確立したのである。しかるにいま、一部の者はこの形態を半ばを破壞することによつて、吾々を無政府主義的立場へ、無政府主義的言辭へ、黨の編輯部に代る小集團の再建へ後しざりさせたのだ。さうしていまや人々は、イロハは文章論の研究に比しより多く正しい表現法を促進すると云つて、この退步を辯解しようとしてゐる。

三年以前、戰術の問題に花を咲かせた追隨主義の哲學が、いま組織の問題に應用されて復活してゐるのだ。新編輯部の次の考察を分析して見やう。同志アレキサンドロフは曰く、『黨の社會主義的鬪爭方向は原則鬪爭によつてのみならず、一定の組織形態によつても實現されなければならぬ』編輯部は吾々に敎へて曰く、『原則鬪爭と組織形態とのこの對置は惡くはない。原則鬪爭は一の過程であるが、しかしながら組織形態は單に……形態たるにすぎず（誓つて言ふが、第五六號附錄第四頁

下から第一行にはその通り版になつて出てゐる―)、それは流動的な自づから發展する內容を、自づから展開される黨の實踐的活動を包むものでなければならぬ』と。これは、飛道具は飛道具であり、爆彈は爆彈であるといふ逸話そのまゝである。原則鬪爭は一の過程であるが、組織形態はしかしながら內容を包むところの形態たるにすぎない。問題は、我らの原則鬪爭が、より高き形態を以て、すべての人々に義務を課する黨の組織の形態を以て包まれてゐるか、それとも舊來の分散性と舊來の小集團精神の形態を以て包まれてゐるかどうかである。彼等は吾々をより高き形態からより原始的な形態の方へひき戾し、しかもこのことを、原則鬪爭は一の過程であるが、形態はしかしながら形態たるにすぎぬといふことによつて理由づけやうとしてゐる。丁度これと同じやうに、嘗つて同志クリチェフスキーは吾々を『計畫としての戰術』から『過程としての戰術』の方へひき戾したことがある。

これはアキモフ主義第二版ではないか? アキモフ主義第一版は、戰術上の問題における社會民主々義的知識階級の或る一部のものの落伍を、『プロレタリア鬪爭』の『より深い』內容に訴へ、プロレタリアートの自己訓練を主張することによつて理由づけた。アキモフ主義第二版は、組織の理論と實踐との問題における社會民主々義的知識階級の或る一部のものの落伍を、組織は單に形態たるにすぎず、要點はただプロレタリアートの自己訓練にあるといふ同じく深奥な理由をあげて理由づ

けてゐる。諸君の年若い兄弟のことを氣に病まれる先生諸君！　プロレタリアートは組織と規律とを怖れない、プロレタリアートは、その全生涯を通じて、インテリゲンチャ出の多數の人々よりもはるかに急進的に組織に訓練される、我らの綱領と我らの戰術とを多少とも認識したプロレタリアートなら、組織における落伍を、形態は內容ほど重要でないと主張することによつて理由づけやうとはせぬ。組織および規律の精神において、無政府主義的文句を拒否し嘲笑する精神において、自己訓練の缺けてゐるのは、プロレタリアートではなくて我が黨內における多數の知識階級である。アキモフ第一號が政治鬪爭に對する準備の缺除の問題でプロレタリアートを誹謗した如く、アキモフ第二號は、組織事業における準備が缺除してゐるといふ理由で、同じくプロレタリアートを誹謗する。階級意識ある社會民主々義者となつたプロレタリア、黨員たることを自覺してゐるプロレタリアは、嘗て戰術の問題において追隨主義を卸けたと同樣の侮蔑を以て、組織の問題における追隨主義を卸けてゐる。

最後に、新『イスクラ』の『實際家』の深奧なる評言を例に取らう。彼は論じて曰く、『正當に解すれば、革命家の活動を集合し集中するところの、中央集權的鬪爭組織の思想は、當然、かかる活動が存在する場合に初めて生活に實現されなければならぬ』（如何に新しく且つ賢明なことよ！）。『形態としての組織そのものは（謹聽々々！）、その內容をなす革命的事業の成長と同時に初めて成長

することができる』(この引用文における傍點は以下すべて筆者の附したものである)(第五七號)。これは、葬式の行列を眺めながら『どこまでもつづけ!』と叫んだ童話の主人公を思はせるではないか? 我が黨內には、なかんづく我らの活動の形態(すなはち組織)が內容よりも既に久しくおくれてゐる、しかもひどくおくれてゐることを理解せず、歩調を保て! だの、先頭に進むな! などとおくれてゐる者に對して絶叫することが——ただ黨內の愚物にのみ値ひすることを理解しない實際家は、たしかに唯の一人もゐなからう。たとへば、我が黨とユダヤ人の『同盟(ブンド)』とを比較して見よ。我が黨の活動の內容が*『同盟』のそれよりも無限に充實してゐて、多面的で、廣汎で、深刻であることについて少しの疑ひも存しない。理論上の熱情ははるかに大であり、綱領ははるかに進んでおり、勞働者大衆への働きかけは(單に組織された手工業者に對してのみならず)はるかに深刻にして廣汎であり、宣傳と煽動とははるかに多面的である。先端部と大衆とにおける政治的活動の脈搏ははるかに活潑にして、示威運動と總罷業の場合における民衆運動ははるかに大がかりであり、非プロレタリア諸層の間における活動ははるかに精力的である。そして『形態』は? 我らの活動の『形態』は『同盟』に比較すれば赦しがたきほどおくれてゐて、そのおくれ方は目立つて見え、『その黨を眞面目に見てゐる』者を赤面させるほどである。その內容に比較して活動組織のおくれてゐることは我らの弱點である、しかもそれは黨大會の疾うの以前にも、『組織委員會』(註八)の構成のずつと以前にも我らの弱點で

* 私は，我が黨の活動の內容が，黨大會の時，我が『少數者』(メニシンストヴ)のなかに數量的に多數の代表者を有する，かの反イスクラ主義者や泥沼に反對して，革命的社會民主主義の精神において闘ひ取られなければならなかつた(綱領其他において)ことを決して言つてゐるのではない。內容の問題において，たとへば，舊『イスクラ』の第六號と新『イラスク』(第52—63號)の第十二號とを比較することははるかに興味のあることである。しかし，これは他日の機會にゆづらう。

あつた。形態の未發達と不堅實とは內容の發達においてさらに重大な一歩をなさしめず、恥づべき停滯を生み、力の浪費に導びき、言行の不一致を招いてゐる。世をあげて正にこの不一致の下に惱んでゐるのだ――そこへアクセルロードと新『イスクラ』の『實際家』がその意味深奧な說教を携へてやつてくる。『形態は當然成長するに相違ないが、しかしそれはただ內容と同時に成長するに相違ない』。

註八　『組織委員會』。――第二回黨大會を召集するためのイスクラ組織委員會。

かくて組織問題第一項における小さな誤謬も、その虛妄を深め、その日和見主義的文句を哲學的に基礎づけ始めると、かういふ結果をもたらしてくる。除々に、廻り道を前進せよ！　吾々は嘗てこの調を戰術の問題への應用において聞き、いままた吾々はそれを組織の問題への應用において聞く。組織問題における追隨主義は、無政府主義的個人主義者たちが、自己の偏流を種々の意見から成る一體系にまで、特殊な原則的意見の相違にまで高め始める（初めはおそらくほんの偶然に）とき、彼等の心理から生まれた當然の且つ不可避的なる所產である。吾々は嘗て聯合大會のときこの無政府主義の端初を認め、いままた吾々は新『イスクラ』のなかにそれを一の體系にまで高めんとする試みを見る。この試みは、社會民主黨に加入してゐるブルジョア知識階級の立場と、自己の階級利害を認識したプロレタリートとの間の相違について、既に黨大會のとき表明された議論を明かに裏書するものである。たとへば新『イスクラ』の同じ『實際家』――彼等の深遠なる學識を吾々

は既によく知つてゐる――は、私が、黨を、支配人としての中央委員會に管理される『大工場』の如く考へてゐると云つて私を非難する（第五七號附錄）。これらの『實際家』は、彼等の口走る怖ろしい言葉が、プロレタリアートの組織の實踐にも理論にも通じてゐないブルジョア知識階級の心理をそれとなく漏らしてゐることに感づかない。なかんづく、多くの人々には單に怪物としか見えない工場なるものは、プロレタリアートを結束させ訓練し、彼等に組織をもたらし、かくして勞働し搾取されるその他のあらゆる人民層の先頭に立つことを可能ならしめるところの、資本制的協働の最高形態を提供してゐる。資本主義によつて訓練されたプロレタリアートのイデオロギーとしてのマルクス主義は、動搖する知識階級に、工場の搾取的方面（餓死の不定に基づく規律）とその組織的方面（技術的に高度に發達せる生產の諸關係によつて結合された共同勞働に基づく規律）とを區別すべきことを敎へたし、今も尙ほ敎へてゐる。ブルジョア知識階級には理解させるに骨の折れる規律と組織とは、正しくこの工場『學校』のおかげで、プロレタリアートには特に容易に修得されるのである。この學校を死ぬほど怖れ、その組織的意義を絕對に理解し得ないことは、なかんづく、小ブルジョア的生存諸條件を反映する思惟方法の特徵を示すものであり、またドイツの社會民主主義者たちが貴族的無政府主義と名づけるところの、かの無政府主義の變種の特徵を示すものである。この貴族的無政府主義は特にロシャの虛無主義者たちに特有なものである。黨の組織は彼等には怪

物の如き『工場』と見え、部分の全體の下への從屬、小數者の多數者の下への從屬は彼等には『奴隷化』のやうに見え（問題のアクセルロードの論文を參照せよ）、中央部の指導の下における分業は、彼等の間に、人間を『齒車や螺旋』となすといふ悲喜劇的悲鳴をあげさせ（特にこの場合、編輯員と寄稿家とがさういふ悲鳴をあげた）、黨の組織規約の列記は輕蔑の澁面を買ひ、規約がなくても充分よくやつてゆけるといふ下らぬ評言（『形式主義者』に呈する）を呼んでゐる。

これは信ずべからざることであるが、しかし事實である。そもそもこの說論なるものは、同志マルトフが『イスクラ』第五八號のなかで私に持ち出したもので、彼は、自身の言葉を保證するために、『一同志への手紙』のなかから私自身の言葉を引合に出してゐる。黨の建設時代に、四分五裂の未組織時代、小集團の時代の實例を以つて、小集團精神と無秩序狀態との維持と稱讃とを辯明せんとするのは、これこそ貴族的無政府主義ではないか？　追隨主義ではないか？

吾々は以前にはなぜ規約を必要としなかつたか？　それは、黨が、相互の間に何ら組織的連絡を有しなかつた個々の小集團から成つてゐたからである。一の小集團から他の集團の方へ移ることは單に當の個人の『善良なる意志』に關する事柄にすぎず、何ら全體の意志を一定の形に代表したものではなかつた。小集團內部の論爭は規約に從つて決定されたのではなく、『鬪爭と脫退の嚇しとによつて』決定されたのである。私は、一般的には幾多の小集團の經驗、特殊的には組織に關する吾

々自身の六人組の經驗に基づいて『一同志への手紙』のなかにかういふ風に私の意見を述べておいた。小集團の時代には、かくの如き現象は當然のことで、止むを得ないことであつた。しかし、誰れもこの現象を稱讚したり、それを一の理想と思惟しようなどと考へたものは居なかつた。人々はみな分散の狀態を歎き、みなその狀態に惱まされて、四分五裂の小集團を一の緊密な黨組織に融合せんことを望んだ。しかるにいま、この融合が實現されるに及んで、吾々は後ろへ引きずり戻され、——より高き組織說の形で——無政府主義的言辭を以て饗應されてゐるのだ！　小集團の長袖と嫖天下とに慣れた人々には、この形式的規約は、窮屈で、邪魔で、煩はしくて、卑俗で、官僚的で、隸屬的で、原則的鬪爭の自由なる『進行』を阻害するものと見えるのであらう。貴族的無政府主義は、この形式的規約が必要であること、それによつてこそ、狹い小集團の結合が廣汎な黨の形成に代へられ得ることを理解しない。小集團內部の、または小集團相互間の結合は形式的に定めることを要せず、またさうすることもできなかつた。なぜなら、かういふ結合は個人的友情か、または盲目的な、はつきりした理由のない『信賴』に基づいてゐたからである。黨の結合はそのどちらにも基礎を置くことはできず、また置いてはならぬ。それは、なかんづく、形式的な、『官僚的に』（訓練のない知識階級の立場から見て）定められた規約に基礎を置かなければならない。かかる規約を嚴守することのみが、小集團の氣紛れと、我意と、原則的鬪爭の自由なる進行と稱される千篇一律

主義の方法とから吾々を救ひ出す。

新『イスクラ』の編輯部は、『信頼は美妙な事柄であつて、それは心情や頭腦に叩き込むことはできぬ』(第五六號附錄)といふ教訓的言葉を以て、アレキサンドロフに食つてかかつてゐる。しかし、編輯部は、信頼の範疇、飾りけのない信頼の範疇をかく力說することこそ、もう一度、彼等の貴族的無政府主義と組織上の追隨主義とを示したものであることを悟らない。私が單に一小集團の一員、『イスクラ』の編輯部または組織における六名の委員の一人であつた頃には、私は、云はば、未知の某と事を共にするの不快を釋明し、單に無責任な理由の明かでない信頼に賴るべき權利を有してゐた。しかし、私が黨員となつたとき、私は單に漠然たる不信任のみを楯に自己の行動を申開きすべき何らの權利をも有してゐない。なぜなら、さうすれば、舊い小集團の氣紛れと我意とに門戸を開くことになるであらうから。私は、自分の『信任』または『不信任』を、形式的論據をあげて證明すべき義務がある。すなはち、我らの綱領、我らの戰術、または我らの規約中の形式的に定められた何かの規定をあげてあかしを立つべき義務がある。私は、單に『私は信任する』とか『私は信任しない』とかいふ如き單純な事柄にとどまつてはならぬ。むしろ私は、自分の決議について、または一般に黨の各部門のあらゆる決議について、黨全體の前にその理由を說明しなければならぬ。私は、自分の『不信任』を表明し、この不信任から生ずる意見や希望を通すために、形式的に定められた道

を守るべき義務がある。吾々は既に小集團の理由なき『信任』の立場を脫して、信任を表明し且つ證明するのに責任のある形式的に定められた方法の墨守を要求するところの、黨の立場にまで高上したのである。——しかるに編輯部は吾々を後ろの方へ引きずり戾して、自身等の追隨主義を新しい組織說であると言つてゐる。

我らの謂ゆる黨の編輯部が、編輯部のなかに一の代表權を要求した、かの著述家團をなんと評してゐるかを見るがいゝ。『吾々は規律を憎みもせず、それに不平を唱へもしないだらう』と。常にあらゆる規律を蔑んじてきた貴族的無政府主義者たちは吾々に敎へてゐる、『吾々は、その團體が眞面目なものであれば、それと「和解」（原文のまゝ）もしようし、あるひはその要求を一笑に付することもあらう』。

俗惡なる『工場形式主義』に對し茲に如何に氣品高き貴族氣風が示されてゐるかを思へ！　しかし、實は、茲に示されてゐるものは、編輯部が黨に呈するところの、小集團時代の紛飾された慣用語にすぎないのだ。といふのは、編輯部は、彼等が黨の一組織をなすのではなく、舊來の小團體のかたわれであることを自覺してゐるからである。かういふ位置を穩密の裡にくらますことは、不可避的に、言葉の上では既にパルサイ徒的に時代遲れものと宣言された內的崩壞を、社會民主々義的組織の原則にまで高めるところの、深奧な無政府主義の思想を誘致する。上級および下級の黨の部

門並びに事務局の何らの組織階梯 "Stufenleiter" も要らぬ——貴族的無政府主義には、かくの如き組織階梯は官廳の馬鹿々々しい手續に見え、審級順序の考案に見える（アクセルロードの論文を參照せよ）。部分は全體に從位することを要せぬ。『合同』または分裂するための、黨の方法の形式的、『官僚主義的』定義は要らぬ。舊來の小集團的混亂が、『眞に社會民主々義的な』組織方法に關する言葉で淸められればいゝのだ。

茲に、『工場』の學校を卒業したプロレタリアートが、無政府主義的個人主義に訓戒を施すことができ、まだ施さなければならぬ個所がある。階級意識ある勞働者は、彼等が知識階級をかくも怖れ憚かつた幼稚園から、もう疾つくに出てきてゐる。階級意識ある勞働者は、彼等が社會民主黨內の知識階級の間に見出すところの、自身たちよりも豐富な知識や、はるかに廣い政治的眼界を尊重すべきことを知つてゐる。しかし、吾等の間に一の眞實なる政黨が成立するに伴れて、階級意識ある勞働者は、プロレタリア軍の戰士の心理を、無政府主義的文句を見せびらかすブルジョア知識階級の心理から區別することを學び、一黨員たるの義務の遂行は單に平黨員に要求されるばかりでなく、『上の人々』にも要求さるべきことを學び、組織問題における追隨主義を、彼等が嘗て戰術の問題における追隨主義を迎へたと同じ輕侮の念を以て迎へることを學ばなければならぬ。

組織問題における新『イスクラ』の最近の特徵、すなはち集權主義に對する自治主義の擁護は、

ヂロンド主義および貴族的無政府主義と不可分の關係にある。なかんづく、官僚主義と專制主義に關する哀哭、『新イスクラ派に對する不當なる侮蔑』(新イスクラ派は黨大會で自治主義を擁護した)に關する慟叫、『斷乎たる服從』の要求に關する滑稽な叫び聲、『尊大』に關するせつない不平等々は、かくの如き原則的意味(とにかくそれらのものに何かの意味があるとして)*を有してゐる。あらゆる政黨の日和見主義派は、綱領についても、戰術または組織についても、常に、おくれた狀勢を擁護し是認しようとする。新『イスクラ』による組織の遲滯(追隨主義)に對する擁護は、自治主義の擁護と密接に結びついてゐる。もつとも、自治主義なるものは、一般的に論ずれば、舊『イスクラ』の三年間に亘る主張によつて既にその信用を失くしたので、新『イスクラ』は公然とそれに贊成の意を表することをなほ憚かつてゐる。新『イスクラ』は中央集權主義に同感であることを吾々に保證してはゐるが、しかしこのことは、中央集權主義なる言葉を傍點を附して書くことによつて示されてゐるにすぎぬ。實際、『新イスクラ』が『眞に社會民主々義的な』(そして無政府主義的ならざる?)エセ中央集權主義の『諸原則』に少しでも批判的に觸れるならば、それは一步每に自治主義の立場を暴露するであらう。アクセルロードおよびマルトフが、組織の問題において、アキモフの方へ行つたことは、今日では何人にも明かなことではないか? 彼等は、みづから、『新イスクラ派に對する不當なる輕視』に關する有名な言葉のなかで、このことを堂々と宣告したではないか?アキモフと

* 玆ではこれらの哀哭の『追加的意味』を不問に附しておく。

彼の僚友とは我らの黨大會において自治主義を擁護したではないか？

殊に、マルトフとアクセルロードとは、聯合大會のとき、自治主義（無政府主義ではないまでも）を擁護したのである。當時、彼等は、部分は全體に從位すべきではないこと、部分は全體との關係を規定するに當つて自治的であるべきこと、これらの關係を規定した國外聯合の規約は、黨の多數派の意志、および黨の中央部の意志に反して効力を有すべきことを、滑稽な位い熱心に證明しようとしたのである。同志マルトフが、新『イスクラ』（第六〇號）の紙上で、中央委員會を通して黨員を地方委員會に入れるといふ問題を取扱つたなかに、公然と擁護してゐるものこそ即ち自治主義である。私は、同志マルトフが嘗て聯合大會に於て自治主義を擁護し、今また新『イスクラ』*のなかでそれを擁護してゐる如き、かの愚かな詭辯について語りたくはない。——この場合、吾々にとつて大切なことは、中央集權主義に反對して自治主義を擁護せんとする疑ひなき傾向を、組織問題における日和見主義を表はす原則的特徴として摘出することである。

新『イスクラ』（第五三號）にあつて、官僚主義の概念に對する分析のほとんど唯一の試みをなすものは、『形式上民主々義的な原則』と『形式上官僚主義的な原則』（傍點は著書）との對比である。この對比（それは、不幸にも、新イスクラ派の參照と同じくほとんど說明されてゐない）はそのなかに一粒の眞理を含んでゐる。官僚主義對民主々義は中央集權主義對自治主義であり、革命的社會

* 同志マルトフは色々な規約箇條を審査してゐるけれども，部分と全體との關係を取扱つた箇條だけは見落してゐる。中央委員會は『黨の諸勢力を配分する』（第六條）。黨員を一の委員會から他の委員會へ移動せずして，諸々の勢力が配分され得るであらうか。こんな分り切つた眞理をくどくどしく述べ立てることは，たしかに恥づべきことである。

民主黨の組織原則に對する社會民主黨内における日和見主義者の組織原則〔の問題〕である。後者は下から上へ進まうとし、且つそのために、可能なるあらゆる場合に、可能なるかぎり、ほとんど無政府主義に近い（あまり熱中しすぎる場合には）自治主義、民主々義を擁護する。前者は上から出發しようと努め、且つ部分に關する中央部の權利と權限との擴大を主張する。分散と小集團の時代において、革命的社會民主黨がその運動の組織上の出發點たらしめんとした、かくの如き先端部は、その活動とその首尾一貫せる革命的態度とのために、〔當時〕最も有力であつた小集團の一つ（吾々の場合には――『イスクラ』の組織）でなければならなかつた。黨の事實上の統一が更生され、時代おくれの小集團がこの統一のなかに解消された時代においては、黨の最高機關としての黨大會が無條件にかくの如き先端部でなければならぬ。黨大會は種々の活動的組織體のあらゆる代表者を可能なるかぎり結合して、中央の諸機關（大抵の場合、黨のおくれた分子よりもその進歩せる分子にはるかに適し、且つ日和見主義派よりも革命派にはるかに適した人々から成るところの）を設け、それらのものを次期大會に至るまでの先端部たらしめるのである。社會民主々義を奉ずるヨーロッパ人の場合は尠なくともさうであつた。もつとも、その進行は徐々にして、困難と闘爭と確執とを免れなかつたのではあるが。さうして、この無政府主義者には原則的に惡まれる風習が、今また、社會民主々義を奉するアジア人の間に廣まり始めてゐる。

私が以上に指摘したところの、組織問題における日和見主義の原則的特徴（自治主義、知識階級的または貴族的無政府主義、『追隨主義』およびヂロンド主義）が、革命派と日和見主義派とに分裂してゐる（そしてどこにかゝる分裂の存しない處があるか？）全世界のあらゆる社會民主黨のなかに、とり〴〵に形を變へて認められるといふことを確めることは、極めて興味のあることである。なかんづく、最近、ザクセン第二十選擧區における選擧の敗北（謂ゆるゲェーレ事件*）が、黨組織の諸原則を日程にのぼせたとき、この現象はドイツ社會民主黨のなかに特に明瞭に現れたのである。ドイツの日和見主義者たちの熱心さは、右の事件をきつかけに、原則的問題を提出すべく特に發揮されたのである。ゲェーレ（前身は牧師、可なり有名な著書『三ケ月間の工場勞働者』の著書、且つドレスデン黨大會の『英雄』中の一人）は自ら公言せる日和見主義者であつて、首尾一貫せるドイツの日和見主義者の機關紙『社會主義月報』は直ちに彼を掩護したのである。

綱領における日和見主義は、當然、戰術における日和見主義、および組織問題における日和見主義と結びついてゐる。同志ウォルフガング・ハイネはこの『新しい』立場の説明を引受けた。社會民主黨に加入して、日和見主義的思考癖を持ち込んだ、この典型的知識階級の面相を讀者に示すためには、同志ウォルフガング・ハイネは、ドイツの同志アキモフほどの人物でもなく、またドイツの同志エゴロフ（註九）といくらも違はぬ人物であると言ふだけで充分であらう。

* ゲェーレは，1903年6月16日，ザクセン第十五選擧區から國會に選出されたのであつたが，ドレスデン黨大會以後，彼はその職を辭してゐたのである。ロゼノフの死後空いてゐた第二〇選擧區の選擧人たちは，ゲーレに新めてその立候補を乞はんとした。黨の指導部およびザクセンの煽動委員會はこれに反對した。しかし，彼等は形式上ゲェー

註九。エゴロフ、――第二回黨大會召集のための組織委員會の一員。彼は社會民主々義團體『南部勞働者』（Juschnij Rabotschij）の代表者であつた。この團體は、エカテリノスラフで發行されてゐた社會民主々義新聞『南部勞働者』の名稱にちなんでさう呼ばれてゐた。第二回黨大會召集のための組織委員會の構成に非常に努力した。黨大會以後彼は姿を消した。

同志ウォルフガング・ハイネは、新『イスクラ』紙上の同志アクセルロードに劣らぬ派手さを以て、『社會主義月報』紙上に活躍を始めた。その論文の標題『ゲェーレ事件に對する民主々義的覺書』とは如何にも氣取つた書き振りである！　その內容も同じく人を壓するものがある。同志ウォルフガング・ハイネは『選擧區の自治の侵害』を罵り、『民主々義の原則』を擁護し、國民による自由な代議士選擧に對する『任命された官廳』（卽ち黨の中央指導部）の干渉に異議を申し立てゝゐる。同志ハイネは吾々に訓戒して曰く、これは偶然の事件ではなく、『黨內の官僚主義化および中央集權主義化への一般的傾向』である。この傾向は既に以前から認められてゐたが、いまや殊に危險となつてゐる。吾々は『黨の地方組織體がそのものの生活の擔當者であることを原則上承認』しなければならぬ（同志マルトフの小冊子『もう一度少數派へ』からの剽竊）。『一切の重要な政治的決議が中央部から發する』ことに慣れてはならぬ。黨が『生活との結びつきを失つた理論偏重の政治』（「生活はその責務を果すであらう」と言つた、黨大會の席上における同志マルトフの演說から借用したも

レの立候補を禁止すべき權利を有しなかつたので，ゲェーレにその立候補を思ひ止まらせることにした。選擧の結果は社會民主黨員が敗北した。

の）に陷らぬやう注意する必要がある。』……事の根本にふれ』と同志ウォルフガング・ハイネはさらにその論據を深めて曰く、『且つあらゆる場合と同じくこの場合にも強く作用した個人的相違を度外視するならば、修正主義者に對するこの激昂のなかには、たしかに局外者に對する當局者の不信任が窺はれる』（ヴェー・ハイネは明かに『戒嚴狀態』に關するパンフレットを讀んでゐない。それ故に彼はイギリス特有の語法たる『局外者』などと言つてゐるのだ）。『傳統對異例、非人格的組織對個人』（聯合大會における個人的創意の抑壓に關するアクセルロードの決議を見よ）、『要するにそれは、當初から黨の官僚主義化または中央集權化の傾向として指摘されてきた同一の傾向である。』『規律』なる概念は、同志ヴェー・ハイネに、同志アクセルロードと同じく高貴なる憤慨を起させる。彼は論じて曰く、『……修正主義者たちに規律が缺けてゐると言はれる理由は、彼等が『社會主義月報』に物を書いたからである。すなはち、黨の統制に從はぬが故に社會民主々義雜誌たるの性質を剝奪されやうとした一機關紙に物を書いたからである。「社會民主々義」なる概念をかくの如く狹めんとする計畫、無條件なる自由が行はるべき精神的創作の領域（精神的鬪爭は一の過程であり、組織形態は單に形態たるにすぎぬといふことを記憶せよ）における規律のかくの如き强調こそは、官僚主義化の傾向、個性抑壓の傾向を示すものである』。ヴェー・ハイネは、ありとあらゆる口調を以つて、出來るだけ集中化された、すべてを包括する一個の大組織、一個の戰術、一個の理論を作

らんとするこの悪むべき傾向を永々と呪ひ、『無條件服從』の要求、『盲目的從屬』の要求を非難し、『單一的中央集權主義』等々、等々を非難する、何から何までアクセルロード式に。

ヴェー・ハイネによつて切つて落された討論は擴大した。そしてこの討論は、ドイツの黨においては、補缺選擧に關する如何なる不平によつてもにごされず、またドイツのアキモフたちが黨大會のみならず、彼れ等自身の機關紙のなかに絶えず顏を出してゐるので、この討論は、直ちに、組織問題における正統派と修正主義との原則的傾向に關する分析へと進んで行つた。そこでカール・カウツキーは革命的傾向(勿論この傾向は、我が國におけると同じく、『獨裁主義』、『糾問主義』、その他恐るべき事柄として非難されてゐる)の代表者として出場した(『選擧區と黨』、「ノイエ・ツァイト」一九〇四年第二八號、三六頁)。カウツキーは、ヴエー・ハイネの論文が、『修正主義的傾向全體の思想進行を表はしてゐる』と宣言した。ドイツのみならず、フランスおよびイタリアにおいても、日和見主義者は自治主義に熱中し、黨の規律の緩和と廢止とに熱中して、到る處で、彼等の傾向を、組織の解體、『民主主義的原則』の無政府主義への墮落に導びいてゐる。カール・カウツキーは組織問題について日和見主義者たちに教へて言ふ、『民主主義とは決して支配なき狀態でも、無政府狀態でもなく、それはむしろ國民の自稱使用人が事實は彼等の支配者となつてゐる、その他の支配形態とは反對に、國民によつて任命された人々に對する民衆の支配のことである』。カール・カウツキーは、諸國にお

ける日和見主義的自治主義の解黨的役割を仔細に追求して、なかんづく『多量のブルジョア的要素』*が社會民主黨に加はつてくることは、日和見主義、自治主義、および規律破壞の傾向を强めることを指摘し、序でに『組織なるものはプロレタリアートを解放せんとする武器であり、プロレタリアート特有の階級闘爭の武器である』ことを注意してゐる。

日和見主義は、ドイツにおいては、フランスやイタリアにおけるほど有力ではない。『自治主義的傾向は、我が國においては、獨裁官と大糾門官、破門**と異端狩りに對する多かれ少なかれ感傷的な攻撃、限りなき不平――これは、もし反對の側がそれに答へるとすれば、限りなき悶着をひき起すであらう――以上にはまた進展してゐない』。

黨內における日和見主義がドイツほどに强くないロシヤにおいて、自治主義的傾向が思想よりもより多く『感傷的攻撃』と不平とを喚起したことに何んの不思議もない。

カウツキーが、『すべての國の修正主義は、その『多樣性』と雜色とにも拘らず、おそらくその他の如何なる問題においても、組織問題におけるほど統一的ではない』といふ結論に達したのに何んの不思議もない。カー・カウツキーは、この領域における正統派と修正主義との根本傾向を、官僚主義對民主主義といふ『嚇の文句』を用ひて說明してゐる。カー・カウツキーは論じて曰く、『人々は、黨の指導部が地方選擧區による國會議員の選出を支配すべき權利に反對を唱へてゐる。彼等は曰く、

* カウツキーは一例としてジョーレスをあげてゐる。これらの人々が日和見主義に墜れば墜るほど、彼等には黨の規律は『自由人格の度しがたき拘束』のやうに見えるのに相違ない

** 破門とはロシヤ語の『嚴戒狀態』または『例外法』と同一意味のドイツ語である。これはドイツの日和見主義者たちの『嚇し文句』である。

「かくの如きは、民主主義的原則に對する最も恥づべき侵害を含んでゐる。しかして民主主義的原則とは、一切の政治的行動が下から大衆の獨立性を通して行はるべきことを言ふもので、上から官僚主義的方法によつて行はるべきことを意味するものではない」と……しかし、苟しくも民主主義的原則なるものがあるとすれば、それは多數が小數に對する優越權を有することであつて、その反對ではない』。……如何なる選擧區の國會議員の選出と雖も、黨の全體にとつては重要な問題であつて、それはまた、たとへ黨の信頼する人物によつて行はれるにしろ、候補者の決定を左右しなければならぬ。『これがあまりに「官僚主義的」に、またはあまりに「中央集權的」に見える人は、候補者を全黨員の直接投票によつて定むべしと提案するもよからう。さうすることを可能だと思はぬ人は、この行動が、全黨員に屬するその他の幾多の行動と同じく、一個または數多の黨機關にとつて行はれるとき、民主主義が缺けてゐるなどと不平を言つてはならぬ』。ドイツの政黨の『習慣法』に從ひ、個々の選擧區は、既に以前においてさへ、新たな候補者の選定については、黨の首腦部または地方の幹部と『友誼的に』協議をどけてゐた。『しかるにその政黨は、この暗默の習慣法で事足りるにはあまりに大きくなりすぎた。この習慣法は、それが自明のこととして承認されなくなり、その規定、然りその存在さへも疑はれるに及んで、一の法ではなくなつてゐる。そこでそれは明文に定められ、法文に編纂され、一の「正確なる規約の確立*」および「はるかにひきしまつた組織」にまで導かれ

なければならぬ』。

かくの如く吾々は、違つた環境の下に、組織問題における黨の日和見主義派と革命派との間の同一の闘爭を見、中央*集權主義と自治主義、民主主義と『官僚主義』との間の同一の確執を見、組織および規律の嚴格さを緩和せんとする同一の傾向と、それを强めんとする同一の傾向とを見、動搖的知識階級の心理狀態と確乎たるプロレタリアートの心理狀態とを見、知識階級の個人主義とプロレタリアートの結束性とを見る。この確執に對し、ブルジョア民主主義が如何なる態度を執つたか を尋ねて見やう――ブルジョア民主主義と云つても、『氣紛れの』歴史が嘗て同志アクセルロードに默示しようとした如き民主主義ではなく、實際ドイツにおいて、我が國の『オスウォボシデニィエ』(註一〇)の先生方に劣らぬほど學識もあり、且つ鋭い觀察をする代表者たちを有してゐる眞實の民主主義をいふのである。ドイツのブルジョア民主主義は、直ちに、この新らしい論爭のために聞き耳を立て、――ロシヤのブルジョア民主主義と同じく、またはあらゆる國々と同じく――社會民主黨の日和見主義派に贊同した。ドイツの取引所資本の有名なる機關紙『フランクフルト・ツァイツング』は堂々たる社説を掲げ(一九〇四年四月七日第九七號夕刊)、アクセルロードを恥ぢげもなく剽竊することが正に新ドイツ新聞界の一の病氣となつてゐることを示してゐる。フランクルト取引所の嚴格な民主主義先生方は、社會民主黨内における『專制主義』、『黨の獨裁主義』、『黨主權の專制支配』、修

* 暗默の裡に承認された習慣法に代ふるに形式的に定められた規約法を以つてすべしといふカウツキーのこの注意書を，一般的には我が，黨が特殊的には編輯部が黨大會以來經てきたかの『變遷』の全部と比較することは極めて有益なことである。

正主義全體を懲罰せんとする『破門』、『盲目的服從』の要求、黨員を『政治的死骸』(ぜんまいや齒車よりもまだ扱ひ易い！)に變へんとすること、これらのことを嚴しく非難してゐる。取引所の騎士たちは社會民主黨の反民主主義的習慣を目擊して激昂する。『すべての個人的特性、すべての個性は迫害されなければならぬ。なぜなら、それは、シンダーマンが公然と明言した如く、フランスの狀態、すなはちジョーレス主義とミルラン主義とをもたらす憂ひがあるから』。このシンダーマンとは、ザクセン社會民主黨員の黨大會の席上でこの問題について報告した本人である。

註一〇、『オスウォボシデニエ』(解放)——。一九〇二年から一九〇五まで、以前のマルクス主義者ストルーヴェの指導の下に、ゼムストヴォ會員、立憲君主制論者、およびロシヤのブルジョア自由主義インテルゲンチャ階級の機關紙として、スツットガルトにおいて發行されてゐた雜誌。

# 二つの戰術

（一九〇五年二月一日、『ウペリョード』第六號）

ロシアにおける勞働者の大衆運動の開始以來、すなはち、ほぼ十年この方、社會民主主義者の間には早くも戰術の問題について深刻な意見の相違が存在してゐる。周知の通り、この種の意見の相違は、なかんづく、九十年代の後半期において經濟主義の傾向を生み出し、ついで黨の日和見主義派（ラボーチェエ・ディエロ）と革命派（舊『イスクラ』）とへの分裂を招來した。だが、ロシアの社會民主主義的日和見主義は、それ獨特の特徴のために、西ヨーロッパの日和見主義とは區別される。それは、ベルンシュタイン流の合言葉にも、一個純粹なる勞働者運動の直接の結果や形態にも熱狂したところの、黨の知識階級派の立場、いやむしろ彼等に何ら獨立の立場のなかつたことを極めて明瞭に反映してゐた。この熱狂は、あまねく、自由主義の方へ轉じた合法的マルクス主義者の流行病的裏切に導びき、我が日和見主義者諸君に『クヴォスティスト』（尻尾にぶら下がつてゐる者——追隨主義者）の綽名をもたらしたところの、社會民主主義者に依る『過程としての戰術』といふ有名な理論の創造に導びいた。彼等は徒らに事件の後を追ひ、一の極端から他の極端に陷り、いつの場合にも××的プロレタリアートの跳躍と彼等の力に對する信念とを輕視して、何はさておき

プロレタリアートの自主的活動に訴へることに依つて多くは巧みに言ひ抜けてゐた。これは妙なことだが、しかしどこまでも事實なのだ。『ラボーチェエ・ディエロ』の同人たちほど勞働者の自主的活動について多く語り、彼等ほどその說教に依つてこの自主的活動をひき下げ、抑制し、墮落させた者はなかつた。『勞働者大衆の活動の高まりなどとあまり言ふな』と、階級意識ある勞働者は、熱心ではあつたが間の抜けた彼等の忠告者に話しかけた。『吾々は諸君が思つてゐるよりもはるかに多くの活動を行つてゐる、吾々は、公然たる×××において、何ら手近な効果を約束しない要求をすら支持することができる。諸君ら自身にこそ活動力が缺けてゐるのだから、俺たちの活動を高めるなどとは君らの柄ではないのだ。オイ先生！『端初的なもの』をさうさう崇拜せずと、君らの活動を高めることをもつと考へ給へ』。吾々は日和見主義的知識階級に對する××的勞働者の關係をかういふ具合に特徴づけざるを得なかつた。(『何を爲すべきか?』參照。)

新『イスクラ』の『ラボーチェエ・ディエロ』に對する二歩退却は、この關係に新たな生命を授けた。イスクラの紙面には、同様の呪ふべき誓言によつて粉飾された追隨主義の說教が再び唱へ出された。『諸君！　私はプロレタリアートの自主的活動を信じ、これを奉ずるものである！』と。プロレタリアートの自主的活動の名において、アクセリロードとマルチノフ、マルトフとリーベル(ブンド派)等は、黨大會の時、いかなる組織にも所屬することなくして、黨員として認めらるべき大

學教授や學生の權利を擁護した。プロレタリアートの自由的活動の名において、組織の解體を理由づけ、知識階級＝無政府主義を讃美したところの『過程としての組織』といふ理論が發見された。プロレタリアートの自主的活動の名において、何らの恐慌をも惹起することなき平和な公示のための、三級選擧によつて淨化された勞働者代議員とゼームスドヴォ會員との協定として、『示威運動のより高き定型』といふ同じく有名な理論が發見された。プロレタリアートの自主的活動の名において××××の思想は歪められ、俗惡化され、退化され、曲解された。

そのものの實際的重要性を顧みて、私は右の最後の問題の上に讀者の注意を向けたい。勞働者運動の發展は、新『イスクラ』の賢人たちの嘘言に嚴しい制裁を加へた。『各代議士の私宅に勞働者の種々の聲明書を郵送し、その充分な部數を議場に撒布すること』を、『プロレタリアートの階級意識と自主的活動との計畫的發展の過程』の名において、示威運動のより高級なる定型として推奬した、彼等の最初の文書がロシアに配布されるや否や、そして彼等の第二の文書――現下の『歷史的瞬間においては、政治場裡は組織されたブルジョアジーと官僚との爭鬪の占むる（！）ところであり、』且つ『あらゆる（謹聽！　々々！）、革命運動の客觀的意味は下の方では常に同一のものにして！歸するところは二個の（!!）勢力のうち當該制度の廢止に利害を有するもののスローガンを支持することである』（民主主義的知識階級が一の『勢力』として宣言されてゐる）といふ玉碎的發見をな

した文書がロシアに屆くや否や――階級意識ある勞働者がこの堂々たる文書を讀んで、それを嘲弄する餘融を持つや否や、プロレタリアートの現實的鬪爭の諸事件は、一擧にして、新『イスクラ』の論客たちのこれらすべての政治的空談を塵箱へ投じたのである。プロレタリアートは、啻に絕對主義の廢止に利害を有するのみならず、さらにまたそのものの眞實の崩壞へ進まうとしてゐる、第三の（本來からいへば勿論第三ではなく、その數からいへば第二の、そしてその戰鬪力からいへば第一の）勢力たることを示した。勞働者運動は、一月九日（一九〇五年）に端を發して、現に吾々の面前で民衆××へと成長しつゝある。

さて、勞働者みづからこの問題を實際に解決しかけてきた今日、××へのかういふ推移が、從來それを戰術の問題として取扱つてきた社會民主主義者によつて如何に評價されたかを考察しやう。

三年以前、我らの次ぎの實踐的任務を規定するスローガンとしての××について次ぎの如く論ぜられた。『一の民衆叛亂を相像して見よ。目下、吾々が民衆叛亂を志し、そのために準備しなければならぬことを、おそらくすべての人々が認めるであらう。だが、如何にして準備するのか？　中央委員會は叛亂を準備するために、あらゆる場所にその代理人を任命することはできぬ！　吾々が一の中央委員會を持つたとしても、現在のロシアの事情の下では、かかる代理人の任命によつて何事も達せられないであらう。反對に、一の全汎的な新聞の組織と配布とに際し、その活動そのものの

過程において發生した技隊綱は、××のスローガンを『坐して待つ』ことはできず、むしろ××の場合に最大可能の効果を保證する彼等の正規的活動をこそ行ふべきであつたのだ。これこそ、勞働者の最も廣汎なる大衆と絕對主義に不滿を抱くあらゆる屬との結合を鞏固ならしめるであらうし、またかくすることは實際××にとつて非常に重要なことである。かくしてこそ一般の政局を正當に評價する能力が、從つてまた××のために適當な時機を選ぶべき能力が生ずるであらう。なかんづくそれは、一切の地方組織體をして、ロシア全土に關係した同一の政治問題・突發事變・および種々の出來事に對し同時に反應し、これらの事件に出來るだけ精力的に、出來るだけ統一的に且つ有効に答へることを熟達せしめるであらう――そして××とは、元來、政府に對する全民衆の最も精力的な最も統一的な、且つ最も有効な『解答』である。これこそ、結局、ロシアのあらゆる隈々にある一切の××的組織をして、黨の事實上の統一を作り出すところの、恒常的な、同時に高度に緊密な連絡を保つことを習熟せしめるであらう。――そしてかかる連絡なくして、××の計畫を共同に協議することも、絕對に祕密を守らなければならぬかの必要なる準備方策を立てることも不可能である。』

『これを要するに「一の全ロシア的政治新聞の計畫」は、理論拘泥主義と文筆生活との病毒に罹かつた人々の書齋研究の所產（多くの人々が皮相的にさう考へてゐた如く）でないばかりか、むし

ろ反對に、それは、同時に最も緊要なる日常の活動を忽にすることなく、あらゆる方面から、また即時に××の準備に着手するための、最も實際的な計畫たらんしてゐる』『何を爲すべきか?』

傍點を附した以上の結語は、××的社會民主主義者が××の準備をどう考へてゐたかといふ問題に對し、明白な囘答を與へてゐる。しかし、この問題はかくも明白であるとはいへ、追隨主義者の舊戰術はこの點にも表はれなければならなかつた。マルチノフは最近『二つの獨裁』なる一小冊子を發表して、新『イスクラ』から特に熱心な歡迎を受けた。著者は、彼の『ラボーチェエ・ディエロ』氣質の奥底から、レーニンが『××××の準備や設定や遂行』のことを述べたことを激昂してゐる。物堅いマルチノフは敵に勢ひ鋭く斬りかかる、『御家騷動や革命黨の宣言のみが前以つて設定され、その設定された計畫に從つて有効に遂行されるが、それは、これらのことが、　　言ひ換へば社會諸關係における變革をなすものでなく、單に支配徒黨群の變遷にすぎないからであるといふことを、國際的社會民主主義はその歷史的經驗と社會的諸勢力の動態の科學的分析とに基づき從來常に認めてきた。社會民主主義は、　　豫め設定され得るものではないこと、それは人工的に作爲されるものではなく、おのづから行はれるものであることを常に認めてきたのである。』

讀者諸君はこの空談を聞いて、マルチノフは明かに眞面目な對手ではなく、彼の言ふことを眞に

受けるのは滑稽であるとおそらく言ふだらう。吾々はかかる讀者の言を全く正しいとする。新『イスクラ』の同人たちの一切の理論と一切の議論とを眞に受けることほど大きな苦悶はこの世にないといふこれらの讀者の言を、吾々は一應尤もなことと考へる。ただ不快なことは、これらのおあかし屋が『イスクラ』の紙面を飾り立ててゐることだけである。もつと不快なことは、かういふ下らぬことで頭を閉塞される人々が黨の中に（しかも少なからず）ゐることである。かくして吾々は、『過程としての組織』を發見したローザ・ルクセンブルグの『理論』(註一)について語らなければならぬ如く、これらの不眞面目な事柄についても語らなければならぬ。吾々は、××を民衆××と混同すべきではないことをマルチノフに解いて聞かせ、實際上の問題をロシアの絶對主義廢止の方法に從つて解決するに際し、社會諸關係における變革などと深奥な論及をなすことは片田舎の俗物にしか値ひせぬことを彼に説明する外に方法はない。かくの如き變革なら、ロシアにおいては、既に、農奴制度の廢止と共に始まり、そして社會的諸關係に起つた變革といふ點で我が國の政治的上部構造がおくれてゐることこそ、取りも直さずこの上部構造の崩壞を不可避的ならしめてゐる。そしてその際、突然の崩壞が一擧に全く起りさうなのは、『××××』がロシアではツァーズムに對し既に百の打擊を加へてきたので、問題はただ、ツァーリズムが百幾回目か百十幾回目かの打擊を受けて崩れるであらうといふことだけになつてゐるからである。次ぎの百幾回目の打擊の方法が實際に考顧さるべ

き時に當り、『社會的諸關係における變革』に關する自己の新入生知識を誇示し得る者は、自分の俗人根性をプロレタリアートに轉嫁したがる日和見主義的知識階級だけである。新『イスクラ』の日和見主義者のみが、政治新聞に依る全面的大衆煽動にその重點を置く――吾々の既に見た如く――恐るべき『ジャコバン黨の』計畫にヒステリックな悲鳴をあげ得るにすぎぬ。

註一、ローザ・ルクセンブルグが當時革命運動の重要性を輕視したことを指す。

民衆××は設定され得ないといふのは正しい。マルチノフと『イスクラ』第六十二號の論說記者とはこの眞理の認識のために稱揚されなければならぬ。(『××の如何なる準備が我が黨において一般に問題たり得るのか』と、マルチノフの忠實な一選手または門第は右の論說の中で『空想主義者』に反對して問ふてゐる)。だが、吾々が事實××を準備した場合に、社會的諸關係に起つた變革のお蔭で一の民衆××が可能である場合に、××を起すこと――それは全く實現され得る事柄である。吾々は一の簡單な例を引いてこのことを新『イスクラ』の同人たちに說くこととせう。吾々は勞働運動を起し得るか? 否、それは、社會的諸關係の變革から生ずる幾千の個々の行動から成るが故に。吾々はストライキを起し得るか? 勿論! だが、それにも拘らず――同志マルチノフ君考へて御覽!――それにも拘らず、すべてのストライキは社會的諸關係における變革の結果をなすものである。いつ吾々はストライキを起し得るか? ストライキを起す組織なりサークルなりが、當面

の勞働者大衆の間に勢力を得て、勞働者大衆のなかに增大しつゝある不滿と激昂との契機を正當に評價する時に。さて、同志マルチノフおよび『イスクラ』第六十二號の『論說記者』諸君、諸君にはこの問題が納得が行つたか？　諸君が納得したなら、さあどうぞ叛亂と民衆××とを比較なさい、『民衆××は豫め設定され得ない』。××は、それを設定する人々が大衆の間に勢力を得て、その時機を正當に評價することができれば、設定され得るであらう。

幸ひにして、進步せる勞働者の自主的活動は、新『イスクラ』の追隨主義的哲學よりもはるかに進展してゐる。新『イスクラ』の哲學が、××は、そのために準備し且つ××的階級の前衞を組織した人々によつては設定され得ないといふことを、論證せんする理論を辛うじて作り上げるまでには、種々の事件は、準備しなかつた人々が××を起し得る、然り、起さざるを得ないことを示すであらう。

茲にペテルスブルグの一同志から送られた一枚のビラがある。このビラは、一月十日、ペテルスブルグの合法的印刷所を占領した勞働者たち自身の手で組版され、印刷され、そして一萬部以上撒布されたものである。

『萬國のプロレタリア團結せよ！

市民諸君

昨日諸君は　　　を目撃した！　街頭に　　　×を目撃した！　勞働者のために闘ふ數百の戰士の××を目撃し、××を目撃し、　婦人や、抵抗もせぬ子供たちの呻き聲を聞いた！　勞働者の×と××とは、彼等の手で敷かれた舗道の上に撒らばつた。××を、××を、××を、勞働者の胸に向けた奴は誰か？　×××、　、　、　、××の無頼漢共だ！

奴らは××しないんだ！　奴らを×せ！　兄弟たちよ！　××をとれ！　××××、×××、×××を占領しろ！　××をぶちこはせ！　兄弟たちよ！　　　せよ！

一切の　　　を××せよ！　俺たちは××の×××を崩し、俺たち　　　を樹立しやう。

××萬歳！　人民代表者の憲法制定會議萬歳！

ロシア社會民主勞働黨』

この一團の勞働者はイニチアティヴを取つて××に訴へたが、それは失敗に歸した。××への訴へや、『××の設定』が少しばかり失敗したからとて、茫然自失することはない。かういふ折に、『社會諸關係における變革』の必然性を並べ立てたり、『俺たちは俺たち　　　を樹立しやう！』と叫び出した勞働者の『空想主義』を威丈高になつて非難したりすることは、新『イスクラ』に任せ

ておかう。度しがたき腐儒や亂心者のみが、かかる訴への重點をかくの如き叫び聲のなかに認めることができる。吾々にとつて重要なことは、我らの當面せる任務の解決のための、かういふ目ざましい、果敢な、實踐的着手を認知し指摘することである。

ペテルスブルグ勞働者のアッピィールは實現されなかつたし、また彼らが欲したほど急速に實現される筈もなかつた。かくの如きアッピィールは今後も再三繰返され、　の企てはなほ幾度か失敗に歸するであらう。だが、勞働者がかういふ任務に着手し始めたといふ事實そのものには素晴らしい意義がある。勞働者運動が實踐的緊急性を意識して、それをすべての民衆運動の場合に當面の問題たらしめたことによつて作り出した成果、その成果はもはやプロレタリアートから取り去られ得ないであらう。

社會民主主義者は、既に三年以前、一般的論據に基づき××準備のスローガンを揭げたのである。プロレタリアートの自主的活動は、×××の直接の教訓の影響を受けて同一のスローガンに到達した。自主的活動にも色々ある。革命的發意を有するプロレタリアートの自主的活動もあれば、意のままに操られる未發達のプロレタリアートの自主的活動もある。意識的に社會民主々義的な自主的活動もあれば、ズバトフ流の自主的活動もある。(註二) 現在でさへ、右の第二種類の自主的活動を有頂天になつて眺め入り、『階級』といふ言葉を萬遍なく繰返しさへすれば、目前の問題に對する直接

の解答はすんだかの如く信じてゐる社會民主主義者がゐる。『イスクラ』第八十四號を例に取らう。その社説記者は勝誇つた様子でから問ふてゐる――『この雪崩（一月九日）を發動させたものは職業的×××の狹隘な組織ではなくて、勞働者の會議（註三）であつたのは何故か？　それは、この會議が、事實上（謹聽、々々！）、勞働者大衆の自主的活動に立脚する廣汎なる組織であつたからである』。もしこの古典的文章の筆者がマルチノフの崇拜者でなかつたなら、彼はおそらく次ぎのことを悟つたであらう。すなはち、この會議は、それがズバトフ流の自主的活動から社會民主主義的な自主的活動へ移つて行つたが故にこそ、またしかるかぎりにおいて、××的プロレタリアートのかくの如き運動のために有益であつたことを。（その後間もなくこの會議も合法的會議として存在しなくなつた）

註二、ズバトフ――邦譯書第一二八頁註二を見よ。

註三――『勞働會議』――その完全な名稱は『聖ペテルスブルグのロシア工場勞働者會議』――一九〇四年の初頭、正教派の僧侶ガポンが設立した勞働者團體。その任務は、政府との協定に從ひ、勞働者大衆を革命の疫病から遠ざけることであつた。その組織はズバトフの原則に從つて建られたものだつたけれども、社會民主主義の宣傳のために有利な戰野を形成した。

もし新『イスクラ』や新『ラボーチェエ・ディエロ』の同人たちが追隨主義者でなかつたなら、

彼らは、なかんづく一月九日が[註四]、『勞働者運動の合法化は結局吾々の利益になつて、ズバトフ一派の利益にはならぬ』（『何を爲すべきか？』）と主張した人々の豫言を裏書きしたことを悟つたであらう。すなはち、一月九日こそは、『今日の雜草を刈り取り（換言すれば、今日のズバトフ輩の腐敗墮落を防ぎ）、明日の小麥を獲り收れる（換言すれば、合法化によつて一歩前進をとげた運動を革命的に指導する）ことができるやうな刈取り人を準備する』といふ、當時定められた任務の全重要性をもう一度立證したものである。しかるに新『イスクラ』の道化師たちは小麥の豊作を喋々して、××的刈取り人の强固な組織の意義を見くびつてゐる！

**註四**、一九〇五年一月九日――この日はロシアの勞働者から『血の日曜日』と呼ばれてゐる。この運動に動因を與へたものは、ペテルスブルグのプチロフ工場の數名の勞働者の不當解雇であつた。そのストライキには其他二三の工場も加はつた。間もなくこのストライキは全市の勞働者人口の上に波及して、一の明白なる政治的性質を帶びてきた。『ロシア工場勞働者會議』を指揮してゐたガポン僧正は、自己の勢力の失墜を恐れて、この運動の先頭に立つことを決意し、それによつて同時に、この運動に合法的性質を與へやうとした。この目的のために、彼は當時まだロシアの勞働者大衆の間に殘つてゐたツァーに對する信用を利用した。『ツァーは公平なり。不幸なるは、ただツァーと人民との間に惡意の顧問がゐることだ。これらの顧問官は一方に於ては、勞働者の事實上の狀態をツァーに祕し、他方に於ては、ツァーの善意を枉げてゐる』。かうい

ふ意見が、當時のロシアの大多數の勞働者の間に盛んに行はれてゐた。

ガポンは、大衆のかういふ幻想に基づき、彼らの要求を請願するために、　　たる冬宮に向つて平和的示威運動を催すべしと提案した。社會民主主義者の忠告にも拘らず、ペテルスブルグの勞働人口はガポンのこの提議を採用した。

一月九日になると、數千の勞働者は　　や、キリストの像を先頭に捧げて　　の方へ押し寄せて行つた。彼らに突然　　を見舞はれた。　　は一日中續いて數千の男女小供が　された。

しかしながら、勞働者を　した彈丸は、同時に、ツァーに對する勞働者階級の最後の信頼をも打ちこはしてしまつた。『××を把れ！』の叫びが自然に擧つてきた。勞働者の運動は直ちに平和的運動から　　運動に一變して全土に廣まつて行つた。かくてロシア第一革命の火蓋が切られたのである。

新『イスクラ』の同じ論説記者は續けて曰く、『もし吾々が革命の內地を攻撃するとすれば、それは罪惡であらう』と、この文句が何を意味するかは、神樣なら御存じかも知れぬ。吾々としては、この文句が『イスクラ』の一般的な日和見主義的見解とどう連絡してゐるかを重ねてもう一度論及しておく必要があらう。（しかし、ここでは）、右の文句の有する眞の政治的意味は唯一つしかないことを指摘しておけば充分である。すなはち筆者は革命の內地の前に平身低頭して、『狹隘な』『ジャコバン黨』的な××の前衛を鼻であしらつてゐるのだ。

追隨主義の戰術と××的社會民主主義の戰術との相違の全部は、新『イスクラ』がマルチノフの精神に熱中すればするほどますく明瞭に現はれる。吾々は、既に『ウペリョード』第一號において、××は端初的運動に投合しなければならぬことを說いておいた。從つて吾々は、軍事上の用語を用ゆれば、『內地の保全』の重要性を決して忘れてはゐない。吾々は、第四號において、ペテルスブルグ委員會の正しい戰術に就いて論じ、彼らは最初から革命的要素の支持と發展とにその全勢力を向け、そしてズバトフ流の『內地』に對しては用心深く疑惑の態度を取つてゐたことを述べた。さて吾々は一の忠告――今後も幾度か新『イスクラ』に與へなければならぬ忠告――を以て本論を終らう。××の前衞の任務を輕視するな！ この前衞を我らの組織された自主的活動を以て支持すべき我らの義務を忘れるな！ 勞働者の自主的活動の發展に就いて下らぬお喋りをやめた……勞働者は君らの氣付かない無量の××的な自主的活動を發揮してゐるのだ！ おくれた勞働者を君ら自身の追隨主義によつて墮落させないやうにもつと注意し玉へ！

# 吾々は××を組織すべきか？

（一九〇五年二月八日、「フペリョード」第七號）

もう隨分長くなる、一年以上にもなる。知名のドイツ社會民主主義者パルヴス（註一）の證言に從へば、ロシアの政黨に、『原則的な意見の相違』が發生したといふのであつた。プロレタリアートの政黨の第一の政治的任務は、中央集權主義の成長に對する、勞働者をセネバのどこからか『指令』せんとする不當な要求に對する、煽動家の組織・指導部の組織の過大評價に對する、鬪爭であるといふのである。これはドイツの週刊雜誌『世界政策』（一九〇三年十一月三十日發行）に發表された通りの、メンシェヴイスト・パルヴスの深遠な確乎として抂ぐべからざる所信であつた。

註一、パルヴス――甞てはドイツ社會民主黨の、後にはロシア社會民主黨の著明な黨員、一九〇五年にはパルヴスは同志トロツキーと一緒に『ナチャーロ』（發端）に働いてゐた。帝國主義戰爭中、彼は貪慾な社會主義の背教者となつた。

當時、善良なパルヴスに對しては、彼がお喋りの虜となつたこと、彼によつて固く釘つけにされた原則的意見の相違なるものの根底はいがみ合ひであること、新『イスクラ』の深奥なる思想的方向轉換は日和見主義への方向轉換であることが明かにされた。（一九〇三年十二月『イスクラ』編輯部

究のレーニンの手紙を見よ)。パルヴスは默りこくつたが、しかし指導部の組織の誇張的意義に關する彼の『思想』は、色々と調子を變へて新『イスクラ』によつて繰り返された。

十四ケ月の歲月が流れた。メンシェヴィキによる黨活動の解體と彼らの說敎の日和見主義的性質とは明瞭な輪廓を現はしてきた。一九〇五年一月九日は、プロレタリアートの××的エネルギーの巨大な全貯蓄と、社會民主主義者の組織の全缺陷とを曝露した。パルヴスは迷ひを解いた。彼は、『イスクラ』第八十五號のなかで、日和見主義的な新『イスクラ』の新しい思想傾向から　的な舊『イスクラ』の觀念への完全な復歸を示す一論文を發表した。『一人の英雄がそこにゐた』と、パルヴスはガポン(註二)のことを呼んでゐる。『だが、政治的指導が缺けてゐた。行動綱領が、組織が缺けてゐた』。……『組織の缺除の悲劇的結果が曝露された』……『大衆は崩れ立ち、すべてはばら〳〵になつてゐる。結合的中心が缺けてゐる。指導的行動綱領が缺けてゐる』。……『結合的指導的組織の缺除の結果運動は退却した』。そこでパルヴスは、吾々が既にウペリョード第六號において注意を促がしたところの、『××を組織せよ』といふスローガンを發した。パルヴスは、××の敎訓の影響を受けて『吾々は目下の政治的情勢の下でこれらの數十萬の人々を組織することはできぬ』(××を起さうとしてゐる大衆を言ふ)といふ確信に到達した。『しかし吾々は』と……パルヴスは正當にも拙著『何を爲すべきか?』中の古い思想を繰返して言ふ、『吾々は、結合の酵母をなし、××の瞬間にこれら

の數十萬の人々をその周りに糾合するところの、一個の組織を作ることができる。』『大衆を××のために準備し、彼等を××の進行中糾合して、一定の標語を目當てに××を開始すべく、明確な任務を有する勞働者の圈が組織されなければならぬ。』

註二、ガポン、正教流の僧侶、『ペテルスブルグのロシア工場勞働者會議』の組織者、一九〇五年一月九日の冬宮への勞働者示威運動の發頭人にして且つ指導者。『血の日曜日』の後彼は外國へ亡命した。その後、オクランカ（政治祕密警察）の代理人であつたことが曝露して、一九〇六年の春、社會革命黨員ルーテンベルグ一味のために暗殺された。

新『イスクラ』の汚物の中に埋れてゐた、この古い正當なる思想を讀んだとき、吾々はほつとして『つひに！』と叫んだ。つひに、プロレタリア黨の一人の勞働者の××的本能は、少くとも一時『ラボーチェエ・ディエロ』の日和見主義に打ち勝つた。つひに吾々は、××の『內地』の前に脆かず、××の前衞を支持するといふ任務を怖氣もなく提出する、一人の社會民主主義者の聲を聞いた。

新『イスクラ』の同人たちは、もちろんパルヴスの主張を容れなかつた。『同志パルヴスの發表した思想のすべてを『イスクラ』の編輯部は分つものではない』と、編輯後記に言つてゐる。

さうだらうとも！　一年有半に亘る彼等の日和見主義的おしやべりを面罵する思想を、實際どう

して彼らが『分つ』ことができやう！

『××を組織せよ！』でも、××は社會的諸關係における變革によつて惹起されること、××は設定され得るものではないことを知らうとする、一人の賢明な同志マルチノフがゐる。このマルチノフはパルヴスにその誤謬を說明した上で、もしパルヴスが××の前衞の組織を眼中に置いたのならそのことは『狹隘で』有害な『ジャコバン黨的』觀念であることを論證する。さらに、我が賢明なるマルチノフは可愛いマルトフを教導する。そしてマルトフはマルトフで自分の師（マルチノフの）教へをさらに一層深めることができ、『××を組織せよ』といふ標語に代ふるに『××を解消せよ』といふ標語を以てすることができる（第八十五號參照）。

然り、親愛なる讀者諸君、かういふ標語が寸分たがはず『イスクラ』の社說のなかに提唱されてゐる。明かに、今のところは、社說を書くために、過程としての自由なおしやべり、またはおしやべりの過程を喋々しておれば充分である。日和見主義者は常にかかるスローガンを必要とするが、仔細に調べて見ると、それは空語以外の何物でも、美辭麗句以外の何物でもない。

パルヴスは、まるで突然ボルシェヴィキにでもなかつたかのやうに、組織せよ、組織せよと繰り返す。パルヴスは不幸な人間で、組織が一の過程であることを理解しない（註三）（『イスクラ』第八十五號、同じく從來の新『イスクテ』のすべての號、就中雜錄欄に載つた華々しいローザの堂々たる論文を見

よ)。パルヴスは哀れな人間で、辯證法的唯物論の全精神に從へば、單に組織のみならず、戰術もまた一の過程であることを理解しない。しかし、彼は『陰謀家』の如く計畫としての組織を持ち廻り、『空想家』の如く、かくも突然に、第二回黨大會でござれ、第三回黨大會でござれ全くお構ひなしに——どうぞそんなことをしてくれるな！——かくも無雜作に組織し得るものと空想してゐる。

註三——ローザ・ルクセンブルグを指す。

このパルヴスは極端にも『ジャコバン主義』のかくの如き狂態に走つてしまつた。『一定のスローガンに基づいて××を開始する』——まァ考へても見るがいい！ これは、有名な我がマルチノフによつて拒絶された××の『設定』に關する觀念よりもはるかに有害である。確かに、パルヴスはマルチノフについて學ぶ必要がある。パルヴスは『イスクラ』第六十二號を讀み、その社說から、叛亂の準備にとつて如何に有害な『空想的』な觀念が、一九〇二年と一九〇四年との甚だ不適當な時期に、我が黨內に流布されたかを學ぶべきである。パルヴスは『一人の勞働者』なる小冊子へのアクセリドロードの序文を讀んで、『根深い、有害な、黨にとつて正に破壞的な膿腫』(原文のまゝ！)のことに就いて何かを學ぶべきである。この膿腫は、『民衆中の最もおくれた、最も無自覺な、正に狂暴化した(!!)要素の端初的叛亂の上に、すべての期得をかけてゐる』人々の側から、社會民主主義を脅かしてゐるものである。

パルヴスは今日數十萬の人々を組織することの不可能を認め、『一の結合酵母をなす組織を作る』べき任務を高調する。新『イスクラ』は、この種の事柄がその紙面に出てゐるのにどうして煩悶しないのか？　結合酵母としての組織といへば、新『イスクラ』の我が同人たちがそれに言及しただけで失神するところの、職業××家の組織ではないか。

いづれにもせよ、吾々は、『イスクラ』に對しパルヴスの論文と共にその社說を感謝する。無內容な、混亂せる、追隨主義的千言萬語が、舊『イスクラ』の明確な、含蓄に富んだ、直截な、そして潑溂たる××的標語から、如何にくつきりと浮び立つてゐることよ！　『機密政治は舞臺を去り、いいいいもはや斷じてロシアまたはヨーロッパを惑はさなくなつた』とは傲慢な言葉ではないか？　實際はヨーロッパのブルジョア新聞のどの號でも、かうした眩惑が續けられ、且つ進展してゐることを示してゐる。『ロシアの溫健自由主義は死の打擊を受けた』。この幼稚な政治的愚昧さは、逃げかくれやうとするそのものの『政治的』傾向を自由主義の死だと思つてゐる。事實において、自由主義は存命してゐる、それは存命して蘇生するだらう。今こそ自由主義はここ暫らくで政權を握らうとしてゐる。自由主義がこれまで息を殺してゐたのは、必要な瞬間に、それだけ確實に、それだけ危險なく、政權へ手を伸さんがためであつた。そのためにまた自由主義は勞働者階級にかくも媚を呈してゐる。この媚（それは現在の瞬間においては百倍も危險である）を眞に受けて、『プロレタリアート

は祖國の解放者である、プロレタリアートは全國民の前衛であり、その英雄的役割は、現在、自由主義的=民主主義的ブルジョアジーの進歩的要素の輿論によつて認められた』などと、いい氣になつて說き廻るには、餘程の近眼者流でなければならぬ。されば新『イスクラ』の紳士諸君、自由主義ブルジョアジーがプロレタリアートを英雄として認めるのは、このプロレタリアートが、ツァーリズムに對する鬪爭において、彼ら自ら欲するところの自由を獲ち得るほどにまだ充分に强力でなく、まだ充分に社會民主主義的でないからだといふことを理解し給へ。そして吾々は今日の自由主義者の言寄を自慢すべき何らの理由をも有しないばかりか、むしろプロレタリアートに警告して、彼らにかかる言寄の裏を見せなければならぬといふことを理解し給へ。諸君にはこの裏が見えないのか？ それなら、憲法の必要に關する工場主、商人、および株屋の聲明を聞き給へ！ どうです。これらの聲明は溫和なるツァーリズムの死滅に就いて何んと明瞭に說いてゐるではないか？ 自由主義のおしやべり屋たちはプロレタリアートの英雄主義をちやほや言ひ、工場主たちは重々しく堂々と御手のものの憲法を要求してゐる――事實は正にかくの如し、我が最も敬愛する『指導者』諸君。*

しかし、最も見事なのは　　に關する『イスクラ』の觀察である。『プロレタリアートの　事業、政府に對する國民の　　を保證する一個の組織の系統立つた建設事業』は『技術的』(!?)

* この行が旣に書き上げられたとき、次のやうな興味のある報導がブルジョアの陣營から私の手もとに屆いた。『フランクフルト新聞』(一九〇五年二月十七日)のペテルブルグ特派員は、ペテルブルグの自由主義的一新聞記者の發表した次のやうな意見を傳へてゐる。『自由主義者が今日の如き時期を逸するとすれば、彼らは餘程愚昧であ

任務だと手ほどきされてゐる。吾々はもちろん哀れな技術などには頓着なく、事物の深みを直視する。『それ(「技術的」任務)が如何に重要であらうとも、大衆を××に準備するための我らの事業の重點はそれにあるのではない』……『組織の一切の努力も、もしそれが民衆に一の貴重なる武器を以て武裝せしめることを、すなはち、絶對主義を　　し、そのために　　　するといふ燃ゆるが如き欲求を抱かしめることを解しないならば、いつまでも意義なきものであらう。吾人の努力は次のことに向けられなければならぬ――××を目的とする自己　　の大衆的宣傳に』(後の二個所の傍點は筆者の附したもの)。

大いに然り、これは眞に深い問題の把握であり、狹隘な、殆ど『ジャコバン黨的』となつたパルヴスのそれとは全く別なものである。重點は　事業にあるのでも、組織の系統立つた準備にあるのでもなくて、民衆に××に對する燃ゆるが如き欲求を抱かしむることに、詳しくいへば自己××にあるのである。我らの運動を退却せしめんとするかくの如き俗物の囈語を讀むと、吾々の如きは社會民主黨のために燃ゆるが如き恥辱感を覺える！民衆に××に對する燃ゆるが如き欲求を抱かしめることは、一般的な、不變の、到る處で成立する社會民主黨の任務であり、日本でも、イギリスでも、ドイツでも、イタリアでも、同じ程度に適用され得る任務である。壓服された、搾取に反對して戰ふ階級が存在する到る處で、その階級は、社會主義者の宣傳を通じて、常に、當初から、先づ

る。自由主義者は現在すべての切札を掌中に納めてゐる。といふのは彼らは勞働者を自分の手押車に繫ぐことができたが，官僚は誰れにもあがめられないために，政府は一人の味方をも有してないからである』。かやうな瞬間に自由主義の死滅を論ずるとは，新『イスクラ』の內部には何んと神聖な幼稚さが支配してゐるではないか？

第一に××に對する燃ゆるが如き欲求を抱かされてゐる。そしてこの『欲求』は勞働者運動が開始されるや既に存在してゐるものである。社會民主黨はこの燃ゆるが如き欲求を意識せしめ、組織と計畫的行動との必要を認識せしめ、政治の全形勢を顧慮せしむればいい。どうぞ、『イスクラ』の編輯員諸君、諸君はドイツのどんな勞働者集會でもいいから傍聽し給へ。すると諸君は、彼らの眼差(マナザシ)が如何に××に對する憎惡に燃え、如何に怒號し、如何に拳が固く握りしめられるかを見るであらう。如何なる力が、ブルジョアジーおよびその從僕と一擧に事を決しようとするこの織ゆるが如き欲求を制止してゐるのか？　組織と訓練の力、意識の力、個人の　　は無意義であるといふ意識の力、眞劍な××　　の時の鐘はまだ鳴り渡つてゐないといふ意識の力、必要なる政治的形勢が缺けてゐるといふ意識の力。これ即ち、社會主義者がかかる情勢の下にあつて民衆に『××せよ！』と言はず――今後も言はないであらう、民衆に自ら××し敵を襲擊せんとする燃ゆるが如き欲求を抱かしめるにとどめる（さうでなければ彼は社會主義者ではなくておしやべりである）所以である。しかし、今日ロシアにおける狀勢は、日常活動のかくの如き條件とは異つてゐる。なかんづくそのために、從來一度も『××を把れ！』と叫んだことなく、常に勞働者に　　に對する燃ゆるが如き欲求を抱かしめ來つた××的社會主々義者のすべてが、今日、××的發意に滿ちた勞働者に對し、『××を把れ！』といふスローガンを發するに至つたのである。しかも、このスローガンが終ひに發

せられたかくの如き瞬間において、『イスクラ』は不吉な豫言をする、重點は　にあるのではなくて、自己　に對する燃ゆるが如き欲求にあると。これは唾棄すべき知識階級の小理窟ではないか？これらの人々は、黨をして、××的前衛の緊急なる任務から、プロレタリアートの『後方』の傍觀へ退却せしめてゐるではないか？　我らの任務をかくの如くこの上なく下らぬものにしてしまふことは、あれやこれやの口先き巧者なおしやべり屋の個人的性質に依るものではなく、過程としての組織、過程としての戰術といふ流行語のなかにかくも素晴らしく表現されてゐる、彼らの全立場に依るものである。かういふ立場を採る者の運命は、すべて斷乎たるスローガンの前に尻込みし、あらゆる『計畫』を怖れ、潑溂たる××的發意をしりぞけ、小理窟を並べ立て、古い囈語を繰返すにきまつてゐる。吾々社會民主主義者が明かにプロレタリアートの××的活動力よりもおくれてゐる時に際し、前進することを怖れるに決つてゐる。まことに、死者生者を捉え、『ラボーチェエ・ディエロ』の死せる理論、新『イスクラ』を殺した。

『諸階級の前衛――國民の解放者としての社會民主主黨の政治的指導的役割』に闘する『イスクラ』の議論を檢討しよう。『この役割は、吾々が　の技術的組織と遂行とを完全に我らの掌中に納めることに成功することによつて果されるものでも確保されるものでもない！』と、吾々は說諭を受ける。まァ考へて見よ！　前衛の役割は、吾々が××の遂行を完全に我らの掌中に納めること

に成功しても、果たされ得るものではないといふのだ！　しかもこれらの人々が今以て前衛のことを言ふ！　彼等は、歴史が自分らに民主主義的變革における、主導的役割を課することになりはしまいかと恐れてゐるのだ。彼等は自分たちが結局『　　を遂行』しなければならなくなるといふことを考へてびく／＼してゐるのだ。彼等はそれを豫感してゐる——ただ彼等は、『イスクラ』のなかで、黨は『　　を遂行』すべからず、民主主義共和制への政權の革命的引渡を完全に掌中に納めんと志すべからずと、卒直に言ひ切るだけの勇氣をまだ持ち合せてゐないだけである——社會主義の度し難きヂロンド派〔佛蘭西革命に於ける中庸共和黨員〕たる彼等はここに恐るべきジャコバン主義を嗅ぎつけてゐるのだ。彼等は、吾々が××の遂行を我らの掌中に納めるべく熱心に努力すればするほど、それだけ多くの部分が我らの手に歸し、そしてこの部分が多ければ多いほど、それだけ反プロレタリア的または非プロレタリア的民主主義の影響が減少することを理解してゐないのだ。彼等はあくまで尻つぼにとどまつてゐたいのだ。彼等は、『人は須らく尻つぼにゐるべし』といふ特殊の哲學をさへ案出してゐる——マルチノフは既にこの哲學の發展に取りかかつた、そして彼は明日には既う『イスクラ』のなかでおそらく最後の句切にくるであらう。

　以下これらの見解を一歩一歩分析して行くこととしよう。

『階級意識あるプロレタリアートは、歴史的發展の自生的過程の論理に基づき、革命の前夜が作

り出だす一切の組織要素、一切の醱酵要素を、自己の目的のために利用するであらう」……立派なものだ！　だが、一切の要素を利用するとは、取りもなほさず、指導を全部擔當することである。『イスクラ』は自家撞着に陷り、それに氣付いてあわてて釋明する。

『これら一切の要素は彼れ〔階級意識あるプロレタリアート〕から××そのものの技術的指導の一部を奪ひ、それによつて必然的に我らの要求を民衆中の最もおくれた諸層に委ねることを餘儀なくされるといふことを怖れることなく……』。

讀者諸君、なんのことか分かりますか？　一切の要素が指導の一部を奪ふことを怖れることなくそれを利用することとは?!　後生だから、紳士諸君！　吾々が事實上一切の要素を利用し、吾々の要求が事實上吾々の利用する要素によつて引受られるとすれば、彼等が吾々から指導權を奪ふのではなくて、吾々の指導を承認するのである。もしまたこれら一切の要素が事實上吾々から指導權を奪ふとすれば（もちろん『技術的』指導ではない。なぜなら、××の『技術的』方面をその政治的方面から分離することは最大のペテンであるから）、吾々が彼等を利用するのではなくて、却つて彼等が吾々を利用するのである。

『國家と教會とを分離すべしといふ我らの要求を大衆の間に流布させた僧侶や、冬宮への進撃を組織した帝制派勞働者團體の跡を受けて、ロシア××が、ツァーの××に對する決戰に於て率先し

て民衆を指導する將軍や、あるひはツァーの政府の公然たる崩壞を率先して宣言する官吏を多く輩出するとすれば、喜ぶべきであらう』。

然り、吾々とてもそれを喜ぶものであるが、しかし吾々は、かういふ萬一の痛快事に對する歡喜に醉ふて我らの論理を曇らすことを欲しない。ロシア××は僧侶や將軍を多く輩出するとは何を意味するか？ それは、僧侶や將軍が××の味方か指導者かになることを意味する。これらの『新參者』は、充分意識した、または丸で意識しない××の味方であるかも知れぬ。もし後者であるなら(新參者は大方さうである)、吾々は喜ぶどころか、むしろ彼等の無意識を悲しみ、全力をあげてそれを矯正し補修しなければならぬ。吾々がこれを實行しないかぎり、意識のはつきりしない大衆の指導者に從ふかぎり、社會民主黨が一切の要素を利用するのでなくて、却つて一切の要素が社會民主黨を利用してゐると云はざるを得ぬ。昨日までは僧侶であり、將軍であり、あるひは官吏であつた革命の味方といふものは、偏見に滿ちたブルジョア民主主義者であり得るし、また、勞働者が彼等に從ふかぎり、ブルジョア民主主義が勞働者を『利用』する。新『イスクラ』の紳士諸君、諸君にはこのことがはつきりわかつてゐるのか？ しかりとすれば、なぜ諸君は、充分に意識した(即ち社會民主主義的な)××の支持者が指導を引受けるのを恐れるのか？ なぜ諸君は、社會民主主義的士官(私はわざと類似の例を選ぶ)や社會民主主義的組織の成員が、この組織の發意に基づき、ま

たその委託を受けて、諸君のいはゆる將軍の職能と任務とを『全然その掌中に握る』ことを恐れるのか？

パルヴスへ立ち歸らう。彼は、その素晴しい論文を、組織攪亂者を『追ひ出せ！』といふ素敵な忠告を以て結んでゐる。組織攪亂者の排斥は、ロシアの大多數の社會民主主義者の最も熱烈な最も斷乎たるスローガンである。さうだ、パルヴス君、容赦なく『追ひ出す』ことだ。組織の攪亂を、過程としての組織、傾向としての組織に關する『理論』を以て神聖化して來たし、現に神聖化しつつある、かの社會民主黨機關紙の英雄たちからまづ追ひ出すことだ。單にそのことを言ふばかりでなく、實際それを實行すべきである。黨を組織せんとする一切の黨職員會議を即時召集すべきであつたのだ。誓言や勸誘にとどまらず、動搖してゐる者、ふら〳〵してゐる者、煮え切らぬ者、孤疑逡巡する者のすべてに對し、『選擇せよ！』といふ直截なる、のつぴきならぬ最後の通牒を交付しなければならぬ。吾々は、我らの新聞の第一號以來、『フペリョード』の編輯部の名において、組織攪亂者に對し言ふに言はれぬ憤激を抱いてゐるロシアの黨活動者の全大衆の名において、この最後通牒を交付してきた。同志諸君、組織攪亂者を速かに叩き出せ！　さうして寄集せる組織的活動につけ！　過程としての組織をお喋りする千人の知識階級俗物や小商人よりも、計畫としての組織を採用した百人の××的社會民主主義者を選べ！

# 社會民主黨と××××政府

（一九〇五年三月、「フペリョート」第十三——四號）

一

五年以前には、まだ、『　　　　　　　　　　　　——』といふスローガンは、社會民主主義の多くの代表者たちには、時期尙早なもの、勞働者大衆には理解されがたきもののやうに見えてゐた。これらの代表者たちが日和見主義者に數へられてゐるたのは當然のことであつた。彼等が運動におくれてゐること彼等が、階級の前衞としての、その指導者および組織者としての、運動の代表者および運動の基本的主要任務の代表者としての、黨の諸任務を理解してゐないことが、彼等に向つて說明され且つ明かにされた。これらの任務は一時地味な日常活動のために蔽はれることがあるかも知れぬ。しかしそれは戰鬪的プロレタリアートのための導きの星たることを寸時と雖も止めるべきではない。

しかしていまや、××の焰が全土を蔽ひ、最も信じかねた人々さへ近き將來における絕對主義の××の不可避性を信じてゐる時期が到來した。かかる時に際し、社會民主黨は、運動を退却させ、その任務を低下し、そのスローガンを曖昧ならしめんとする、これら反動的日和見主義の試みを、

云はば歴史の皮肉の結果として、重ねてもう一度取りあげなければならぬ。かかる試みの代表者たちに對する論戰は、いまや緊急なる問題となり、一の重大な實踐的意義を得るに至つた（黨內における一切の論戰を見ることを好まぬ非常に多くの人々の見解にも拘らず）。吾々が我らの次ぎの政治的任務の直接の實現に近づけば近づくほど、これらの任務を充分明白に理解するの必要は益々大となり、この問題における一切の曖昧、誤解、および一知半解は益々有害なものとなる。

しかも一知半解は、新『イスクラ』の、あるひは（ほとんど同じことだが）『ラボーチェエ・ディエロ』の、陣營の社會民主主義者たちの間に極めて多く存在してゐる。——それにはすべての人々が、一切の社會民主主義者のみならず、一切の民主主義者も、また彼等の今日の宣言を信じていゝなら、一切の自由主義者までが、同意見である。だが、これは一體何を意味するか？今日の政府の倒壞が如何にして起るといふのか？今日——普通選擧其他を承認して——『オスヴォボシデニェ』（解放）の徒黨までがそのスローガンとして認めてゐる、かの憲法制定會議を誰が召集するのか？憲法制定會議の選擧が自由であり、全國民の利益を表現するとすれば、その選擧の事實上の保證はどこになければならぬか？

これらの問題に對し明瞭且つ正確なる解答を與へない者は、——というスローガンを理解しない人である。これらの問題は吾々をして直ちに××××政府の問題に向はしめる。

絶對主義の下では、眞に一般的な、平等な、直接の無記名投票の完全なる保證を有する、憲法制定會議のための眞に自由な選擧は啻に行はれさうにないばかりか、不可能でさへあることは、容易に理解されるところである。もし吾々が××××××を　　　　せよといふ實際的要求を盲滅法に提起するのでなければ、吾々は如何なる、、、、　　　　に代へんとするか、換言すれば、吾々は××××政府に對する社會民主黨の態度を如何に考へてゐるかを明かにしなければならぬ。

この問題に於て、今日の社會民主黨の日和見主義者たち、即ち新『イスクラ』の同人たちは、丁度『ラボーチェエ・デイエロ』の同人たちが五年前に政治鬪爭一般の問題において實行した如く、同じ執拗さを以て黨を退却させてゐる。この問題における彼等の反動的見解は、『イスクラ』が特別の注意を附して稱揚し推賞した、マルチノフの小冊子『二つの獨裁』のなかに最も完全に說かれてゐるが、これに對しては、吾々は既に再三讀者の注意を向けてをいたのである。

マルチノフは彼の小冊の巻頭から次の恐るべき見通しを以て吾々をおどしつける。『レーニンが夢想する如く、もし××的社會民主黨の鞏固な組織が「絶對主義に反抗する全民衆の××××を設定し且つ遂行し」得るとすれば、國民の總意は、革命後直ちに、この黨を臨時政府として指定するであらうといふことは明かではないか？　さうすれば、國民は革命の次ぎの運命を、その他の如何なる

政黨でもなく、まさにこの政黨の掌中に歸することになりはしないか?』

ほんとうとも思はれない言葉だが、しかし一の事實である。ロシア社會民主黨の後世の史家は、ロシア革命のそもそもの劈頭に當つて、社會民主黨中のヂロンド派がかくの如き見通しを以て××的プロレタリアートをおどしつけたことを確めて驚きの眼を見張るに相違ない! マルチノフの小冊子(並びに新『イスクラ』所載の全部の論文または各論文のそれぐ\の文句)の全內容は、要するに以上の見通しに對する『恐怖』の描寫に終つてゐる。新『イスクラ』の精神的指導者は玆に『政權獲得』の妖怪を見、『ジャコバン主義』、バクーニン主義、トカーチェフ主義、(註一)および其他の恐るべきイズムの妖怪を嗅ぎつける。そしてこれらのイズムは種々雜多な革命の乳母たちがそれを以て政治的乳呑兒をおどしつけるのを喜ぶところのものである。もちろん、この場合にも、マルクスおよびエンゲルスの『引用』なくしてはうまく運ばない。哀れなるはマルクスとエンゲルスとで、彼等の著書からの引用はこれまで如何に亂用されたことよ! 『すべての階級鬪爭は政治鬪爭である』といふ眞理が、我らの政治的任務並びに政治的煽動および政治的鬪爭の方法の狹隘と未熟とを理由づけるために、如何に多く引合ひに出されたかを想起せよ。今また、エンゲルスは追隨主義に都合のよい僞證人として引用される。エンゲルスは『ドイツ農民戰爭』のなかに論じて曰く、『一の極端なる政黨の領袖が逢遭する最惡の事柄は、運動がまだ彼の代表する階級の支配のためにも、この階級の支

配が要求する方策の貫徹のためにも、成熟してゐない一時期に於て、彼が政府を擔當することを餘儀なくされる場合に存在する』と（「ドイツ農民戰爭」、ベルリン版一九二〇年刊、一〇五頁）。我が追隨主義者が原著者の思想を如何に歪めてゐるかを確めるには、マルチノフがあげてゐるこの長い引用文の書出しを注意して通讀すれば充分である。エンゲルスは階級の支配を確保する權力に就いて述べてゐるのである。これは明かなことではないか？ 從つてプロレタリアートに關しては、プロレタリアートの支配を確保する權力、すなはち社會主義的變革の完成のためのプロレタリアートの獨裁が問題なのである。マルチノフはそれを誤解して、絕對主義排除の時代における××××政府と、ブルジョアジーの廢止に際してのプロレタリアートの確保された支配とを混同し、プロレタリアートおよび農民階級の民主的獨裁と勞働者階級の社會主義的獨裁とを混同してゐる。エンゲルスの引用をもつとつづけて行けばこの思想は尙ほ一層明白となつてくる。エンゲルスは曰く『一の極端なる政黨の領袖は、運動そのものの利益のために、自分には關係のない階級の利益を遂行し、その階級の利害が彼等自身の利害であるといふ言葉や約束や誓言を以て、彼自身の階級を片づけざるを得ぬ。かういふ狀態に陷つたものは救濟のしやうもない』、と。

　圈點の箇所が明かに示してゐる通り、エンゲルスは、指導者が自己階級の眞實の利害と變革の眞實の階級的內容とを誤認する結果生ずる、かの誤まれる狀態を警告してゐるのである。明確を期す

るために、私は我が思慮深いマルチノフ君に一の簡單な實例を指し示さう。『勞働』の利害を代表すると自信してゐた『ナロートナヤ・ヴォーリャ』の人々が、來るべきロシアの憲法制定會議においては、農民の九〇パーセントが社會主義者となるであらうと自からも認め、また他の人々にも說いてゐた時、彼等は、かく主張することによつて、自己の確實な政治的沒落を招く誤まれる狀態に陷つたのである。なぜなら、かういふ『約束や保證』は客觀的現實と合致しないからである。事實、彼等はブルジョア民主主義の利害、『他階級の利害』を追求したのである。どうです、マルチノフ先生疑ひが晴れましたか？　社會革命黨員が、ロシアに無條件に解決を迫つてゐる農業改革を、『社會化』として、『土地の人民への讓渡』として、『平等なる土地用益』の始まりとして說く時、彼等は自己を必然的な政治的沒落に導びく誤まれる狀態に陷つてゐるのである。なぜなら、彼等が希望する改革こそは、事實において、他階級の、即ち農村ブルジョアジーの支配を確保するものであり、從つて彼等の言葉や約束や保證は、革命の發展が急速に進めば進むほど、それだけ速く現實のために覆へされるに相違ないのだから。マルチノフ先生、君にはまだ何が問題なのかわからないのか？　エンゲルスの思想の意味は轉覆の眞の歷史的任務に關する誤認の害毒を指摘するにあること、從つてエンゲルスの言葉は『ナロードナヤ・ヴォーリャ』の同人たちや『社會革命黨員』に適用され得ることが君にはやつぱりわからないのか？

## 二

エンゲルスは、プロレタリアートの指導者が轉覆の非プロレタリア的性質を見誤まる危險を指摘してゐるのだが、賢明なるマルチノフは、綱領および戰術（卽ち宣傳と煽動の全體）並びに組織の點で革命的民主主義から區別されるプロレタリアートの指導者が、民主主義共和制の創設に當つて指導的役割を演ずるかも知れぬといふことから、危險を推論してゐる。エンゲルスは、指導者が一見社會主義的に見える轉覆の內容と眞に民主主義的な轉覆の內容とを混同するといふ點に危險を認めてゐるのだが、賢明なるマルチノフは、ブルジョア支配の最後の形態、ブルジョアジーに對するプロレタリアートの階級鬪爭のための最善の形態たる民主主義共和制を實施するに當り、プロレタリアートが農民と共同して意識的に獨裁を行ふかも知れぬといふことから危險を推論してゐる。エンゲルスは、人々の言ふところと行ふところとが一致せず、口では一の階級の支配を約束しながら、實は別な階級の支配を確保する誤まれる狀態を危險だと見てゐる。卽ちエンゲルスは、この誤謬のなかに政治的沒落の不可避性を認めてゐるのだが、賢明なるマルチノフは、民主主義のブルジョア的支持者が、プロレタリアートおよび農民に、眞に民主的な共和制を形成することを許さないだらうといふことから沒落の危險を推論してゐる。賢明なるマルチノフは、かくの如き沒落、プロレタ

リアートの指導者の沒落、眞實の民主主義共和制のための鬪爭における幾千のプロレタリアートの沒落が肉體的沒落であつて、何ら政治的な沒落でないばかりか、むしろ反對に、プロレタリアートの最大の政治的收穫、自由のための鬪爭におけるそのヘゲモニーの最大の實現であるといふ認識にまで飛躍することができない。エンゲルスは、無意識的に自己階級の道を踏み迷ひ、他の階級の道を行く人々の政治的沒落について語つてゐるのだが、エンゲルスを忠實に引用する賢明なるマルチノフは、健實な階級の道を先きへ先きへと進んで行く人々の沒落に就いて語つてゐる。

革命的民主主義の立場と追隨主義の立場との相違はここでは極めて明白に現はれてゐる。マルチノフと新『イスクラ』とは、プロレタリアートが農民と共に擔當する最も急進的な民主主義的變革の任務の前に尻込みして、この變革の社會民主主義的指導に怖氣づき、たとへ無意識的にせよ、プロレタリアートの利害をブルジョア民主主義の掌中に委ねてゐる。かくして、吾々は將來の政府黨を準備すべきではなくて、むしろ反對黨を準備すべきであるといふマルクスの正しい思想から出發して、マルチノフは、吾々は現在の××に際し追隨主義的反對黨に味方すべきであると結論する。彼の政治的見識は要するにこれに歸着する。私はここに彼の議論を紹介して讀者諸君の一考を促したい。

『プロレタリアートは、社會主義××が成就されるまでは、國家における政權の全部をも一部を

も獲得することはできぬ。これは爭ふべからざる原則であつて、吾々を日和見主義的ジョーレス主義から區別するものである……』(マルチノフ、前掲書五八頁)——吾々は吾々でこの原則を補修し、どこが正しいのかを見究め得ない尊敬すべきマルチノフの無能を明白に立證する。社會主義的變革に反對する一政府へのプロレタリアートの參加を民主主義的××へのプロレタリアートの參加と混同することは、何が問題なのか丸で解つてゐないことを意味する。それは、あだかも殺人漢ガリフェーの政府へのミルランの參加を共和制を防衛したコンミュンへのヴァルランの參加と混同するに等しいものである。

しかし、もつと先きを拜聽して、マルチノフが如何に混亂してゐるかを見ることとしよう。『だが果してさうだとすれば、ブルジョアジーは明日の支配者となるであらうから、當面の革命は、全ブルジョアジーの意志に反しては(傍點はマルチノフのもの)如何なる政治形態も實現し得ないことは明白である。』……第一、これまでの文章は、プロレタリアートの政府一般から社會主義革命に至るまでを取扱つてきたのに、ここではなぜ政治形態のみが問題となるのか? なぜ著者は經濟形態の實現を說かないのか? それは、彼が自身には少しも氣づかずに社會主義的變革から民主主義的變革の方へ飛び越へてしまつたからである。その通りだとすれば(これが第二の點である)、著者が『全ブルジョアジーの意志』を簡單に取扱つてゐるのは全然不當である。なぜなら、民主主義的變革の

時期なるものは、正に、絶對主義から自己を解放せんとするブルジョアジーの種々様々な層の意志の諸々相をその特徴とするからである。民主主義的變革を取扱ひながら、『プロレタリアート』と『ブルジョアジー』との單純幼稚な對比から一歩も出でないのは全くの虛妄である。といふのは、民主主義的變革とは、社會の大衆が元々ブルジョアジーとプロレタリアートとの間にゐて、小ブルジョアや農民の尨大な層を形成してゐる、かの社會的發達の時期を指すものだからである。民主主義的變革がまだ實現されてゐないからこそ、この尨大な層は、プロレタリアートと共同して政治的諸形態を實現すべく、本來の狹い意味における『ブルジョアジー』に比し著しく多くの利害を有してゐるのである。この單純な事實を誤認するところにマルチノフの混亂の主要原因が存してゐる。

さらに曰く、『……果たしてさうだとすれば、ブルジョア的要素の多數に對する單なる威嚇に依つて、プロレタリアートの革命的鬪爭はただ一事のみを――本來の姿における絕對主義の復活のみを――招來し得るにすぎぬ。もしも事態が、一見立憲的に見える種々の讓歩を以て、沒落に瀕せる絕對主義的權力を活氣づけ且つ鞏固ならしめ得るやうなことになるとしても、プロレタリアートはもちろんかかる萬一の結果の前に立停らないだらうし、またブルジョアジーの威嚇を罷めやうともしないであらう。しかし、プロレタリアートが鬪爭に踏み出す場合には、彼等はもちろんその終結を眼中に置いてゐない』。

親愛なる讀者諸君、諸君には何んのことかわかりますか？　プロレタリアートは、一見立憲的た見える讓步によつて脅威を受けてゐる場合、絶對主義の復活に導びく威嚇の前に立停らないだらうとは！　これはあだかも私がかう云ふに等しい、マルチノフだけと一日談話してゐると、私はエジプト人のやうな祟に合ひさうだ、だから私は、どんなに惡くともマルチノフおよびマルトフと二日間談話することにしかならぬ威嚇に訴へる、と。先生！　これではお話になりますまい！

マルチノフが以上の虛妄を筆にした時、彼の念頭に浮んだ思想は次ぎの如きものであつた。もしプロレタリアートが民主主義的變革の時に當り社會主義革命を以てブルジョアジーをおどしつけるとすれば、その結果は反動を誘致するばかりで、民主々義的業績をさへ弱めるであらう、と。ただこれだけである。そして絶對主義が元のまゝの姿において復活するとか、都合の惡い場合に愚にもつかぬことを列べ立てて言ひ拔けるといふ如きことは、もちろん一顧だにも値ひせぬ。重ねて言ふが、全體の要旨の歸着するところは、マルチノフが忘れてゐるところの、民主主義的變革と社會主義的變革との相違であり、民主主義的變革を支持することはできても、所定の瞬間に於て社會主義的變革を支持し得ないところの、かの尨大な農民および小ブルジョア人口の存在である。

わが賢明なるマルチノフの云ふところをもつと拜聽しよう。『明かに、ブルジョア革命の前夜におけるプロレタリアートとブルジョアジーとの鬪爭は、或る點において、その終局の段階、社會主義

革命の前夜における同一の闘爭とは異ならなければならぬ……』然り、これは明かなことである。もしマルチノフがこの相違がどこに存するかを熟考したなら、あのやうなナンセンスをも、また一般に小冊子をも書き上げるには及ばなかつたのだ。

『……ブルジョア革命の進行と成行とに影響を與へるための闘爭は、プロレタリアートが自由主義的および急進主義的ブルジョアジーの意志に革命的壓迫を加へ、種々の民主主義的下層社會がその先端部を要强してブルジョア革命をその論理的歸結にまで押し進めさせるといふ點にのみ現はれる。それは、プロレタリアートがいつの場合にも、ブルジョアジーをして、彼等を窒息せしめる絕對主義の桎梏に歸るか、しからずんば人民と共に進むか！　といふディレンマに當面せしめる點に現はれる』。

この綿々なる繰言がマルチノフの小冊子の中心點である。そこに彼の著書の精髓があり、その全『理念』が根ざしてゐる。この賢明なる理念はそもそも如何なるものであるか？　さて、我らの賢人がつひに思ひ當つたこれらの下層『國民』とは一體何か？　これこそ、かの全然××的民主的に振舞ふ數百萬の都市小ブルジョア層と農民層とである。さうして、プロレタリアート並びに農民階級が社會の先端部に加へるこの壓迫とは何か？　社會の先端部に抗して、プロレタリアートが國民と共に行ふこの前進運動とは何か？　これこそ、我が追隨主義者が躍起となつて反對する、かのプロレタリア

ートと農民階級の××的民主主義的××である！　追隨主義者は最後まで考へぬくことを恐れ、事物を在りのまゝに述べることを憚かる。だから彼は自分にも意味のわからぬ言葉を話し、自分にはその眞の意味がわからなくなつたスローガンを笑ふべき愚かな虚飾を施して臆病に繰返してゐる。從つて追隨主義者のみが、彼の結論の『最も興味ある』部分において、プロレタリアートと農民との××的民主々義的獨裁なき、社會の先端部への『プロレタリアートと國民の革命的壓迫』といふ如き不運に逢遭するにすぎない。——かういふことはマルチノフの如き人間のみが思ひつくことができる！　マルチノフは、プロレタリアートが社會の先端部を威嚇して、國民と共に前進することを願ふが、しかし同時に、新『イスクラ』の彼等の指導者と一緒に、民主主義の道を前進しないやうに決めてもらひたいのだ。なぜなら、民主主義の道は××的＝民主々的獨裁の道だからである。マルチノフは、プロレタリアートが先端部の意志に壓迫を加へる場合に、彼等に他意なきことを表明してもらひたいのだ。マルチノフは、プロレタリアートが先端部に『同意』を促し、ブルジョア革命をその論理的歸結たる民主主義的共和制にまで導かせることを願つてゐる。詳言すれば、プロレタリアートが先端部にこのことを促す場合には、國民と共に××のかういふ徹底を引受けたり、政權や民主主義的獨裁を擔當したりしないといふ、彼等自身の不安を打ち明けてもらひたいのだ。マルチノフは、プロレタリアートが民主主義的變革において前衛を形成することを願ひ、それ故にまた、

賢明なるマルチノフは、叛亂が萬一にも成功した場合の、××政府への參加の見通しを以てプロレタリアートをおどしてゐる。

反動的追隨主義をこれ以上發展さすことはできぬ。マルチノフが新『イスクラ』の追隨主義的傾向を究極まで押し進め、最も緊急重大なる政治的任務においてその傾向をはつきりと系統的に表現してくれたことに對して、吾々は聖人としてのマルチノフの前に低頭しなければならぬ。

## 三

マルチノフの混亂の根源はどの點に求むべきか？ 民主々義的變革と社會主義的變革とを混同した點に。『ブルジョアジー』と『プロレタリアート』との中間に介在する人民層（貧窮せる都市および農村人口の小ブルジョア大衆、半『プロレタリアート』、半企業家）の役割を忘却した點に。我らの最小限綱領の眞の意義を誤解した點に。マルチノフは、（プロレタリアートが社會主義的變革のために戰つてゐる場合に）、ブルジョア政府に參加することは、社會主義に應はしからぬことだといふことを聞きかぢつた。そこで彼は早速、この事を、吾々は××的なブルジョア民主々義と提携して、××的＝民主々義的變革や、かかる變革の完全なる實現のために必要なる××に參加してはならぬといふ風に『解釋』する。マルチノフは、我らの最小限綱領を讀んだけれども、社會主義的改革と

違つてブルジョア社會の地盤で實現される改革の嚴格な區別が書物に出てゐるばかりでなく、實生活に於ても最高の實際的意義を有するものであることに氣づかなかつた。マルチノフは、革命時におけて綱領が、行動に依る卽時の試練と適用とを受けるものであることに氣づかなかつた。マルチノフは、絶對主義倒壞の時期に際し、革命的＝民主々義的觀念を放棄することは、我らの最小限綱領の實現を放棄するに等しいものであることに考へ及ばなかつた。實際、我らの最小限綱領中に揭げてある一切の經濟的および政治的改革、共和制、國民××、敎會と國家との分離、完全なる民主々義的自由、徹底せる經濟的改革等の諸要求を想起して見よ。これらの改革をブルジョア社會内で實施することは、下層諸階級の××的＝民主々義的××なくしては考へ得られないことが明かになるではないか？　この場合、『ブルジョアジー』から區別されたプロレタリアートが問題たるのみならず、あらゆる民主々義的變革の能動的動力を形成する『下層諸階級』も問題たり得ることは明白ではないか？　下層諸階級といへば、プロレタリアートに加ふるに、小ブルジョア的生存を繫いでゐる都市および農村の數百萬數千萬の貧しい人口である。かういふ大衆の非常に多くの代表者がブルジョアジーに從屬してゐることは、疑ひのない事實である。しかし、民主々義の完全なる實現がこれらの大衆の利益であること、およびこれらの大衆が啓發されゝばされる程、民主々義の完全なる實現のための彼らの鬪爭がますます不可避的となることも、一層疑ひなき事實である。社會民主

々義者は、もちろん、都市および農村の小ブルジョア大衆の經濟上並びに政治上の矛盾せる性質を度外視するものでも、社會主義のために戰ふプロレタリアートの別個の獨自的な階級組織の必要を閑却するものでもない。しかしまた、社會民主々義者は、これらの大衆が『過去以外に未來をも、偏見以外に理性をも』有してゐて、彼等が革命的＝民主々義的××まで前進することを忘れず、また、〔これらの大衆の〕啓發は單に書物の上からのみ得られるものでなく、否、書物の上からといふよりも、むしろ人々の眼を開かしめる一の政治的學校たる××そのものの進行から得られるものであることをも忘れないであらう。かかる情勢の下にあつて、××的民主々義的獨裁の觀念を放棄する理論があるとすれば、それは政治的未熟さの哲學的理論づけだといふ外はない。

××的社會民主々義者は、かくの如き理論を侮蔑を以て斥けるであらう。彼は革命の前夜に際して、その『惡い結果』のみを指摘することをしない。それどころか、彼はまた有利な成行の可能を指摘するであらう。彼はまた、吾々が、ヨーロッパの素晴らしい經驗と、ロシアにおける勞働者階級の未曾有の情熱とを受け繼いで、××の松明を無知なる被抑壓大衆の面前に、未だ嘗てなかつたほど赤々と點火することができ、さうして（吾々がヨーロッパの革命的全世代の後繼者なるが故に）、民主々義改革の全體、我らの最小限綱領の全部を、未曾有の完全さを以て實現することができるといふことを夢想する——もし彼が濟度しがたき俗物でないなら、さうすることは彼の義務であ

る。吾々はまた、ロシア××を、數ケ月間の運動でなく數ケ年に亘る運動たらしめ、それを單に
からの些々たる讓歩に導びくのではなく、この權力の完全なる廢止に導びくまでに進展さすこ
ともできる。さうしてそれに成功したその時こそ、××の火焰が全ヨーロッパに燃えあがるであら
う。ブルジョア反動の下に憔悴せる西ヨーロッパの勞働者たちは、また彼らで敢然と身を起し、『ど
うすればよいか』を吾々に指し示すであらう。その時、ヨーロッパの××的躍進はロシアに反作用を
及ぼし、數年間の　　の一期から數十ケ年に亘る　　時代を作り出すだらう。その時…… 吾々は『そ
れから』何を爲すべきかを幾度となく演說する必要があらう。忌々しい遠方から、ゼネバからでは
なく、數千人の勞働者集會で、モスクワやペテルスブルグの　　で、ロシアの『農夫』の野外集會
の前で演說する必要が。

四

新『イスクラ』の俗物共やその思想的指導者および我が善良なる讃美歌作者マルチノフには、も
ちろんこの種の夢想はわけの分らぬ奇怪なことに見えやう。彼等は平民の×××××による我らの
是少限領綱の完全なる實現を恐れてゐる。彼等は、彼等自身の階級意識の代價を拂つて、急搾への
(しかし考へ貫はれてゐない)小冊子の初步知識を失ふことを恐れ、民主主義的改革に對する正當に

して勇敢なる措置を、ナロードニキの階級なき社會主義または無政府主義の冒險的飛躍から區別し得ないことを恐れてゐる。彼等の俗人根性は、正當にも彼等に向つて、急速なる進展の場合には、正しい道を認識して、複雜なる新たな問題を速かに解快することは、平凡な日常活動の場合よりも一層困難であるといふことを告げてゐる。それ故に彼等は本能的に私語する、願はくば神よ！ ××的＝民主主義的××の慘苦を追ひ拂ひ玉へ！ 願はくば神よ！ 親愛なる人々に沈默の山路を徐々に、注意深く進ませ玉へ……

新『イスクラ』をかくも寛大に支持したパルヴスが、主として最古老と最功勞者とを互選することが問題だつたかぎり、專らこの泥沼の社會にのみゐることをもはや屑しとしなかつたのに何んの不思議もない。彼がその社會でますます『生の嫌怠』を感じはじめたのに何んの不思議もない。かくして彼はつひに反抗した。彼は、『××を組織せよ』といふスローガン、新『イスクラ』を死ぬほど驚かしたあのスローガンの擁護にのみとどまらなかつた。彼は、『イスクラ』によつて特別のリーフレットに印刷された檄文――その際『イスクラ』は、『ジャコバン黨的』恐怖のために社會民主勞働黨に言及することを忘れた*――にのみとどまらなかつた。否々、パルヴスは、七世賢人アクセリロードの（あるひはルクセンブルグの？）過程としての組織に關する理論の夢魔から解放されて、蟹の如く後しざりする代りに、つひに前進することができたのである。彼はもはやマルチノフやマルトフ

* 私は我が讀者諸君が次の特色ある事實に氣づいたかどうかを知らない。新『イスクラ』がリーフレットとして發行した山ほどの屑紙のなかには，パルヴスの署名になつた立派な册子もあつた。『イスクラ』の編輯部がこれらのリーフレットを中止したのは，同紙が我が黨の名をもその出版所の名をもあげたくなかつたからである。

流の愚昧を際限なく矯正するといふ『無駄骨折』にかかはつてゐたくなくなつた。彼は直接（だが悲しいことにトロツキーと一緒に）××的＝民主主義的××の擁護を提唱し、社會民主黨は絶對主義の倒壞以後××××政府に參加しなければならぬといふ思想を提唱した。パルヴスが、社會民主黨は前方への勇敢なる歩みにたじろゐではならぬ、××的ブルジョア的民主主義と提携して共同に敵に『打擊』を加へることを恐れてはならぬ、しかし、それは、種々の組織が混同されないといふ條件（適當な時期に記憶さるべき）の下においてのみである、卽ち、別々に前進して、共同に打擊を加へ、利害の相違を隱蔽せず、自己の同盟者をも自己の敵と同樣に銳く監視しなければならぬ、云々と言つてゐるのは千倍も正しい。

だが、追隨主義者を見棄てた×××社會民主主義者のこれらすべてのスローガンに對する我らの同情が熾烈であらばあるほど、パルヴスが發した多くの不當な音調はそれだけ吾々に不快な感じを與へた。吾々がこれらの小さな誤謬を指摘するのは、あら探しからではなく、多くを與へられた者から多くを要求するといふ理由からである。もしパルヴスの正當なる態度が彼れ自身の不注意のために損はれるとすれば、それは今日最も危險なことであらう。なかんづく、トロツキーの小冊子へのパルヴスの前記の序文のなかの次の文句は、少なくともかかる不注意な文章中の一つである。『吾々が××的プロレタリアートをその他の政治的傾向から分離せんと欲するならば、吾々は精神的に

××運動の先頭に立つことを解しなければならず』(これは正しい!)、『他のものに比して一層革命的でなければならぬ』――これは間違つてゐる。といふのは、パルヴスがこの文句に與へた意味においてでなく、この序文を、パルヴスが言及してゐないマルチノフや新『イスクラ』から離れて、それ自體として受取る讀者の立場から見て間違つてゐる。幾年經つても色々な著書から一句一句を拔き取り、その意味を曲解する文筆家を眞似ないで、右の根本命題を辯證法的に、すなはち相對的に具體的に、あらゆる方面から考察するならば――この命題はパルヴスによつて追隨主義に向けられたものであることが明かになる。そしてしかるかぎりそれは正しいのであるが(特にパルヴスの次の言葉を參照せよ『もし吾々が革命的發達におくれてゐるならば』云々)、讀者は追隨主義のみを眼中に置くわけにも行くまい。革命家の陣營から出た革命の危險な敵のなかには、追隨主義者以外になほ別種の色々な人々がゐる。社會革命黨員もをれば、ナデシュディン(註二)の如く、事件の奔流にさらはれ、革命的文句に氣絶した人々も居り、あるひは本能が革命的世界觀を補つてゐる如き人々(ガポンの如き)もゐる。これらの人々をパルヴスは忘れた。忘れた理由は、彼の叙述、彼の思想的發展が自由でなく、彼自身が讀者に向つて忠告しようとするマルチノフ流に對する快き回想に阻まれたからである。パルヴスの叙述は充分に具體的でないといふのは、彼は、民主主義的變革の時期には不可避的であり、かかる時期における諸階級の不整頓を當然に反映するところの、ロシヤに現在せ

る種々の革命的潮流の全體を考慮してゐないからである。不明瞭な、往々にして反動的な社會主義的思想は、かかる時代においては、全く當然に革命的＝民主主義的綱領を蔽ひ、革命的文句の蔭にかくれてゐる。(社會革命黨員やナデシュディンを想起せよ。ナデシュディンが『社會革命黨』から新『イスクラ』に乘り變へたとき、彼は單に場所を變更したにすぎないやうに思はれてゐる)。かかる事情の下にあつて、吾々社會民主主義者は斷じて『他のすべての者に比して一層革命的である』といふスローガンを發するを得ず、また發しないであらう。吾々は文句を誇示して、通俗的な、高價なスローガン(特に農業方面に對して)を持たうとする、階級から離脫した民主主義者の革命主義を求めない。むしろ反對に、吾々はこれらのスローガンを批判的に取扱ひ、言葉の眞の意味、理想化された大事件の眞の內容を曝露し、××の最も高潮せる瞬間における諸階級に對する、並びに諸階級內部の色合ひに對する冷靜なる觀察を說くであらう。

註一、ナデシュディン——革命的＝社會主義的團體『スワボダ』(自由)の機關紙の創設者兼編輯員ゼレンスキーの匿名。

同樣に、パルヴスの次の主張も同一の理由から間違つてゐる。曰く、『ロシヤにおける××××政府は勞働者民主主義の一政府となるであらう』、『社會民主黨がロシヤのプロレタリアートの革命運動の先頭に立つ場合、この政府は一の社會民主主義的政府となるであらう』、しかして社會民主主義

的臨時政府は『社會民主黨の多數派を有する一政府となるであらう』と。偶然的な一時的挿話を言ふのでなく、歴史に痕跡を遺し得る一の永續的な××××を論ずるとすれば、これは決してさうではあり得ない。國民の壓倒的大多數に支持される一の××××のみが或程度に安定し得る（勿論絶對的でなく相對的に）にすぎないのだから、これは決してさうではあり得ない。ロシヤのプロレタリアートは、しかしながら、今日までロシヤの人口中の少數をなしてゐる。それは、半プロレタリアおよび半企業家の大衆、即ち都市並びに農村の貧窮せる小ブルジョア人口の大衆と結合した場合にのみ、强大なる壓倒的大多數となることができる。可能且つ好望なる××的＝民主主義的××の社會的基礎のかくの如き組合せは、當然にまた、××政府の組合せのなかに映し出されるであらうし、××的民主主義の種々雜多な代表者の參加を、あるひは彼等の優勢をさへ不可避的ならしめるであらう。これについて何かの幻想を描くことは極めて有害である。トロッキーが今日（悲しいかな、パルヴスと共に）『ガポン僧正は一度切り登場し得るにすぎない』、『第二世ガポンの登場すべき餘地はない』と論じてゐるのは……單に言葉の上の醉興たるにすぎぬ。もしロシヤに第二世ガポンの登場すべき餘地がないとすれば、吾々はまた眞に『偉大な』徹底せる民主主義革命のための餘地をも持たぬであらう。民主主義革命を偉大ならしめるためには、一七八九年――一七九三年を想起し、一八四八年――一八五〇年を想起しないためには、民主主義革命を凌駕するためには、巨

大なる大衆を積極的生活に、英雄的努力に、『根本的な歴史的創造』にまで奮起させ、彼等を恐るべき暗黒から、言語に絶した暴戻と絶望的虐政から救ひ出さなければならぬ。すでに××は大衆を奮起させてゐる、それはさらに高く彼等を奮起させるであらう——政府自身はその發作的彈壓によつてこのことを容易ならしめてゐる——しかし、これらの大衆および彼等の多數の『自生の』人民指導者の、あるひは農民指導者の、徹底した政治意識、社會民主主義的意識はもちろん問題たり得ない。彼等は一連の××的試練を經ることなくして、直ちに社會民主主義者となることはできぬ。といふのは、彼等の無知なるためばかりでなく（既に述べた如く、××は非常な速さで彼等を啓發しつゝある）、彼等の階級的地位がプロレタリア的でないからであり、歴史的發展の客觀的論理は、目下、社會主義的變革よりも、民主主義的變革を吾々の任務たらしめてゐるからである。

そして××的プロレタリアートはこの變革に全力をあげて參加し、或る人々の惘むべき追隨主義と他の人々の革命的空語とを投げ棄て、目まぐるしい事件の旋回に階級的斷定と意識とを與へるであらう。彼等は××的＝民主主義的××の前に逡巡することなく、斷乎として勇敢に前進し、共和制と完全なる共和的自由とのための鬪爭に熱烈に來り投じ、かくして眞に廣汎なる廿世紀に應はしい戰野が社會主義のための鬪爭のために作り出されるであらう。

昭和四年十月五日印刷
昭和四年十月十日發行

〔定價九十錢〕

譯者　東京市外世田ケ谷町經堂在家八九二　廣島定吉

發行者　東京市神田區美土代町二丁目一番地　中村德二郎

印刷者　東京牛込區早稲田鶴卷町四百三番地　谷口熊之助

検印　白楊社

發行所　東京神田區美土代町二ノ一　白揚社
振替東京二五四〇〇番
電話神田(25)二三八五番

▼この奥附に検印なきものは僞版につき御見當りの節は何卒譯者へ御一報願ひます▲

## ◎マルクス主義入門書

| 書名 | 型 | 頁數 | 定價 | 送料 | 内要 |
|---|---|---|---|---|---|
| エンゲルス著 堺利彦譯 社會主義の發展（改譯新版）（空想的社會主義より科學的社會主義へ） | 四六判並製 | 132 | ·50 | ·06 | 空想的社會主義から科學的社會主義へと發展して其處にマルクス主義が確立した。本書は之を正確に嚴密に敍述したもので、マルクス主義古典中本書程廣く讀まれたものはない。マルクス主義研究者の絕好なる入門書。 |
| ルイス・ブデイン著 山川均譯 マルクス主義體系（マルクス主義叢書第一編） | 四六判假裝 | 450 | 1·00 | ·12 | 本書はマルクス主義の全體を解說したところに特色を持つて居る。マルクス主義は哲學、經濟學說、社會學說と區別されて之を體系的に知る必要があるが故に、本書に依つて始めて完全に理解會得さるゝ。 |
| ウンターマン著 山川均譯 マルクス經濟學（同第二編） | 四六判假裝 | 450 | 1·00 | ·12 | マルクスの經濟學を平易に明快に、何人にも解り易く說いた書として世界的名著と云はるゝものである。今やマルクスの經濟學は日常常識化しつゝある際、本書は何人も必讀の要あり。 |
| ブハーリン監修 山川均譯 マルクス主義政治講話（同第三編） | 四六判假裝 | 420 | 1·00 | ·12 | 無產階級は經濟生活と政治とを如何に進展せしむべきか、マルクス主義的に之を敎へたものが本書であつて、明徹なる立論、直截なる說明、無二の敎典と云はる。 |

| 書名 | 著譯者 | 判型 | 頁數 | 定價 | 送料 | 内容 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 家族私有財産及國家の起原 | エンゲルス著 西雅雄譯（同第四編） | 四六判假装 | 330 | 1·00 | ·12 | 唯物論的歴史研究法の具體的解説、興味ある人類原始生活の批判的叙述、三千年來の我が文明の基礎たる一夫一婦制、私有財産制及國家組織の沿革と其の行方等々、社會人の一日も忘れられぬ問題を扱つたマルクス主義文献。 |
| 唯物史觀 | ブハーリン著 廣島定吉譯（同第五編） | 四六判假装 | 610 | 1·00 | ·12 | マルクスの遺圖に從ひ唯物史觀を平易明快に説明し、發展せしめたるものであつて、ABCと並んでブハーリンの二大名著と云はる。譯文は推敲を重ねたる名譯にして、定譯本とするに足る。 |
| マルクス主義階級意識學（イデオロギーのマルクス主義的研究） | ボグダーノフ著 林房雄譯（同第六編） | 四六判假装 | 448 | 1·00 | ·12 | 我々はイデオロギーをよくマルクス主義的に究明することによつて、社會的闘爭を明白に意識する、本書はイデオロギーの科學的系統的な教科書。 |
| 階級闘爭の史的發展 | ハインドマン著 山川菊榮譯（同第七編） | 四六判假装 | 420 | 1·00 | ·12 | 唯物史觀の立場から、古代より現代に至るまでの歴史を敍述し批判した名著として知られてゐる。社會進化の過程に於ける經濟的條件の重要さを力説しつゝ歴史を取扱つたる書にして、人類の正しい歴史を知る事が出來る。 |
| 經濟科學概論 | ボグダーノフ著 林房雄譯（同第八編） | 四六判假装 | 560 | 1·00 | ·12 | 本書はブルジョア經濟學の批判しつゝマルクス主義の下に一貫した新しき經濟科學を展開したものである。本書によつて商人の科學たる從來の經濟學は人類社會の經濟學に迄革命された。 |

## ◎マルクス傳及マルクス主義研究書

| 書名 | 形 | 頁 | 定價 | 送料 | 内容 |
|---|---|---|---|---|---|
| マックス・ベーア著 西雅雄譯 マルクスの生涯と學説 | 四六判箱入 | 280 | 1.80 | .17 | ヘーゲル及リカルドに對する思想的關係、エンゲルスとの交り、プールドンに對する論駁、共産黨宣言、階級爭鬪と無産階級獨裁、資本論其他マルクスの生涯學説の重要事實の壓縮。 |
| ヘルマン・ゴルテル著 堺利彦譯 唯物史觀解説 | 四六判箱入 | 320 | 2.00 | .17 | 唯物史觀はマルクス學の眞髓で或は之をマルクス社會學と云つても良い。原著は唯物史觀を簡明に解説したもの、世界名著の一として推奬せらるゝは他言を要しない。 |
| ブハーリン著 上西薫譯 社會主義の建設 | 四六判並製 | 180 | .60 | .06 | 社會主義建設過程に於ける諸問題を究明したもので僞革命家の一切の企圖を痛烈に分析批判しソヴエートロシアが經驗したる幾多の難關及前途に横はる重大問題に對し快力の鋭さを以て斷案を下してゐる。 |
| レーニン著 川内唯彦譯 人民の友とは何ぞや（レーニン叢書第一編） | 四六判假製 | 365 | 1.50 | .12 | ロシアにマルクス主義を建設して「人民派」の經濟主義的理論を擊破した名著である。其の展開したるマルクス主義の理論は我々の學ばねばならぬものであつて、何人も必讀を要するもの。 |

| 著者・譯者 | 書名 | 體裁 | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| ローザ・ルクセンブルグ著 横田千元譯 | 資本蓄積論（一卷） | 菊判箱入 | 320 | 2.30 | .21 |
| ローザ・ルクセンブルグ著 横田千元譯 | 同（二卷） | 菊判箱入 | 380 | 2.30 | .21 |
| マルクス著 大井元譯 | マルクス論文集 | 四六判箱入 | 280 | 1.80 | .18 |
| マルク・スター著 伊藤藤次郎譯 | 勞働者經濟學 | 四六判箱入 | 130 | .85 | .08 |
| エム・ベーア著 西雅雄譯 | 社會主義通史 | 四六判箱入 | 1250 | 3.80 | .28 |

**資本蓄積論（一卷）** 本書はマルクス資本論を補訂し發展せしめたと云はるゝ名著である。帝國主義の經濟的解明に對する一大文獻で、社會學徒は本書に接して始めて帝國主義の正體を明かに見る事が出來る。

**同（二卷）** 餘剩價値蓄積の問題は古來國民經濟學が死力を盡して解決するに至らなかつた所の難問題であつた。第二分册に於ては歴史上此問題に關して闘はされた三ツの論爭を詳細に取扱つてゐる。

**マルクス論文集** マルクスの主要論文「ヘーゲルの法理哲學批判」「猶太人問題」「普魯西國王と社會改良」を始め皆文獻として重き爲す論文七篇を輯めて本書を爲す。主として哲學の問題に關するものである。

**勞働者經濟學** 本書はマルクスの經濟理論を最も平易に解譯しそれを勞働者の日常闘爭に適用する事をロジカルに説明したもので實に理想的小書である。譯文は北澤早大教授の校閲を經て流暢確實。

**社會主義通史** 舊譯聖書時代のパレスティナに筆を起し古代中世近古近世を經てロシア革命及世界大戰直後に到る最近迄の一般社會主義及階級闘爭の歴史を最も獨創的に展開したものであつて、マルクス主義的立場から書かれた唯一の世界史である。

## ◎レーニン主義入門書

| 書名 | 型 | 頁數 | 定價 | 送料 | 内容 |
|---|---|---|---|---|---|
| ケルヂエンツイフ著 河村雅譯 レーニン主義研究への入門 | 菊判上製 | 492 | 1.60 | .16 | レーニン主義を最も具體的に説明したる文献としてロシアに於て、實行のレコードを作つた書である。「レーニンはレーニンより學べ」の筆法を以つて、全卷に巧みにレーニンの言葉を引用して正確無比、辯證法的に説明した近來の快著。 |
| 佐野學 西雅雄 編輯 レーニン主義の基礎 スターリン ブハーリン著作集第三卷 | 四六判假製 | 483 | 1.30 | .12 | 今や資本主義は死に瀕しつゝある。此の時代に於ける唯一の革命的階級たるプロレタリアートはレーニン主義の理論を以て武裝せねばならぬ。本書は最も簡潔に最も戰鬪的にレーニン主義の根本問題を解説したる著である。 |
| 佐野學 西雅雄 編輯 レーニン主義の爲の鬪爭 スターリン ブハーリン著作集第十二卷 | 四六判假製 | 578 | 1.30 | .12 | レーニン主義的に鬪爭した記錄、レーニン主義の爲に鬪爭する事は黨を强化し淨化する所以である。我々は本書に接して似而非なるマルクス主義を發見し、運動の進路に確信を與へらるゝであらう。 |
| ヤロスラウスキイ著 廣岡光治譯 反對派の誤謬 所謂共産黨内訌の史的發展 | 四六判並製 | 278 | 1 30 | .12 | トロツキズムより新反對派に至る迄反對派の誤謬を歴史的に嚴密に檢討したものである。眞のレーニニズムとは何か、マルクス主義は發展過程に於て如何なる誤謬に逢着するか、本書は之を名鏡の如く照し出す。 |

ルカッチ著　大井元譯

**レーニン**

發賣禁止

菊判上製

200

レーニンの理論と實行との具體的關係を闡明したる著。戰鬪的プロレタリアートはレーニンがマルクスを研究した態度を以てレーニンを研究しなければならぬ、全篇を通じて之をマルクス辯證法の研究と呼稱し得る。

エヌ・ブハーリン著　藏原惟人譯

**理論家としてのレーニン**

四六判並製

150

.60

.06

理論の無い所に革命はあり得ない。理論家としてレーニンは飽く迄も冷靜、綿密、然も純眞にして、敵は戰ふ前に己に其の堂々たる科學的論陣の前に崩壊するの觀があつた。レーニン主義研究の最も勝れたる文獻。

エヌ・ブハーリン著　佐々木孝丸譯

**社會民主主義の行方**

四六判假裝

230

1.20

.12

カウツキーの所論の反駁。民主主義より決定的に分離し得ない所の各國のプロレタリア革命の意義及び條件を解明して居る點に於て重要である。社會民主主義の理論が現在の帝國主義段階の下に於て反動化しつゝあるを暴露する。

レーニン著　高橋正男譯

**ゴーリキイへの手紙**

四六判假裝

220

1.00

.08

本書はレーニンよりゴーリキイへ宛てた書簡集であつて、二人の懐しき友情のうちに醸し出されるテーマの中には哲學論があり、政治學があり、透徹痛烈なる宗教論があり、藝術論がある。革命家及溫かい人間としてのレーニンを知るであらう。

レーニン著　ブハーリン著　廣島定吉譯

**農民問題のテーゼ**

三版

四六判假裝

150

.80

06

本書はブハーリンの「農民問題に就て」とレーニンのインタナショナル第二大會草案「農民問題に對する指導原理」とをまとめたものである。矛盾に滿てる農民階級の客觀的現實を究明するものとして、必讀書たるを疑はぬ。

レーニン全集
第一回配本

菊判六百五十頁
箱入上製美裝

# 唯物論と經驗批判論

定價金貳圓五拾錢
送料金廿七錢

レーニンの著述を體系的に究明する事は過程にある我が國社會人の必要缺く可からざる事である。それは世界解放運動の經典であり、歴史の今後の展開を知る所以であり、一面舊文明を葬る吊鐘でもある。之れ本社がレーニン全集を獨逸版ロシア版と對照して譯出し、紹介せんとするものにして、第一回は反動哲學への巨砲、ロシアにマルクス主義を確立したるレーニンの學術的偉業の最高峯として、世界に輝く大文獻、經驗批判論を紹介する。譯文は平明、嚴密、定譯として斷じて恥ぢぬものである。

レーニン全集
第二回配本
一九一七年（第二册）
（高山洋吉譯）
定價金貳圓五拾錢
送料金廿七錢

レーニン全集
第三回配本
イスクラ時代
（廣島、高山、田畑、武藤譯）
定價金貳圓五拾錢
送料金廿七錢

レーニン全集
第四回配本
一九一七年（第三册）
（高山洋吉譯）
定價金貳圓五拾錢
送料金廿七錢